

世

界遺産

石見銀山遺跡の 調査研究11

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 11

令和3(2021)年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

世

界遺産

石見銀山遺跡の 調査研究11

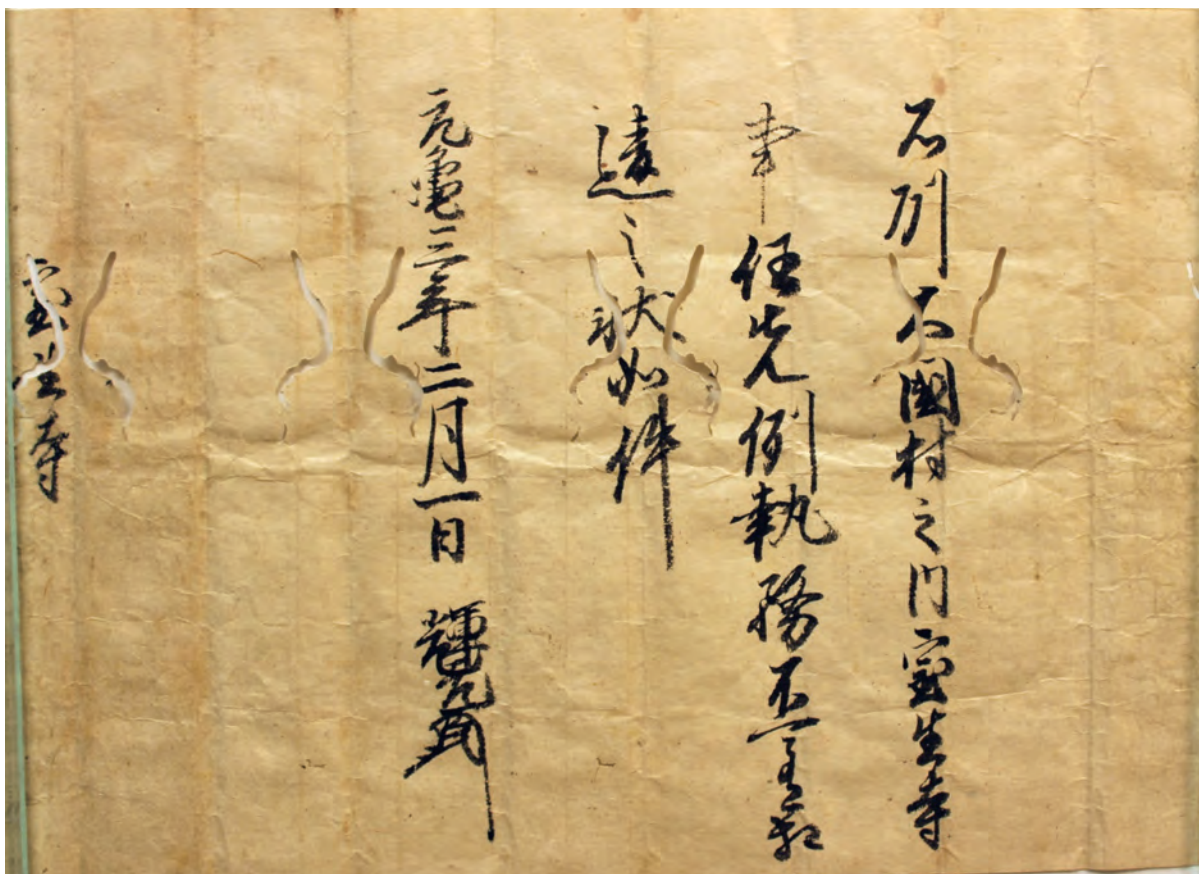
Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 11

令和3(2021)年3月

島根県教育委員会・大田市教育委員会



大谷地区の岩盤加工遺構



毛利輝元安堵状（金皇寺文書）

■例 言

1. 本書は、鳥根県教育委員会と大田市教育委員会が実施した令和2年度の石見銀山遺跡総合調査研究事業の概要と、県市担当職員及び調査関係者が共同事業で行っている調査研究活動の成果を掲載するものである。
2. 石見銀山遺跡の総合調査研究は、大きく基礎調査研究とテーマ別調査研究の2分野で構成されており、令和2年度に実施した調査事業の概要をⅠにまとめた。また同年度に石見銀山に関係して発表された論文等の関連情報をⅡに掲載した。Ⅲでは県及び市が行う総合調査研究事業の成果の一部を掲載した。
3. 本書の編集は、大田市教育委員会教育部石見銀山課の協力を得て鳥根県教育庁文化財課世界遺産室で行った。

■目 次

Ⅰ 令和2年度の総合調査研究事業

1. 総合調査研究事業の概要	3
2. 基礎調査研究事業	
(1) 発掘調査	4
(2) 考古資料分析調査(科学調査)	5
(3) 石造物調査	5
(4) 文献調査	6
(5) 人権・同和問題調査	7
(6) 自然・環境調査	8
(7) 資産保全調査	8
3. テーマ別調査研究事業	
(1) 経緯	8
(2) 港町温泉津の景観と変遷	9
(3) 東アジア鉱山の比較研究	10
4. 調査整備活用委員会の開催	10
5. 調査研究成果の公表	
(1) 鳥根県	11
(2) 大田市	12

Ⅱ 令和2年度の石見銀山遺跡関連報告書・出版物

報告書 論文 関係書籍等	15
--------------	----

Ⅲ 石見銀山遺跡関連調査研究

伊藤 創・西尾克己・持田直人

邑智郡美郷町・下波多野家墓地における石塔・墓標の変遷	19
----------------------------	----

伊藤大貴・清水佳那子

史料紹介 鳥津屋口番所文書目録	縦組23・50
-----------------	---------

伊藤大貴

史料紹介 金皇寺文書所収の中世文書について	縦組13・60
-----------------------	---------

生田光晴

近世温泉津町における廻船問屋の住居形態について

－木津屋『中嶋家文書』の屋敷図分析－	縦組1・72
--------------------	--------

I

令和2年度の総合調査研究事業

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 11

1. 総合調査研究事業の概要

島根県と大田市では、石見銀山遺跡の世界遺産登録を目指して平成8年度から総合調査を実施し、その成果により平成19年7月2日に世界文化遺産に登録された。しかし、石見銀山遺跡については、その価値がわかりにくいこともあり、登録後も遺跡のもつ価値をより高めるために調査研究を継続して実施している。

世界文化遺産登録後に行われている調査研究は、それ以前から実施していた基礎調査研究（考古学的調査研究、歴史・民俗学的調査研究、自然科学的調査研究）に加え、テーマを絞り込み、多分野の研究者が共同して調査研究を行うテーマ別調査研究も開始することになった。

基礎調査研究は、発掘調査、石造物調査、文献調査、科学調査、間歩調査、地図・地名・人権・同和問題調査などを組織的に実施しており、それらの成果はまとまり次第、報告書を刊行している。登録後には生物環境調査と資産保全調査なども追加して実施している。

テーマ別調査研究は、「最盛期石見銀山の復元」と「東アジア鉱山の比較研究」を大きなテーマとした、およそ3年周期の共同調査研究である。

この研究では、考古学、文献史学、歴史地理学、地質学、鉱山学、植物学などの外部研究者に石見銀山遺跡客員研究員として参加を求め、年2～3回の共同検討会を開催しながら進めている。

第1期（平成20～22年度）の「最盛期石見銀山の復元」では、石見銀山遺跡の景観復元をテーマとして、土地利用状況と鉱山社会の復元等について研究を行った。「東アジアの鉱山比較研究」は、東アジア地域の鉱山遺跡と兵庫県生野銀山など国内鉱山、久喜大林遺跡など石見銀山御料の鉱山について研究を進めた。研究の成果は、平成22年度に『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書1』として刊行した。

第2期（平成23～25年度）からは、「最盛期石見銀山の復元」について銀の流通と流通拠点に焦点を当て、主に街道と港・港町を対象とした調査研究を

行った。平成28年度に「最盛期」と「国内鉱山の比較研究」の成果をまとめた『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書2』を刊行した。

第3期（平成26～30年度）は、「石見銀山鉱山町の変遷」をテーマとして、石見銀山の鉱山町を形成する大森町・銀山町の変遷と画期を明らかにするための調査研究を実施し、平成30年度に『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書4』を刊行した。

「東アジアの鉱山比較研究」は、平成25～28年度に中華民国新北市に所在する瑞芳鉱山および金瓜石鉱山を対象として調査研究を実施した。瑞芳鉱山は近代において石見銀山の開発に関わった藤田組による開発が行われている。ふたつの鉱山の調査研究は、現地にある黄金博物館と島根県教育委員会、琉球大学が共同で行った。研究成果は平成28年度に『石見銀山テーマ別調査研究報告書3』として刊行している。

令和元年度は登録後12年が経過したこともあり、調査研究全体の見直しを含めた再整理・検討期間とし、基礎調査研究の再編、新規テーマ研究の検討を行った。

この見直しにより基礎調査研究は、考古学的調査研究（発掘調査・考古資料分析調査）、石造物調査研究、文献調査研究（文献史料・建造物・人権・同和）、自然・環境調査研究（生物環境調査・間歩調査等）、資産保全調査研究、に組み替えを行った。

テーマ別調査研究のうち、「石見銀山の歴史」（「最盛期石見銀山の復元」「石見銀山鉱山町の変遷」）の新規テーマは「港町温泉津の景観と変遷」と決定し、令和2年度から研究を進めている。「東アジア鉱山の比較研究」については、「鉱山道具」の調査研究に取り組んでいる

また、調査研究の成果は、展示等を通じて積極的に情報発信をしていくこととなった。

本調査研究事業に伴う令和2年度の成果物は、発掘調査報告書、石造物調査報告書、歴史文献調査報告書、本年報兼調査研究報告を刊行している。詳細は後掲の刊行物一覧のとおりである。

（島根県：間野大丞）

2. 基礎調査研究事業

(1) 発掘調査

令和2年度から、3年計画で大谷地区の発掘調査に着手した。

初年度となる本年は、銀山川左岸で現在の道路北側に当たる平坦地を調査地点に選定し、調査を開始した。

選定にあたっては、道路沿いの条件の良い立地と、背後の岩盤には2基の坑道に加え加工痕が顕著に観察されることから、各時期の岩盤加工遺構が検出されると推定されることが根拠となった。さらに、寛政元年頃製作の『石見銀山図絵図』に、選定場所付近に「御銀吹所」と記された建物が描かれていることから、江戸後期の吹屋遺構が検出される可能性が高いことも選定の根拠となった。

調査範囲は、岩盤直下の平坦面全面及び、岩盤に直行する方向に幅2mのトレンチを5本設定した。

調査の結果、岩盤からは、岩盤を垂直に切り落とし、平坦面を確保した加工痕と、鉱脈の細脈を追った微細な採掘痕が確認された。岩盤加工は複数回行われており、それに伴う平坦面にも、複数の遺構面が確認できた。加工の時期については明確にし得なかったが、平坦面には、水溜と考えられる掘り込みや、排水等の機能が想定される溝などを検出している。また、調査地点西側の平坦面では石列によって区画された段差も確認された。

平坦面の性格については、明確にはできなかったが、水溜と推定される遺構の存在や、平坦面にユリカスが堆積していたことから、選鉱施設が設置されていた可能性を想定している。また、岩盤を掘り込んだ柱穴から、平坦面には簡易的な小屋掛けが行われていたと推定している。

岩盤の前面で行ったトレンチ調査では、第1トレンチで、江戸時代後期以降の石組水路とそれに伴う土間面及び、礎石と考えられる遺構を検出した。下層確認用に設けたサブトレンチからは、下層にも複数の遺構面が存在することが確認されている。

第4トレンチでは、江戸時代後期から明治期にか

けての被熱した土間面及び、礎石と考えられる遺構を検出した。礎石状の遺構については、一部欠損しているものの、岩盤の方向と揃えて方形に成形され、上面は平らに加工されていた。土間面上は、黄色土で薄く整地されており、さらに意図的に充填されたと考えられる白色～黄色粘土が堆積していた。こうしたことから、付近の土間面上には炉跡等の製錬遺構が存在する可能性が高いと推定している。

第5トレンチの上段では、マンガンの沈着により非常に硬く締まった遺構面を複数面確認した。各遺構面の時期は不明である。下段では、成形された岩盤の前面に岩盤に平行に並べられたレンガと延石を検出した。こうした成果から、下段では岩盤に平行に何らかの構築物が存在していたと考えられるが、樹木により、調査区を拡張しての確認はできなかった。

これらの調査成果から、第1トレンチと、第4トレンチでは、建物の存在が推定されるが、両者が同一の建物である可能性は低く、調査地点においては、複数の建物が存在していたと推定され、少なくともその内第4トレンチで検出した1棟については、製錬遺構を伴う可能性がある。

こうしたことから、次年度についても第1トレンチ及び第4トレンチを中心に、調査区を拡張し、検出遺構の内容確認を行うと共に、遺構密度の低い場所を選定して、下層確認を実施する予定とした。

(大田市：新川 隆)



第1トレンチ検出状況

（２）考古資料分析調査（科学調査）

石見銀山遺跡の実態を、自然科学的な手法で解明する調査を行っている。

大久保間歩坑内で確認された明治期のドッグスパイク（トロッコ用のレールを枕木に留めるための釘）の保存について、奈良文化財研究所の柳田明進氏から分析指導を受けた。また枕木の木質が遺存していた1点について、島根県立古代出雲歴史博物館で保存処理を行った。ひきつづき処理後の経過観察を進めていくこととしている。（島根県：伊藤徳広）



ドッグスパイク（保存処理後）

（３）石造物調査

石見銀山遺跡の歴史的過程を石造物という観察対象を通して明らかにし、鉱山遺跡としての特性を把握することを目的に実施している。石造物には様々なものがあるが、現在は鉱山の盛衰が直接的に反映されと考えられる墓石を重点的に調査している。

令和2年度からは、これまでの四半期世紀におよぶ調査成果を総括する作業に着手している。調査を実施した石造物について、時期・種別ごとの分布、宗派、戒名などに関するデータの解析を進めている。令和2年度は石見銀山の石塔（宝篋印塔・五輪塔）の系譜、銀山開発前後で様相の変化を解明するため、仁摩町・温泉津町において調査を実施した。調査はテーマ別調査研究「最盛期石見銀山の復元研究」において取り上げた金皇寺（仁摩町大国）と温泉津町湯里の石造物群を対象として実施した。

金皇寺の調査は5月25日から8月31日まで実施し



「蕨手文」に類似した文様の宝篋印塔（温泉氏墓奥）

た。その後、金皇寺の宗教法人解散手続きに伴う墓地改葬と地藏堂解体が行われることとなり、10月から11月にかけて追加調査を実施した。調査の結果、金皇寺創建以前と考えられる15～16世紀の石造物と江戸時代中期の在銘品を確認した。

温泉津町湯里では薬王庵跡と温泉英永墓周辺のほか、あらたに確認された温泉氏墓の谷奥に所在する石造物を対象とした。調査は7月から11月にかけて実施し、約130点を実測した。石造物の石材は大江山系デイサイトが主体である。そのなかには三連一対の珠文を陽刻した宝篋印塔基礎など、特異な形態・意匠をもつものが見つかった。また石見銀山の宝篋印塔に特有の「蕨手文」と類似した文様をもつ砂岩製宝篋印塔屋根も確認している。

調査指導会は3回開催した。7月22日と12月1日に、中村唯史氏（三瓶自然館）から石材に関する指導を受けた。11月5日には、池上悟氏（立正大学）ならびに佐藤亜聖氏（元興寺文化財研究所）、西尾克己氏（テーマ別調査研究客員研究員）から石造物の年代等について調査指導を受けている。

以上の調査で、石見銀山の石塔（宝篋印塔・五輪塔）の系譜に関する貴重な情報を得ることができた。

今年度調査のうち金皇寺跡についての成果を、下記報告書に収録している。

『石見銀山遺跡石造物調査報告書20－金皇寺（仁摩町大国）－』

（島根県：間野大丞・伊藤徳広）

（４）文献調査

これまで文献調査においては、以下の４点を研究目的として調査研究と、石見銀山に関する文献史料の収集を進めてきた。

- ・石見銀山の支配・社会・技術・経済について解明をめざす。
- ・周辺地域を含め悉皆的に中近世史料の調査を行う。
- ・石見銀の国内流通（日本海水運等）、銀を介した対外貿易の情報を収集する。
- ・鉱山の比較研究へ向けて国内外鉱山史料の調査と収集を行う。

【文献調査実施状況】

大森町域または銀山料内に所在する商家・銀山師・地役人家に残された史料、また県内にて関係史料の調査を行った。令和２年度の主な文献調査の実施状況は次のとおりである（史料名、所蔵先、調査期間）。

- ①熊谷家文書（大田市教育委員会寄託、通年実施・継続中）
- ②大田市役所温泉津支所保管文書（大田市教育委員会保管、令和２年５月～継続中）
- ③中村久左衛門氏所蔵文書（古代出雲歴史博物館寄託、令和２年８月・１０月）
- ④満行寺文書（個人蔵、令和２年７月～１２月）
- ⑤金皇寺文書（大田市教育委員会蔵、令和２年１０月～継続中）

【主な文献調査の概要】

令和２年度に実施した文献調査の主な概要は次のとおりである。

①熊谷家文書

江戸時代到大森代官所の用達・郷宿などをつとめた大森町の有力町人の家に伝来した古文書。今年度は新たに整理を進めている文書が多くなったため、識別のため群番号を整理・付与した。

新たに作業に着手したのは、部屋番号21・42の部屋に所在した文書群。書状類の束や各種通帳のほか、文政年間の城上神社の祭礼に関する帳簿類、文久年

間の大森町の御勘弁米買請人別書上帳、天明・寛政年間などの幕府巡見使関係諸記録、嘉永年間の大森代官所の御用金勘定帳類、近世後期の熊谷家が各方面とやり取りした際の書状控などが含まれている。

現在は未整理分を中心に作業を進めており、整理作業は終了に向かいつつある一方で、今後の課題としては将来的な目録データの公開を視野に目録内容の統一を図り、細部の修正を行う作業が必要である。なお、既に目録作成済みのデータの一部を修正する作業に着手している。

②大田市役所温泉津支所保管文書

テーマ研究「港町・温泉津の景観と変遷」と連動した調査の一環で、大田市役所温泉津支所が保管する文書類（温泉津町誌編纂室収集資料など）を調査した。その過程で未整理の古文書原本をいくつか確認しており、調査整理と保存を実施するために石見銀山世界遺産センターへ移管した。

これまで未調査であった温泉津町誌編纂時に収集された文書群を全点撮影し、目録の作成を行っている。今回整理が完了した文書群は温泉津の廻船問屋・木津屋の旧蔵史料の一部を構成していたと推測され、ほぼすべて近代文書であった。とりわけ明治期の海運業関係史料や明治10年代の温泉津村役場関係記録類がまとまった形で残されていた。

現在は温泉津に隣接する小浜村にて廻船業を営んでいた吉野屋（山本家）の古文書を整理中である。

③中村久左衛門氏所蔵文書

江津市桜江町の旧家の古文書。屋号は「西田屋」。中村家の先祖は戦国期に温泉津に屋敷を構えていたが、後に大貫村へ移住。近世には邑智郡・那賀郡内でたたら製鉄や鍛冶屋を営んでいた。西田屋関係史料だけでなく、大森代官所の銀山方役所に関係する文書類も多数伝来する特徴がある。一説に幕末の長州戦争時に同家に預けられたとされる。

今年度、島根県立古代出雲歴史博物館に寄託された関係で同館・島根県古代文化センター職員と共同で整理作業を行った。目録未済分や目録内容の修正が必要な箇所などを確認しており、継続して整理を実施する予定。特に大森代官所関係文書は銀山方役

所の御用留など記録類を中心に未活用の史料が多く、今後の研究と活用が期待される。

④満行寺文書

大田市仁摩町天河内に所在する浄土真宗寺院の古文書。満行寺は石見地方東部における真宗の拠点寺院のひとつであり、戦国期には石見銀山とも関係があった。今回、中世～近代までの文書を全点デジタルカメラで撮影の上、目録を作成した。

中世文書の一部（石見小笠原氏関係）は井上寛司氏の史料紹介があるほか、天正期の本願寺からの書状類は小泉義博氏が紹介・考察している。近世文書は17世紀初頭の文書から残されており、近代に至るまで石見銀山料内の真宗寺院の様相を知ることが可能である。全体的な古文書の保存状態も非常に良好で大田市内でも有数の貴重な文書群といえる。

なお、今回の調査では満行寺住職・小笠原寧之氏の多大なご高配を賜った。記して謝意を表したい。

⑤金皇寺文書

大田市仁摩町大国に所在する浄土宗寺院の古文書。これまで未確認の文書であり、今年度石造物調査を実施した際に発見された。現在は大田市教育委員会に寄贈され、石見銀山世界遺産センターで保管している。新出の中世文書5点を含んでおり、中世～近代までまとまった数の文書が残されている。詳細な目録の作成は来年度着手予定である。なお、中世文書の詳細は本書掲載の史料紹介を参照されたい。

【文献調査指導会の開催】

文献調査を実施するにあたり、有識者から調査指導の助言を受けた。今年度は8月22日と令和3年2月7日の2回実施した。開催場所は石見銀山世界遺産センターである。

なお、通常の文献調査指導会とは別に井上寛司氏（島根大学・大阪工業大学名誉教授、日本中世史）の調査指導を受けた。これは新出の中世文書を含めた金皇寺文書の発見に伴い、適切な環境下での保存活用を行うにあたっての助言を必要としたためである。実施日は10月14日。開催場所は石見銀山世界遺

産センターである。



文献調査風景

【文献調査報告書の刊行】

毎年文献調査の成果として報告書を刊行している。概要は次のとおり。

今年度は近世の大森代官所において銀山附地役人をつとめた山中家に伝来した古文書目録を『石見銀山歴史文献調査報告書16石見銀山附地役人山中家文書目録』として刊行した。

石見銀山附地役人の家伝史料群は複数の家で比較的まとまった点数が確認できる点で全国的にも貴重であり、江戸幕府の支配や鉱山経営を考える上でも重要な情報を含んでいる。山中家文書目録の一部については、1980年代に島根県教育委員会が作成した調査報告書などに掲載されているが、今回の報告書ではこれまで未紹介の史料を含めた全容を明らかにすることができた。今後の研究・活用が大いに期待される。

なお、今回の報告書刊行については、山中孝友氏の多大なご高配を賜った。記して謝意を表したい。

（島根県：伊藤大貴）

（5）人権・同和問題調査

石見銀山遺跡の調査研究においても、近世の身分制度や現在の人権・同和問題を十分に理解し、歴史的事実の解明によって、これら諸問題の解決を目指さなくてはならない。本事業では、調査研究に加えて研修会と先進地における関連施設の視察を実施し

ている。

令和2年度は、令和3年1月26日に石見銀山資料館長の仲野義文氏をお招きして、「鉱山と女性」と題して女性史の視点からの講演を行った。開催場所は石見銀山世界遺産センターである。新型コロナウイルス感染症対策を実施しながらの講演となったが、島根県・大田市の関係者を中心に参加者は35名であった。

(島根県：伊藤大貴)

(6) 自然・環境調査

[生物環境調査]

石見銀山遺跡は「石見銀山遺跡とその文化的景観」という名称で世界遺産に登録されているように、かつての鉱山経営の痕跡が自然景観と一体となっており、残っている点が高く評価されている。このため、平成18・19年度に相関植生図の作成、生物相調査を実施し、代表的な自然環境相を有する地点・地域の把握を行った。その結果を受け、平成20年度からその年次変化を把握するための定期的な調査（モニタリング）を実施している。

生物相調査では、銀山川流域、山吹城跡登山道、金生坑～釜屋間歩、鞆ヶ浦、沖泊、石見銀山街道の各地区の中で、必要な箇所をそれぞれ選定して踏査を実施し、確認された生物種や周辺の植生状況などを記録して自然環境の概略を把握した。調査方法は、踏査ルート歩きながら生物相の記録を行い、コウモリ等の特定の生物相が見込まれる地点でその確認調査を実施した。生物相の記録は、短期的な影響が出やすい移動性の低い生物を中心とし、中・大型哺乳類や鳥類は適宜記録した。

上記の結果を踏まえ、対象地域の主要箇所から今後のモニタリング調査に適した箇所と項目を絞り込むとともに、継続的に実施可能な手法を検討した。それを受けて銀山川遊歩道、山吹城登山道、本谷地区、鞆ヶ浦港、沖泊港について年2回（春・秋）の踏査を行い、指標種として設定した動植物の有無を確認するとともに、生物環境の概要を記録した。また、大久保間歩、矢滝城跡、石見城跡において、特

定動植物（コウモリ類、洞窟性昆虫類、ギフチョウ、ラン類など）の調査を行い、生息状況を記録した。

現在までのところ、世界遺産登録以後の見学者の増加による、生物環境の大きな変化は見られないが、今後も継続的に調査を実施していく予定である。

なお、調査については公益財団法人しまね自然と環境財団に委託して実施した。

[間歩の現況確認調査]

県が鉱業権を所有する間歩について、現況確認調査を実施した。調査の結果、劣化がみられた5箇所について対策工事をおこなった。調査および工事は、昭和開発工業株式会社に委託した。

(島根県：間野大丞・伊藤徳広)



間歩の現況確認調査

(7) 資産保全調査

石見銀山遺跡に多く所在する石造物等について、劣化・損傷の原因を究明し、今後の適切な保存方法を検討するために実施している調査である。

令和2年度は豊栄神社石造物（水桶・灯籠）について、経過観察を行った。また、石造物の保存環境のデータを取得するため、温湿度記録計等を設置し、周辺の温湿度の変化を観察している。

(島根県：伊藤徳広)

3. テーマ別調査研究事業

(1) 経緯

島根県教育委員会では、石見銀山遺跡の価値をより高めるために、世界遺産登録前から行っている基

礎調査研究に加えて、平成20年度からテーマを絞った調査研究をスタートさせた。

第1期のテーマ選定にあたっては、長年にわたって行われた発掘調査の成果や石造物悉皆調査などの成果から石見銀山遺跡の最盛期の広がりやを推定し、景観復元を主要なテーマとして「最盛期石見銀山の復元」を掲げた。

また、もう一つのテーマとして、世界遺産登録時の付帯事項としてユネスコから比較研究を要請されていることから、石見銀山と国内外の諸鉱山との関係解明を目的とした「東アジアの鉱山比較研究」をテーマに設定した。テーマ別調査研究は、考古学、文献史学をはじめ歴史地理学や鉱床・地質学など関係諸科学の研究者を客員研究員に委嘱し、島根県教育委員会・大田市教育委員会との共同研究として開始した。

この調査研究は1期を概ね3年間とし、平成22年度に『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書1』を刊行した。しかしながら、計画していた報告の一部が集録できず、またわずか3年間の調査研究だけでは最盛期石見銀山の復元は困難であったため、計画していた再現イラストの作成を見送り、計画を変更して第2期も同テーマを継続していくことになった。

第2期は平成23年度から3年間にわたり銀の流通とその拠点をテーマに街道と港・港町を対象に調査研究を行った。平成27年度までに成果の集約を行い、平成28年度に『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書2』として刊行されている。なお、第1期で掲載できなかったものについても同報告書で公表している。

「東アジアの鉱山比較」についても調査研究を同時に進め、上記報告書で公表しているが、平成25年度から3年間で実施した台湾鉱山との比較研究については『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書3』として平成28年度に刊行されている。この鉱山比較についても3年間周期で終了すべき研究テーマとは言いがたく、今後も継続して調査研究を行っていくことにしている。

平成26年度からは「石見銀山鉱山町の変遷」をテーマとして第3期の研究に着手し、その成果については『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書4』として平成30年度末に公表した。

これまでの研究成果については上述したとおり報告書として刊行されているが、展示等の一般向けの情報発信に活かされていなかった。その反省も踏まえて、令和元年度は、一般に分かりやすく展示に活かせることができるテーマを再検討することになった。

テーマの見直し及び新規テーマ設定にあたっては、12月11日に第1回の客員共同検討会を開催して選定方法の確認を行った後、考古及び文献のそれぞれの部会でテーマ案の検討をすすめた。3月2日に第2回客員共同検討会を開催して、「港町温泉津の景観と変遷」のテーマの研究を次年度から実施することとなった。

なお、テーマ別調査研究の成果は、報告書および本誌『調査研究』でも掲載し、随時公表することとしている。また、展示などを通じて積極的に情報発信をおこなうこととしている。

テーマ別調査研究にかかる客員研究員は以下のとおりである。

「石見銀山の歴史（港町温泉津の景観と変遷）」

西尾克己（松江市史松江城部会長）

「東アジアの鉱山比較研究」

鳥越俊行（奈良国立博物館学芸部保存修理指導室長）

仲野義文（石見銀山資料館館長）

（2）港町温泉津の景観と変遷

このテーマ別調査研究事業は令和2年度からの3年計画で、以下の目的を掲げ進めることとした。

- 1) 温泉津湊の成立と発展の歴史を明らかにする。
- 2) 鉱山町の盛衰と港町の盛衰の比較を行い、港町の機能変化を探る。
- 3) 港町の景観と暮らしの構造を明らかにする。

研究は県市職員を中心に、客員研究員も参画する体制とし、考古、建造物、文献の各分野で研究を進

めることとなった。

考古部門では、温泉津地区発掘調査の整理作業を進めるとともに、仁摩温泉津地区の遺跡集成、温泉津地区周辺の石造物調査が進められた。文献調査では、第1回客員検討会において、温泉津のまちなみが寺院を核として形成された可能性が示された。

客員検討会等の会議は下記のとおり開催した。

【客員検討会】

第1回

日時：8月4日

場所：温泉津まちづくりセンター

視察：金剛院墓地、恵光寺等の視察

報告：山手貴生「石見銀山遺跡温泉津地区の発掘調査」

間野大丞「湯里の石造物」

伊藤大貴「中世温泉津の成立と展開」

第2回

日時：令和3年3月27日

場所：石見銀山世界遺産センター

報告：生田光晴「温泉津木津屋にみる有力商家の住居形態について」

伊藤徳広・間野大丞「温泉津廻船問屋の墓所について」

乗岡実「全国で活躍した備前石工とその作例」

新川隆「温泉津および周辺地区の石垣と石工」

【調査指導会】

「温泉津地区他の石垣」

日時：11月29日、令和3年3月28日

場所：温泉津まちづくりセンター、温泉津市街および周辺現地（11/29）

野井神社（大田市長久町）他（3/28）

指導者：乗岡実（丸亀市教育委員会）

西尾克己

「温泉津地区の石塔・石垣の石材」

日時：令和3年3月2日

場所：世界遺産センター、温泉津市街

指導者：中村唯史（三瓶自然館）

【部会】

考古部会 6月22日、9月23日、10月30日、12月

18日、令和3年2月15日、同3月15日

文献・建造物部会 7月21日

（3）東アジア鉱山の比較研究

このテーマ別調査研究事業は、石見銀山遺跡の特色を明らかにするために、国内外に所在する各鉱山との比較研究を行うものである。研究の枠組みとして、島根県内の鉱山、日本国内の鉱山、東アジア及び海外の鉱山の3段階に区分して調査研究を行っている。

国内鉱山の比較研究は、石見銀山からの技術伝播が指摘されている佐渡金銀山を対象とすることとした。令和2年度からは、佐渡を含めた国内鉱山の道具を比較するためのリスト作りを開始している。

また海外鉱山比較は、平成29年度から、東アジアに限定せず、同時代の世界各地の鉱山について国内の研究者から情報を収集し、石見銀山との比較が可能な研究項目の抽出を行って比較研究を進めてきた。今年度は昨年度までの検討をふまえて、研究テーマ、研究計画の策定に取り組んでいる。

（島根県：間野大丞・伊藤徳広）

4. 調査整備活用委員会の開催

世界遺産に登録された平成19年度以降、平成25年度までは「調査活用委員会」の中で学術的調査や整備・活用のあり方などについて各分野の専門家から指導助言を受けてきた。

平成26年度からは、従前の「調査活用委員会」を、調査研究に関わる専門的な課題や方向性について協議する「調査専門委員会」と、調査研究に関する包括的な指導・助言、遺跡の保存管理及び整備活用に関する包括的な指導・助言を受ける「調査整備活用委員会」の2つに再編成した。

しかしながら、各会の設置目的に応じた指導・助言を得て、施策や調査研究に反映することが十分にできていなかったことから、令和2年度から調査専門委員会を調査整備活用委員会に再編統合することとした。調査整備活用委員会の構成は以下のとおりである。

〈調査整備活用委員会〉

- 太田 洋子（熊谷家住宅 家の女たち代表）
 大矢 敬子（島根県国民保険団体連合会常務理事）
 川口 純（DOWA ホールディングス（株）執行役員）
 荻谷 勇雅（大田市伝統的建造物群保存地区保存審議会委員）
 黒田 乃生（筑波大学大学院教授）
 佐々木 愛（島根大学法文学部教授）
 田辺 征夫（（公財）元興寺文化財研究所所長）
 津村真輝子（（公財）古代オリエント博物館研究部長）
 内藤ユミザベル（日本イコモス国内委員会理事）
 仲野 義文（石見銀山資料館館長）
 中村 哲郎（中村ブレイス（株）専務）
 松村 恵司（奈良文化財研究所所長）

（1）第7回調査整備活用委員会

令和2年11月12日（木）、スカイホテル大田で開催した。出席委員は太田洋子、荻谷勇雅、田辺征夫、津村真輝子、内藤ユミザベル、仲野義文、中村哲郎の7名であり、文化庁からは文化資源活用課文化遺産国際協力室の西川英祐調査官の参加があった。

議事のうち協議・報告事項としては、調査研究事業、遺跡整備及び建造物修理事業、観光動態、情報発信事業等についての報告を行った。このなかで、観光動態に関しては、コロナ禍を受け観光客が半減した一方、県内を中心とする修学旅行生が急増したことが報告された。委員会では、コロナ禍における情報発信、教育・普及の取り組み、観光プログラムの充実等について意見交換がなされた。

（島根県：間野大丞）

5. 調査研究成果の公表

島根県と大田市では講座や講演会を開催して、調査研究の公表を行っている。

（1）島根県

令和2年度はコロナ禍のため、当初計画していた集客型の事業を動画配信に変更する見直しをおこなった。また大田市と共同で、世界遺産センターの展示、ホームページ・フェイスブックによる情報発信強化にも取り組んでいる。

【オンライン講座】

講演：秋山伸隆氏（県立広島大学宮島学センター長）

演題 毛利元就が結ぶ石見銀山と嚴島神社

時間 講演60分、世界遺産室伊藤大貴研究員との対談

配信期間 12月1日～12月15日

受講者 : 735名

【パネル巡回展】

1) 内 容 石見銀山遺跡の価値や調査研究成果を紹介するパネル展示

2) 場所・日時

①島根県民会館（松江市殿町158）

7月2日～7月15日

②萩・石見空港（益田市内田町4597）

8月7日～8月31日

③島根県立しまね海洋館アクアス

（浜田市久代町1117）

10月14日～11月9日

④島根県立古代出雲歴史博物館（出雲市大社町杵築東99-4）

10月24日～25日

【短編動画配信】

知ろう！探ろう！石見銀山 教えて館長さん

①日本最古のマスク？福面編（約6分）

配信開始：令和2年6月 再生回数：2370回

②“へか”ってなんだワン？へか焼き編（約6分）

配信開始：令和2年7月 再生回数：1300回

③節分に全集中！鬼はそと 福はうち編（約6分）

配信開始：令和3年1月 再生回数：710回

【センター情報コーナー展示 県市共催】

- ① 企画展 世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」範囲拡大10周年記念展
会期：10月20日～11月23日
- ② スキマ企画「水の恵みと災害」
会期：11月25日～令和3年1月25日
- ② 企画展「鬼と福」
会期：令和3年1月27日～4月26日

【新聞投稿 県市分担】

島根日日新聞「大田だより」
10月23日 「10周年記念展」(県)
11月20日 「石見銀山発掘調査最前線」(市)
令和3年1月22日 「鬼と福展」(県)
令和3年2月19日 「発掘調査が終わったあとは」
(市)
令和3年3月19日 「戦国大名毛利氏と石見銀山展」
(県)

(2) 大田市

例年開催している石見銀山学講座「ここまでわかった石見銀山」については、新型コロナウイルス感染症の拡大により、今年度は中止した。

発掘調査事業では、現地説明会を開催したほか、あらたな取り組みとして現地の動画配信もおこなっている。史跡地内と重要伝統的建造物群保存地区内で実施している建造物保存工事の現地公開を2回おこなった。世界遺産センターでは、新発見の金皇寺文書を公開する企画展を開催した。

あらたな事業として、石見銀山資料館との共催により、インターネットを用いた連続講座「石見銀山学 web 講座」(全5回)を開催した。

【発掘調査現場の公開】

史跡石見銀山遺跡の大谷地区
日時：12月19日
参加者：約100名

【保存修理現場の公開】

史跡石見銀山遺跡佐毘売山神社
日時：8月1日



発掘調査現地説明会

参加者：約100名
重伝建大森地区
県指定史跡石見銀山御料郷宿田儀屋遺宅青山家
および西性寺
日時：9月12日
参加者：約90名

【世界遺産センター企画展の開催(市県共催)】

企画展 「戦国大名毛利氏と石見銀山一まぼろしの古刹 保国山金皇寺の中世文書から読み解く」
会期：令和3年3月20日～4月11日
会場：世界遺産センター第3展示室
パンフレット・解説動画(県)

【古文書講座】

石見銀山世界遺産センターでは、市民向け教養講座として大田市主催の古文書講座を毎月開催している。上級・中級・初級の3コースで構成されており、各コース毎月1回開講している。中級・初級各コースの講師は島根県職員が対応している(参加者による自主的な運営がなされる上級コースを除く)。

今年度については、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、対面形式での開催を中止した期間がある。上級コースは参加者による輪読会形式で実施されている。テキストは熊谷家文書などを使用している。参加者は3名。中級コースは参加者8名。使用テキストは「浅利浦江朝鮮人漂着一件御用留」(山中家文書)である。

なお、今年度については、初級コースの開催を中止とした。

II

令和2年度の 石見銀山遺跡関連報告書・出版物

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 11

1. 報告書等

- ・『石見銀山遺跡発掘調査報告書28』（大田市教育委員会、2021.3）
- ・『石見銀山遺跡石造物調査報告書20—保国山金皇寺（仁摩町大国）—』（島根県教育委員会・大田市教育委員会、2021.3）
- ・『石見銀山歴史文献調査報告書16 石見銀山附地役人山中家文書目録』（島根県教育委員会、2021.3）
- ・『令和元年度・2年度石見銀山遺跡関連講座記録集』（島根県教育委員会、2021.3）
- ・『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究11』（島根県教育委員会・大田市教育委員会、2021.3）

2. 関連論文

- ・古安理英子、赤沢克洋「産業遺産への満足をもたらし要因に関する定量分析 石見銀山跡における経験の評価からの接近」『地域活性研究』12（地域活性学会、2020）
- ・岩城卓二「石見幕領におけるたたら製鉄と地域社会 播磨のたたら製鉄研究に向けて」『ひょうご歴史研究室紀要』5（兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室、2020.3）
- ・大島一朗「石見銀山大久保坑の坑内軌道跡 世界遺産への新たな提案」『産業考古学』157（産業考古学会、2020.3）
- ・廣瀬文太郎「石見銀山の大谷北側の間歩分布に基づく鉱脈の検討」『古代文化研究』28（島根県古代文化センター、2020.3）
- ・森田なつみ、黒田乃生「鉱山遺跡の観光資源としての活用に関する現状と課題（2020年度日本造園学会全国大会研究発表論文集38）」『ランドスケープ研究 日本造園学会会誌』83（日本造園学会、2020.3）
- ・張海燕、森田優己「歴史的資源保存地域における観光マネジメントの課題—白川郷・石見銀山・有松を例として—」『桜花学園大学学芸学部研究紀

要』12（桜花学園大学、2020.3.13）

- ・長谷川博史「列島の戦国史 琉球と石見銀山と十六世紀の世界」『本郷』149（吉川弘文館、2020.9）
- ・伊藤徳広「石見銀山 登録前後の盛り上がりから持続可能な保全へ（特集世界文化遺産の現在 世界遺産登録後の取組）」『月刊文化財685』（文化庁、2020.11）
- ・武田竜弥「産業文化の旅（第5回）石見銀山（島根県大田市）」『Trans/actions』5（名古屋工業大学産業文化研究会編集委員会、2020.11）

3. 関連書籍

- ・島根県古代文化センター編『島根県古代文化センター研究論集 第23集 前近代島根県域における環境と人間』（島根県教育委員会、2020）
- ・阿部猛、落合功、谷本雅之、浅井良夫編『生産・流通 鉱山業・製造業・商業・金融下』（朝倉書店、2020.11.25）
- ・『石見銀山学ことはじめ series 5』（大田市教育委員会、2021.3）

4. その他（他鉱山）

- ・北風嵐、池田善文、麻川明俊、小松隆一「山口県長登銅山の古代銅製錬のカラミ中の球状銅合金特に飛鳥時代末期～平安時代前期の銅合金の産状と化学組成について」『資源地質』70（資源地質学会、2020）
- ・美祢市教育委員会事務局文化財保護課編『長登銅山跡 平成27～30年度調査報告書4』（美祢市教育委員会事務局文化財保護課、2020）
- ・猪名川町教育委員会教育振興課社会教育室編『猪名川町文化財調査報告書10猪名川町内遺跡文化財調査報告書 2020』（猪名川町教育委員会教育振興課社会教育室、2020）
- ・猪名川町教育委員会『史跡多田銀銅山遺跡整備基本計画』（猪名川町教育委員会、2020）

- ・日光市教育委員会事務局文化財課編『日光市文化財調査報告 第13集 足尾銅山跡調査報告書10』（日光市教育委員会、2020）
- ・津和野町教育委員会編『堀家文書史料調査事業報告書 堀家文書史料調査目録』（1）（2）（3）（津和野町教育委員会、2020）
- ・富山市考古資料館編『富山市考古資料館紀要 第39号』（富山市考古資料館、2020）
- ・黒部市歴史民俗資料館編「新川の鉱山物語 近世から現代」（黒部市歴史民俗資料館、2020）
- ・竹内亮「史料散歩 長登銅山跡出土「家令余」木簡」『日本歴史』860（日本歴史学会、2020.1）
- ・齋藤努「山口 長登銅山と皇朝十二銭（遺跡を尋ねて 第Ⅳ期（第1回）」『学士会会報』940（学士会、2020.1）
- ・渡部浩二編『『佐州山出金銀吹方鍵石其外品合留帳』『佐州金銀山諸道具其外名附留帳』『佐州相川小判所金銀焼立仕上覚留帳』新潟県立歴史博物館所蔵』（新潟県立歴史博物館、2020.3）
- ・渡部浩二編『佐渡金銀山絵巻（断簡） 新潟県立歴史博物館所蔵』（新潟県立歴史博物館、2020.3）
- ・渡部浩二「佐渡金銀山の「間切」について」『新潟県立歴史博物館研究紀要』21（新潟県立歴史博物館、2020.3）
- ・高橋清美「鉱山経営と経営信条—藤田組における小坂鉱山の事例から（1884－1925）—」『経営論集』67（明治大学経営学研究所、2020.3.12）
- ・秋山幸秀「レーザ測量を利用して城郭空間をみる 国指定史跡 延沢銀山遺跡 延沢城跡 3次元データの応用事例」『測量 地理空間情報の科学と技術』829（日本測量協会、2020.4）
- ・井上裕司「現場レポート 新潟県 重要文化財旧佐渡鉱山採鉱施設 各施設の概要と保存修理における課題等」『文建協通信』140（文化財建造物保存技術協会、2020.4）
- ・下谷政弘監修、住友史料館編『住友近代史の研究』（ミネルヴァ書房、2020.5）
- ・久間英樹、福岡久雄、青木美香「3次元レーザスキャナと遠隔操作型ロボットを用いた鉱山坑道跡の定量的解析 多田銀銅山 民田千軒間歩群」『技術史教育学会誌』21（技術史教育学会誌編集委員会編、2020.6）
- ・宇佐美亮「佐渡島の金銀鉱山 世界文化遺産登録を目指す金銀山（特集 島と土木）」『土木技術社会と土木を結ぶ総合雑誌』75（土木技術社、2020.9）
- ・塚田 和彦「デ・レ・メタリカと開礦器法圖説と佐渡金銀山絵巻 旧資源工学図書館の蔵書の桂図書館への移管」『水曜会誌』25（京都大学工学部水曜会、2020.10）

Ⅲ

石見銀山遺跡関連調査研究

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 11

邑智郡美郷町・下波多野家墓地における石塔・墓標の変遷

伊藤 創・西尾克己・持田直人

1. はじめに

鳥根県では、2000年代以降、石見銀山遺跡における石造物調査の進展とも相まって、中近世の墓塔・墓標調査の重要性が広く認識されるようになった。

筆者らは2019年度において、中近世における主要な河川水運の舞台であった江の川流域に所在する石塔所在地と紀年銘石塔を調査し、当該地域における石塔の石材・形式の変遷について検討した。その成果については先般刊行したが⁽¹⁾、この時の現地調査において、鳥根県おうちぐんみさとちようかすぶち邑智郡美郷町粕淵の代表的な旧家である下波多野家の墓地に、歴代当主と一族の墓地が良好に残存しており、しかも、それらの被葬者を系図等によりほぼ特定できることに気付いた。当墓地について詳しく調査するならば、地域の歴史の一端が明らかになるだけでなく、この地域における石塔・墓標の変遷について一定の理解を得ることができると思われる。

本稿では、下波多野家墓地における個別の墓塔・墓標の被葬者を特定し、没年から墓地の建立年代を明らかにした上で、墓塔・墓標の石材及び形式変遷を検討する。

2. 下波多野家について

下波多野家（屋号：米屋）は、美郷町粕淵の旧家

である。粕淵は、主要な地域水運の舞台であった一級河川、江の川の港町として繁栄した場所であり、下波多野家の屋敷は、地域の主要道であった銀山街道に面していた。この街道は近世において、石見銀山の産出銀が、積出し港（広島県尾道市）へ搬出される際に利用された主要道路で、下波多野家屋敷跡の街道を挟んですぐ南東側には、本陣を勤めた本波多野家の屋敷跡が対面する。また、下波多野家の菩提寺は美郷町吾郷に所在する九々王山松林院定徳寺（浄土宗）であった⁽²⁾。

下波多野家の史料として、「下波多野家文書」（所蔵：美郷町教育委員会）が存在するが、目録等は未作成であり、その詳細は不明である。これらの文書には、天保14年（1843）年に下波多野家の9代当主慎助が作成したと考えられる粕淵村の絵図や過去帳を写した「下波多野家先祖過去帳（早見帳）」が含まれる。絵図からは、当該地区における往時の土地所有の実態が確認でき、この頃、下波多野家が多く土地を所有していたことが分かる。また、「下波多野家畧系」に⁽³⁾よれば、その遠祖は、藤原秀郷で、かつて丹波・丹後・但馬の領主であったが、波多野秀治の代に織田信長に滅ぼされて、一族は流浪の末、慶長年間に石見国に土着したと伝えられる。系図では、初代與左衛門（寛永6年（1629）没）から明治

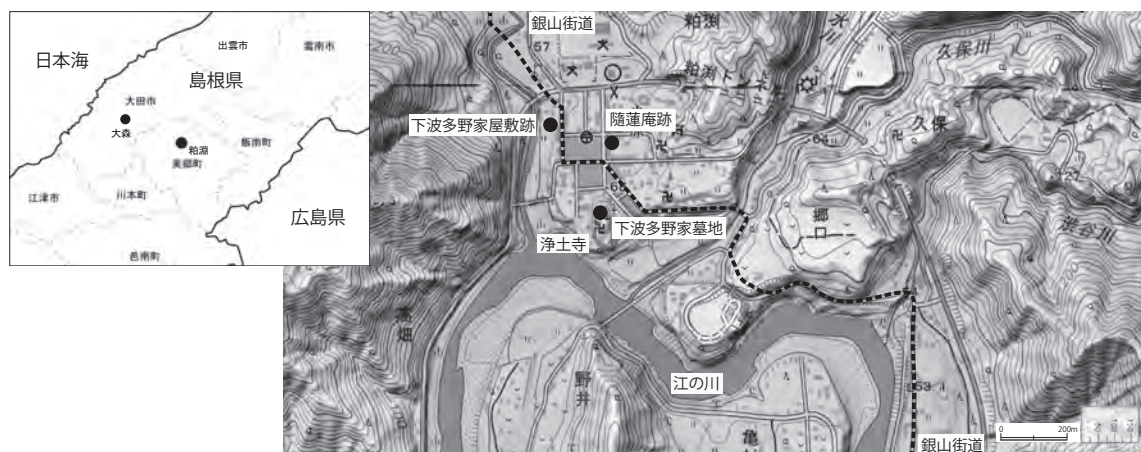


図1 下波多野家墓地の位置図（鳥根県美郷町粕淵、地図出典：カシミール3D）

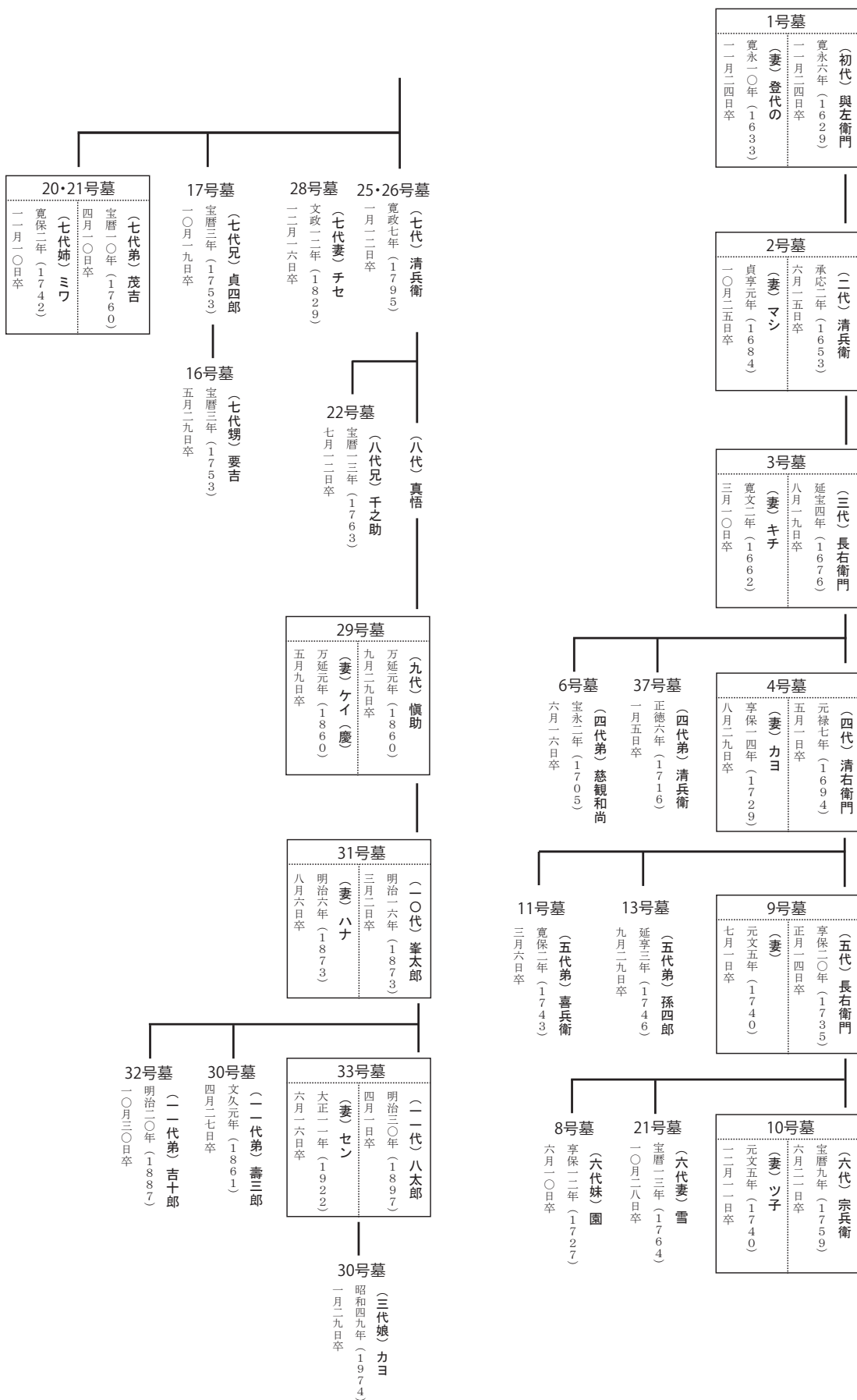


図2 下波多野家略系図（出典：沖慶治1917『粕淵村誌』）
※枠囲い：合葬墓であることを示す。

時代に活躍した11代八太郎までの系譜が記載されるが、家業や詳しい身分等は明らかでない。ただし、史料及び石造物や石碑の一部には、下波多野家の名を認められるものが散見され、当家の格式や経済力をうかがえる。3代長右衛門及び6代宗兵衛は庄屋を勤め⁽⁴⁾、9代慎助は百姓代、10代峯太郎は百姓頭、庄屋見習いを勤めた⁽⁵⁾。また、石見銀山にある羅漢寺五百羅漢像（島根県大田市大森町）左窟19には、寄進者として6代宗兵衛が、右窟21・93・162には、7代清兵衛が明示される他⁽⁶⁾、元文3年（1738）12月付けの記録では、「石州銀山柑子谷水抜普請」のため、石見銀山の「銀山師共」が借入した富裕層の中に「粕淵村 宗兵衛」の名が確認できる⁽⁷⁾。また、美郷町粕淵にある慈眼山円光寺の門下にある元文4年（1739）の名号石「南無阿弥陀佛」には、寄進者として「波多野姓米屋宗兵衛義央」の名が刻まれており、明治6年（1873）には10代当主峯太郎が醤油醸造業の免許を得るため、鑑札料75銭を、出回ったばかりの新貨で浜田県に上納している⁽⁸⁾。これらのことから、下波多野家は、近世～近代にお

ける地域の有力者であったことは間違いないと考えられる。

また、「下波多野家畧系」には、当家と婚姻関係のある家柄が記録されているが、その中には、本陣を務めた本波多野家・幕末に本陣になった林家、庄屋の家柄であった小笠原家（いずれも美郷町粕淵）があり、このことも、下波多野家の家格の高さを示唆する。

3. 下波多野家の墓塔・墓標の概要（図1）

下波多野家墓地は、美郷町粕淵字墓原に所在し、江の川の右岸、浄土寺（浄土真宗）背後の丘陵北西側に位置する。墓地には寛永6年（1629年）から昭和49年（1974年）の墓が36基存在する他、六十六部供養塔が北端にある。墓塔・墓標の種類としては、石龕・石廟を伴う五輪塔・宝篋印塔があるほか、自然石墓標、円頂方形墓標、円頂方柱墓標、平頂方柱墓標、無縫塔、位牌型墓標、地蔵石像がある。このうち、数が多いのは、自然石墓標、円頂方形墓標、円頂方柱墓標である。

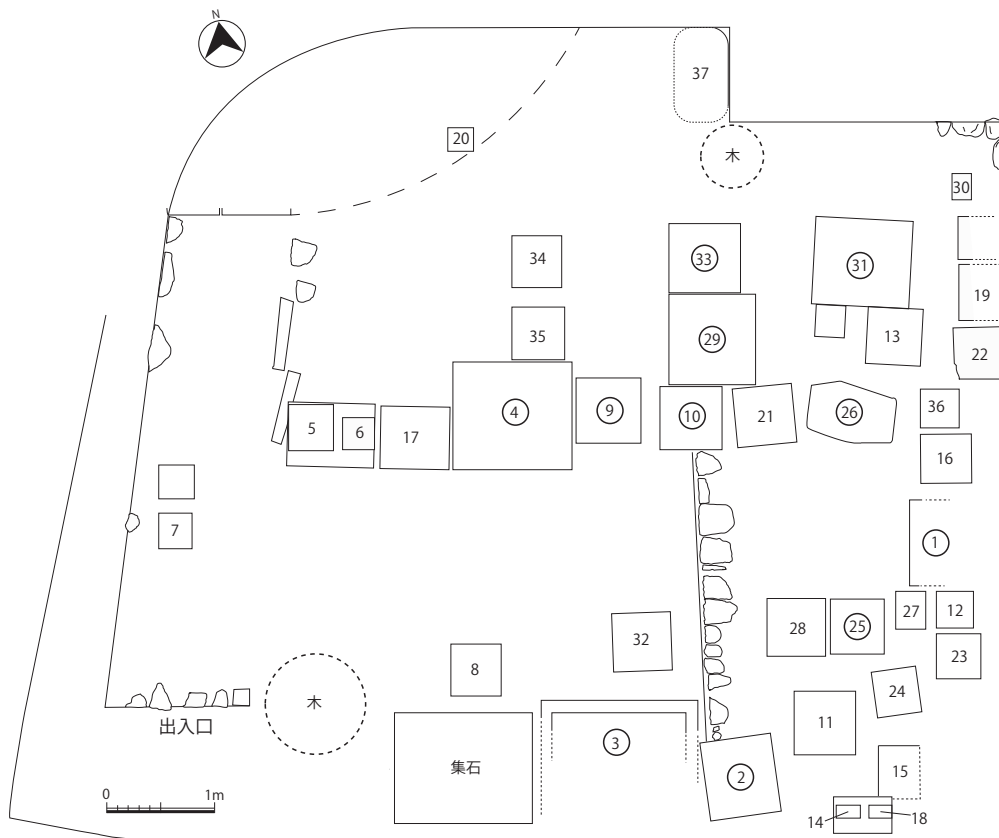


図3 下波多野家墓地の配置図（○囲い：歴代当主墓）

表1 下波多野家の石塔・墓標

No.	石塔・石倉	種別	石材	被葬者	没年（和暦・西暦） ※出典：下波多野家畧系	銘文	備考
1	石倉	一石五輪塔（右） 一石五輪塔（左）	福光石	興左衛門（初代） 興左の（初代妻）	寛永6年11月24日 1629 寛永10年11月24日 1633		
2	石倉	一石宝篋印塔（右） 一石宝篋印塔（左）	福光石	清兵衛（2代） マシ（2代妻）	元禄2年6月14日 1654 貞享元年10月25日 1684		
3	石倉	宝篋印塔（右）	福光石	長右衛門（3代）	延宝4年8月19日 1676	[正面]（基礎）――ハ――	「一月二十八日」（畧系） ※正面左側に「ハ」
4	石倉	一石宝篋印塔（左） 宝篋印塔（右） 一石宝篋印塔（左）	福光石 白色凝灰岩	キチ（3代妻） 清右衛門（4代） カヨ（4代妻）	寛文2年3月10日 1662 元禄7年5月1日 1694 享保14年8月29日 1730	[正面]（基礎）――天――（梵字）長――五月朔日 [正面]（基礎）享保十四巳酉天 誓誓心善尼 八月口口日	
5	-	円頂方柱墓標	福光石	名前不明	宝永2年3月20日 1705	[右面]口（宝）永二酉三月廿一日 [正面]口誓（？）實應（？）信（？）士 [左面]小口波多野口ハ 行年五十八	系図非記載
6	-	無縫塔	福光石	慈観和尚（4代弟）	宝永2年6月16日 1705	[正面]（基礎） 口（蓋）口（墓）観和尚 口（穴）月口口（十六）日	法蓮社演覺慈観和尚
7	-	円頂方柱墓標	福光石	名前不明	享保8年3月4日 1723	[右面]享保八卯 [正面]（割離）――童女 [左面]壬三月四日	
8	-	位牌型墓標	花崗岩	園（6代妹）	享保12年6月口（10）日 1727	[右面]二上次郎右衛門妻 [正面]享保十二丁未天 釋妙蓮信女 六月十日	浄土真宗の戒名
9	-	自然石墓標	閃緑岩	長右衛門（5代） 名前不明（5代妻）	享保20年1月14日 1735 元文5年7月1日 1740	[正面]享保廿天 超覺素雲信士 （梵字「キリク」）乙卯正月十四日 元文五天 願覺容月信女 庚申七月初日	
10	-	自然石墓標	閃緑岩	宗兵衛（6代） ツ子（6代妻）	元文5年12月11日 1740	[正面]（梵字「キリク」）一満即源士 三到素心女 元文五庚申歳 十二月十一日	宗兵衛：羅漢寺五百羅漢 漢左廂19の奉納者
11	-	自然石墓標	閃緑岩	喜兵衛（5代弟）	寛保2年3月6日 1743	[右面]俗名波多野（喜）口口（兵衛） [正面]寛保二 壬戌三月六日 そ出治真士 光普水尋女	
12	-	円頂方柱墓標	福光石	名前不明	寛保3年1月16日 1744	[右面]寛保三癸亥正月十六日 俗名口口 [正面]（割離）――	
13	-	自然石墓標	閃緑岩	孫四郎（5代弟）	延享3年9月29日 1746	[正面]延享口（三）丁天九月廿九日 心覺是空信士 明相理因女 [裏面]波多野孫四郎克重 妻	5代当主の弟孫四郎の妻が建立
14	-	円頂方柱墓標	福光石	佐七	延享4年4月14日 1747	[右面]延享四大 [正面]一信士 [左面]四年四月日 俗名佐七？	系図非記載
15	-	円頂方柱墓標	福光石	名前不明	宝暦3年4月口口日 1753	[右面]宝暦口（三）酉天 [正面]（割離）―― [左面]宝暦口四月口口日	
16	-	円頂方柱墓標	福光石	要吉（7代甥）	宝暦3年5月29日 1753	[右面]宝暦三癸酉五月九日 [正面]法岸涼口（智）童子 [左面]波多野貞四郎子 世壽ニ才	7代当主の兄貞四郎の子
17	-	円頂方柱墓標	福光石	貞四郎（7代兄）	宝暦3年10月19日 1753	[正面]口（宝）暦三癸酉天――信士 [左面]貞四郎 行年廿三歳	
18	-	円頂方柱墓標	福光石	名前不明	宝暦5年4月21日 1755	[右面]――月十一日 [正面]（割離）―― [左面]宝暦五 四月九一日	
19	-	円頂方柱墓標	福光石	ヲフ	宝暦5年4月 1755	[右面]宝暦五乙亥 [正面]――信女 [左面]四月――ヲフ	系図非記載
20	-	自然石墓標	閃緑岩	ミワ（7代姉） 茂吉（7代弟）	宝暦10年4月10日 1742 寛保2年11月10日 1760	[正面]勾覺曉夢童女 故月須正童子 [裏面]故宝暦十辰四月十日 勾覺保元辰十一月十日	羅漢寺五百羅漢右廂 162、左廂19に銘文あり
21	-	円頂方柱墓標	福光石	茂吉（6代息子） 雪（6代後妻）	宝暦10年4月10日 1760 宝暦13年10月28日 1764	[右面]――同人子 俗名 口口 行年十才（養）之達ス [正面]（梵字「キリク」）観口（月）妙正信女 口口口正口 釈士安西（？） [左面]親宝暦十三天十月廿八日 波多野宗兵衛妻 俗名雪行年四十二才 [裏面]故宝暦十辰四月十日 同人子俗年十三口（才） 俗名茂吉	羅漢寺五百羅漢右廂93 に銘文あり 「宗兵工妻ユキ」（過去帳）
22	-	円頂方柱墓標	福光石	千之助（7代息子）	宝暦13年7月12日 1763	[正面]宝暦 光熙仙夢（？）口口 七月十口（？） [右面]波多野清口口口助 行口口口	羅漢寺五百羅漢右廂93 に銘文あり
23	-	円頂方柱墓標	福光石	ヲロマ	明和8年4月15日 1770	[右面]明和八卯四月十五日 [正面]（割離）―― [左面]口口街門妻 口山口俗 俗名ヲロマ 十三年	系図非記載
24	-	円頂方柱墓標	福光石	名前不明	明和 1764 ～72	[右面]明和――八日 [正面]（割離）―― [左面]波多野喜左衛門唐（？）貞 行年四十二才	系図非記載
25	-	円頂方柱墓標	福光石	清兵衛（7代）	寛政7年1月12日 1795	[右面]寛政七巳卯年正月十二日 [正面]（割離）―― [左面]大森鹿野新平（妻）六十三才 波多野口（清）平之娘其子同箇	羅漢寺五百羅漢右廂 21・93・162奉納者
26	-	自然石墓標	閃緑岩	清兵衛（7代）	寛政7年1月12日 1795	寛政七卯年（梵字「ア」）寂覺道柱居士壹正月十二日 [左面]俗名 波多野清兵衛 生（？）年五十九歳	羅漢寺五百羅漢右廂 21・93・162奉納者
27	-	自然石墓標	閃緑岩	イチ	寛政9年9月25日 1797	[正面]寛政九巳年 實覺妙相信女 九月廿五日 [裏面]波多野儀八口 世名イチ 行年七十二才	系図非記載
28	-	円頂方柱墓標	福光石	チセ（7代妻）	文政12年12月16日 1829	[右面]文政十二巳年十二月十六日 [正面]（割離）―― [左面]池田村湯――（割離）―― 小原村波多野清門妻俗名チセ行年八十三	池田大上湯達玄達の娘 ※過去帳（写）には「マエ」と記載
29	-	円頂方柱墓標	福光石	慎助（9代） ケイ（慶）（9代妻）	万延元年9月29日 1860 万延元年5月9日	[右面]園口（萬）延元歳庚申九月二十九口（日） 警萬延元歳庚申五月初九日 [正面]園口院覺譽宗念恵昌居士 ―――覺繁林榮昌大姉 [左面]波多野九世慎助藤原宗壽齡六十七歳 同箇同人妻俗名ケイ齡五十七歳 同箇峯太郎建之	百姓代
30	-	地蔵石像	福光石	壽三郎（11代弟）	文久元年4月27日 1861	[右面]文久元西四月廿七日 [正面]前進遊善童子 [左面]俗名壽三 年四才	万延2年（畧系）
31	-	円頂方柱墓標	福光石	峯太郎（10代） ハナ（10代妻）	明治16年3月2日 1883	[右面]惠心院選譽本然義生居士 隨心院選譽本覺貞生大姉 [正面]恵心院選譽本然義生居士 隨心院選譽本覺貞生大姉 [左面]隨明治六年八月六日寂 義長妻俗名ハナ齡四十三歳 [正面]陸軍歩兵 二等軍曹 波多野吉十郎墓 大正 享年	庄屋見習、百姓頭
32	-	自然石墓標	花崗岩	吉十郎（11代弟）	明治20年10月30日 1887	[裏面]波多野八太郎弟 カヨ叔父也 明治廿年十月三十日於歩兵 十九聯隊口口名古屋口口軍營 享年二十一才	「名古屋鎮口ニテ卒」（略系）
33	-	円頂方柱墓標	デイサイト	八太郎（11代） セン（11代妻）	大正11年6月16日 1922	[右面]大正十〇年六月十六日 十一代世名波多野八太郎故藤原義宗 享年七十才孝子カヨ立之 [正面]寂銀院全明淨庵居士 仙祥院全峯妙鑑大姉	
34	-	円頂方柱墓標	花崗岩	セン（11代妻）	昭和11年10月28日 1936	[右面]昭和十一年十月廿八日亡 [正面]仙祥院全峯妙鑑大姉 [左面]波多野八太郎妻 セン故行年八十六才	
35	-	平頂方柱墓標	花崗岩	カヨ（11代娘）	昭和49年1月29日 1974	[右面]昭和四十九年一月二十九日寂 [正面]梅苑壽大姉 [左面]俗名波多野カヨ故 享年九十歳	最後の墓標
36	-	一石五輪塔	白色凝灰岩	名前不明			墓地中、最古の石塔か
37	-	六十六部廻国供養塔（自然石）	閃緑岩	清次郎（4代弟）	正徳6年1月5日 1716	[右面]正徳六申年正月五日 [正面]六十六部供養 願主比丘 厭嘗宗欣	

参照資料：沖慶治1918「下波多野家畧系」『粕淵村誌』（表中で「畧系」と表記）、「下波多野家先祖過去帳（早見表）」

墓地の配列(図3) 下波多野家墓地の入口は、現在、南にあるが、本来は西にあったと思われる。墓地内には、奥に向かう参道の中程に、高さ75cmの石段があり、さらに進むと、1号墓（初代当主夫妻の墓）に突き当る。墓地は、まず、この1号墓を基点としてコの字状に配列され、その後、コの字状墓域の外

側（北側）に墓域が移る。

墓石の配置について、建立時期との規則的な連動を読み取ることは難しいが、下波多野家の歴代当主墓に注目すると、1号墓に続く2号墓（2代当主夫妻の墓）・3号墓（3代当主夫妻の墓）がコの字状墓域南側に配置させられた後、4号墓（4代夫妻の

墓)はコの字状墓域北側に置かれ、その後、4号墓の東隣から連続的に、9号墓(5代当主夫妻の墓)・10号墓(6代当主夫妻の墓)が配列する。また、次の7代当主の墓は2基(25・26墓)があるが、25号墓はコの字状墓域南側、26号墓は25号墓に対面するコの字状墓域北側に配置される。その後の29号墓(9代夫妻の墓)・31号墓(10代夫妻の墓)・33号墓(11代夫妻の墓)は、コの字状墓域外である北側墓域に配置される。

1号墓：初代與左衛門夫妻の石塔(図4)

コの字状墓域の東側中央に位置する初代與左衛門と妻登代の墓で、それぞれの没年は寛永6年(1629)と寛永10年(1633)である。1号墓は石龕を有するが、墓地内における石龕を伴う墓3基(1・2・4号墓)のうち、内部に一石五輪塔が置かれるのはこの墓のみで、他の2基(2・4号墓)の内部には宝篋印塔が置かれる。1号墓の石塔は風化が著しく、銘文の判読から、夫婦墓を区別するのは難しいが、3・4号墓の事例を参考にするなら、より大きい右側の石塔が與左衛門の墓である可能性を指摘できる。

石龕 凝灰岩(福光石)製で、切妻平入形式である。側壁と奥壁が残っているが、屋根部は失われている。石龕は、床石に浅い溝を穿ち、溝に壁板を嵌め込む構造である。床石は厚さ7.5cm、幅80.5cm、奥行70cm以上を測る。石龕内部における内法の横幅は80.5cm、奥行64.5cm以上、側壁の高さは92cmを測る。壁板は奥壁が1枚、側壁が2枚で構成され、厚さは5.5cmである。前壁は失われているが、床石の溝の形状から推定すると、本来は、側壁を前壁と奥壁に挟み込む構造であることが分かる。なお、基礎石はデイサイトである。

五輪塔(右側) 福光石製の一石五輪塔で、総高63cm以上、最大幅(地輪)15cmを測る。地輪は長方体で、水輪は縦に長い楕円形を呈し、火輪の軒と風輪部の外形は直線的である。空風輪は破損して本体と分断していたが、図上復元した。

五輪塔(左側) 福光石製の一石五輪塔で、総高62.5cm以上、最大幅(地輪)15cmを測る。空風輪の頂部は欠損するが、全体的な形状は右側(南側)の

石塔とほぼ同じである。なお、地輪の右側上部には「寛」と推定される文字があり、本来は「寛永」と刻まれていたと考えられる。

2号墓：2代清兵衛夫妻の石塔(図4)

コの字状墓域の南側に位置する2代清兵衛と妻マシの墓で、それぞれの没年は承応3年(1653)と貞享元年(1684)である。石塔は風化が著しく、文字が確認できないので、銘文から夫婦墓を区別するのは難しいが、大きさからすると、左側(東側)の石塔が清兵衛の墓であると推定される。

石龕 福光石製で切妻平入形式である。床石は厚さ10cmで幅が75cmである。石龕内部における内法の横幅は47cm、奥行42cm、棟までの高さは84cm以上であるが、屋根部が欠けており、軒までの高さは不明である。壁板は、両側面及び奥側の計3枚が残存しており、側壁の厚さは5.5cmである。壁板は1号墓と同様、側壁を前壁と奥壁に挟み込む構造になっており、床石には側壁を嵌め込む溝がある。

宝篋印塔(左側) 福光石製の一石宝篋印塔で、総高79.5cm、最大幅(笠)25.8cmを測る。基礎は長方体で、上端には蓮弁3枚、間弁2枚の反花が表現されている。塔身も長方体で、正面には、梵字「キリーク」が彫られている。笠は上部段丘が2段作出され、下部には梵字が彫られていると思われるが、風化が著しく、判読できない。笠の隅飾は単弧で、外側は直線気味に開いて立ち上がり、表面には蕨手状の文様が一条彫られている。相輪は、伏鉢部が省略され、下部に請花が表されて、宝珠下部は凹線状に表現されている。相輪部には梵字2文字が彫られており、上から順に「キリーク」、「タラーク」が認められる。

宝篋印塔(右側) 福光石製の一石宝篋印塔で、左側(東側)石塔よりも規模が小さく、総高68cm、最大幅(笠)22cmである。基礎は長方体で、上端には蓮弁3枚、間弁2枚の反花が表現されている。塔身も長方体で、笠は、上部段丘が2段作出されている。笠の隅飾は単弧で外側は直線気味に開いて立ち上がり、表面には蕨手状の文様が一条彫られている。相輪は、左側(東側)石塔と同様、伏鉢部が省略され、下部のみに請花が表されて、宝珠下部は凹線状に表現されているが、左側(東側)と全体的な形状がや

や異なり、相輪下端に最大径があり、上端にかけてすばまっている。相輪部には梵字2文字が彫られているが、判読できない。

3号墓：3代長右衛門夫妻の石塔（図5）

コの字状墓域南側に位置する3代長右衛門と妻キチの墓で、それぞれの没年は延宝4年（1676）と寛文2年（1662）である。墓地内で唯一、石廟を伴う墓である。なお、3号墓の石廟は、1・2・4号墓の石龕と異なり、壁・屋根材に加えて、柱・桁・梁・束・軒・棟材を有し、本格的な小屋組み構造を有する。従って、本稿では、1・2・4号墓を「石龕」、3号墓を「石廟」として表記した。なお、現状では天井部の崩壊が著しい。

石廟 福光石製で、切妻平入形式である。床部は幅116cm、奥行100cm、厚さ12.5cmであり、2基の宝篋印塔が置かれる。石廟内部における内法は、横幅78.3cm、奥行63.5cm、軒までの高さは93.3cmであり、屋根の棟部までの高さは138.5cmを測る。石廟身部の骨組みは、4本の石材を組み合わせて基礎外縁とし、この四隅に1辺14cm四方の角柱材を立ち上げ、梁を横架する。また、屋根部の骨組みは、梁材の上に軒材を架構すると共に、梁の中央に束柱を立てて、その上に天井石と棟材を組み合わせた構造である。四隅に立ち上げた柱の間には、左右の壁に各1枚、前壁に2枚、奥壁に2枚の、厚さ6.5cm壁板が計6枚嵌め込まれ、天井部は前方と後方でそれぞれ3枚、計6枚の板石が組み合わされる。棟石は長さ139.5cm、幅29cmで、内部が刳り込まれ、天井石を組み合わせた妻入り屋根の頂部に嵌め込む構造である。各石材の表面には、全体的に丁寧なノミ加工調整が施されている。

宝篋印塔（左側） 福光石製の一石宝篋印塔で、総高75cm以上、最大幅（笠）17cmである。基礎は長方体で、上端には蓮弁3枚、間弁2枚の反花が表現されている。塔身も長方体で、笠は上部段丘が2段作り出されている。隅飾は単弧で、外側は直線気味に開いて立ち上がる。表面には蕨手状の文様が彫られている。相輪は、伏鉢部が省略され、下部に請花が表されて、宝珠下部は凹線状に表現されている。

宝篋印塔（右側） 福光石製の組合せ式宝篋印塔で

ある。総高136.5cm以上、最大幅（笠）37cmである。基礎は正方体で、上端には蓮弁3枚、間弁2枚の反花が表現されている。塔身は長方体である。笠は、上部段丘が2段に作出され、軒部の下には請花が表現される。隅飾は単弧で外側は直線気味に開いて立ち上がり、表面には蕨手状の文様が彫られている。相輪は、上部・下部に請花が表され、下端は突帯状になる。相輪と伏鉢には梵字が認められ、相輪は「キリーク」と思われるが、伏鉢は判読できない。

4号墓：4代清右衛門夫妻の石塔（図5）

コの字状墓域北側に位置する、4代当主清右衛門と妻カヨの墓で、それぞれの没年は、元禄7年（1694）、享保14年（1730）である。石龕を伴い、内部に宝篋印塔が2基置かれる。

石龕 石龕は福光石製の床石のみ残っており、床石には壁板を嵌め込むための溝がある。溝から推定される石龕内部の内法は幅65cm、奥行41.2cmで、壁板の厚さは6.5cm以下と考えられる。なお、石龕の基礎石はデイスait製である。

宝篋印塔（右側） 白色凝灰岩製の組合せ式宝篋印塔で、総高93.3cm以上、最大幅（笠）36cmである。基礎は長方体で、上端には、蓮弁3枚、間弁2枚の反花が表現されている。基礎には「[] 五月朔日」の文字が微かに認められる。また、梵字も見受けられるが、風化が著しく判読できない。塔身も長方体で、上面と下面を刳り込み、ホゾ穴のようにして、笠下面及び基礎上面のホゾ状の突出部と組み合わせられるようになっている。笠は上部段丘が2段作出されており、頂部にはホゾ穴を持つ。隅飾は単弧で外側は直線的に立ち上がる。表面には蕨手状の文様が彫られている。相輪は、上部に請花が表され、下端は突帯状になる。

宝篋印塔（左側） 福光石製の一石宝篋印塔で、総高74.5cm、最大幅（笠）17cmである。基礎は縦長の長方体で、上端には蓮弁3枚、間弁2枚の反花が表現されている。基礎の正面に「享保十四巳酉天ノ本誓誓心善尼ノ八月□（九）□日」の銘文が確認できる。また、塔身の正面には梵字「キリーク」が彫られている。笠は上部段丘が1段作出され、隅飾りの内側ラインは、上方でほぼ直角に曲がる。表面には

蕨手状の文様が彫られている。相輪は、伏鉢部が省略され、上部・下部に請花が表される。

5号墓：被葬者不明の墓標（図6）

コの字状墓域北側西端に位置する、現状で確認できる中では、墓地の中で最も古い円頂方柱墓標である。被葬者は不明だが、正面に「□譽實□□信士」、左側面に「□□波多野〔 〕八 行年五十八」、右側面に「□（寶）永二巳三月廿日」の文字が確認でき、没年は宝永2年（1705）であることが分かる。

円頂方柱墓標 福光石製で、総高67.5cmを測る。墓標は高さ52.5cm、幅22.5cm、奥行18cmで、背面は、下端2cmから上方に向けて、浅い割り込み加工が施される。なお、墓標下の基礎石はデイスait製である。

6号墓：慈観和尚（4代清右衛門の弟）の石塔（図6）

コの字状墓域北側に位置する。墓地の中で唯一の無縫塔で、宝永2年（1705）に没した4代清右衛門の弟、慈観和尚の墓である。慈観は延宝6年（1678）に、粕淵に建立された随蓮庵という寺院の庵主である。随蓮庵は、美郷町吾郷（旧吾郷村）に所在する下波多野家の菩提寺、定徳寺の末寺となる。定徳寺は元々、大田市大森町大谷に所在したが、宝永7年（1710）に現在地に移転した。なお、随蓮庵跡地付近の民家には、随蓮庵の本尊であったと伝えられる、17世紀に京都の仏師により製作された木造阿弥陀如来坐像が残されており、現在も崇敬されている。

無縫塔 福光石製で、請花等は伴わない。総高77.9cmを測り、塔身の高さは55cm、最大径が23cmである。基礎の上端角は丁寧に面取りされている。また、正面に「寶永二／二□（西）天／慈観／演譽□□（慈観）和尚／二月十六日」の銘文が確認できる。「下波多野家過去帳（早見表）」には、「法蓮社演譽慈観和尚」とあり、墓の銘文と整合する。なお、墓塔下の基礎石はデイスait製である。

8号墓：園（二上次郎右衛門の妻）の墓標（図5）

コの字状墓域南側に位置する、墓地で唯一の花崗岩製位牌型墓標である。被葬者は、二上次郎右衛門の妻となった5代長右衛門の娘、園であり、没年は享保12年（1727）である。なお、二上次郎右衛門の家柄・居住地等は不明である。

位牌型墓標 花崗岩製で、総高77cmを測り、墓標は

高さ62.1cm、横幅40.6cm、奥行21cmである。表面を1段彫り窪めて花頭窓状の銘文帯を作り出し、屋根は棟を有する唐破風状に表現される。銘文は、正面に「享年十二丁未天／釋妙蓮信女／六月十日」、右側面に「二上次郎右衛門妻」と刻まれる。また、「釋」の文字があるため、浄土真宗の墓であることが分かるが、下波多野家墓地は、浄土宗なので、8号墓は特異である。なお、「下波多野家過去帳（早見表）」の中では、当主夫妻を除く28人中、5名に「釋」が認められる。

9号墓：5代長右衛門夫妻の墓標

コの字状墓域北側に位置する5代長右衛門夫妻の墓で、墓地の中で最も古い自然石墓標である。没年はそれぞれ、享保20年（1735）と元文5年（1740）である。

自然石墓標 墓標は閃緑岩、基礎はデイスait製である。総高157cmを測り、墓標は高さ111cm、幅63.5cm、厚さ10cmを測る。銘文は、上部中央に梵字「キリーク」を配し、その下に「享保廿天／超譽泰雲信士／乙卯正月十四日／元文五天／顔譽容月信女 庚申七月朔日」と刻まれる。

10号墓：6代宗兵衛夫妻の墓標（図6）

コの字状墓域北側に位置する自然石墓標で、6代宗兵衛夫妻の墓である。墓には宗兵衛の戒名はあるものの没年は表されないが、妻については、戒名・没年が刻まれ、その年は元文5年（1740）である。これは、先に亡くなった妻の戒名・没年を示したところ、後になくなった夫の没年を刻む範囲が不足したため、それを省略した結果と考えられる。

宗兵衛は、島根県大田市大森町に所在する羅漢寺五百羅漢像の奉納者の一人として知られる。左窟19の像の座裏には、「薦曉夢童女之冥福／石城五百内／施主小原米屋宗兵衛」と刻まれている⁽⁹⁾。「曉夢童女」は後述するように、宗兵衛の娘、ミワの戒名であり、この像が、亡くなった娘を供養するために奉納されたことが分かる。また、前述したように、宗兵衛は慈眼山円光寺（美郷町粕淵）の門下にある元文4年（1739）の名号石「南無阿弥陀仏」と彫られた名号石を寄進しており、この碑には、「維時元文四巳未天孟□吉辰／南無阿弥陀仏／波多野姓米

屋宗兵衛義英」と刻まれる。

自然石墓標 墓標の石材は閃緑岩、基礎はデイスイト製である。総高147cmを測り、墓標は高さ105.5cm、幅69.5cmである。正面上部中央には梵字「キリーク」が刻まれ、その下に、「一滴郎源士／三到素心女／元文五庚申歳 十二月十一日」と刻まれる。なお、「下波多野家過去帳（早見表）」では、宗兵衛の戒名は「湛譽一摘即源居士」とある。

14号墓：佐七の墓標

コの字状墓域外の墓地南東端に位置する、墓地の中で最も古い円頂方形墓標である。銘文からすると、被葬者は佐七と思われる人物で、没年は延享4年（1747）である。ただし、この人物は、下波多野家の系図や過去帳には記載がなく、墓地の中における位置からすると、この墓標は後年に下波多野家墓域内に持ち込まれたものと考えられる。

円頂方形墓標 14号墓は、福光石製の円頂方形墓標で、総高84.5cm以上を測る。基礎部は埋没しており外観は不明だが、墓標は高さ47.5cm、幅12.5cm、奥行12cmである。表面を1段掘り窪めて花頭窓状の銘文帯を作り出し、中央部に法名が示され、右側面に「延享四天」、左側面に「四月十四日 俗名佐七」と刻まれる。

17号墓：貞四郎（7代清兵衛の兄）の墓標（図6）

コの字状墓域北側に位置する、墓地の中でも古い円頂方形墓標である。被葬者は7代清兵衛の兄、貞四郎で、没年は宝暦3年（1753）である。

円頂方形墓標 福光石製で、総高128.3cmを測る。墓標は高さ76.6cm、幅27cm、奥行11.75cmである。表面を1段彫り窪めて花頭窓状の銘文帯を作り出し、中央部には「□（寶）暦三癸酉天」、左側面には「貞四郎行年廿三歳」と刻まれている。なお、墓標下の基礎石はデイスイト製である。

25号墓：7代清兵衛の墓標

コの字状墓域南側に位置する円頂方形墓標で、7代清兵衛の墓である。没年は寛政7年（1795）である。清兵衛は、6代宗兵衛と同様、羅漢寺五百羅漢像の奉納者の一人である。奉納した像は、右窟21・93・162の3軀である。21の背面には「石室五百内／施主／米屋清兵□（衛）」、93の背面には、「石室

五百内／光照仙榮童子／観月妙正信女／施主粕淵村／米屋清兵衛」、162の背面には、「石室五百内／故月順正童子／探月了玄信士／施主粕淵村／米屋清兵衛」と刻まれている⁽¹⁰⁾。系図では、「光照心榮童子」は2歳で亡くなった清兵衛の息子、千之助であり、21号墓の銘文から「観月妙正信女」は6代宗兵衛の妻（おそらく、清兵衛の母）雪であることが分かる。また、「故月順正童子」は、13歳で亡くなった清兵衛の弟、茂吉（雪の子）で、「探月了玄信士」は清兵衛の兄貞四郎である。なお、7代清兵衛の墓は25号墓の他に、26号墓があり、当初、25号墓が建立されたものの、それが破損したことなどにより、その対面に26号墓が建て替えられた可能性がある。ただし、26号墓は自然石墓標で、25号墓とは形式が異なる。

円頂方形墓標 福光石製で、総高105.5cm、墓標は高さ54cm、幅24cm、奥行は11cmである。正面は剥離しており、文字は確認できないが、右側面には「寛政七巳卯年正月十二日」、左側面には「大森鹿野新平□六十三才／波多野□（清）平エ娘其子同苗」と刻まれている。

29墓：9代慎助夫妻の墓標

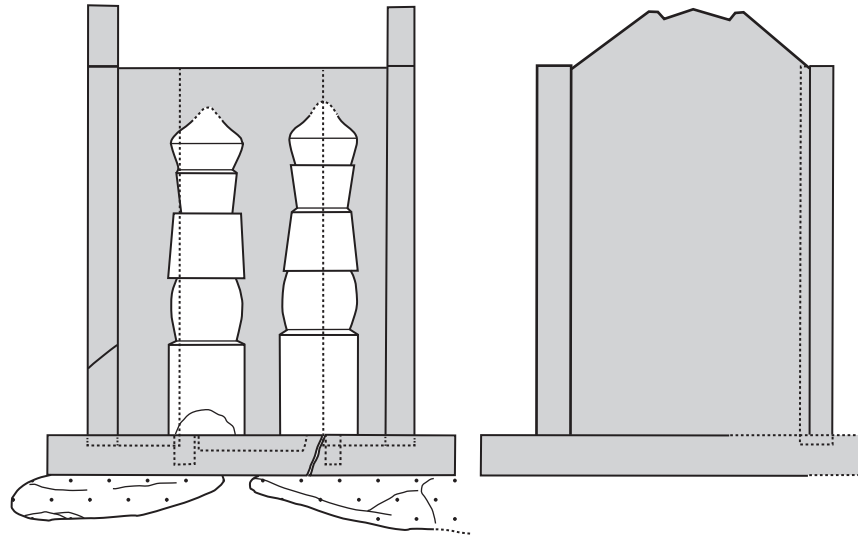
コの字状墓域の外側（北側）に配置された、9代慎助と妻ケイの墓で、円頂方柱墓標である。夫妻共に、没年は万延元年（1760）である。

円頂方柱墓標 福光石製で、総高150cmを測る。墓標は高さ70cm、幅27.5cm、奥行27.5cmで、墓標には右側面に「圓□（萬）延元歳庚申九月二十九□（日）／馨萬延元歳庚申五月初九日」、正面に「圓翁院覺譽宗念恵□居士／譽敏糸林榮昌大姉」、左側面に「波多野九世慎助藤原宗壽齡六十七歳／同苗同人妻俗名ケイ齡五十七歳／同苗峯太郎建之」と刻まれる。

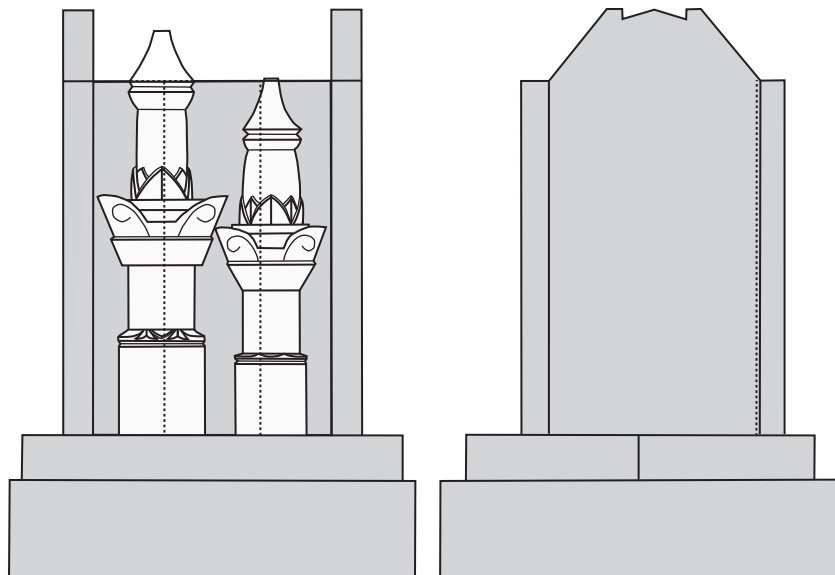
31号墓：10代峯太郎夫妻の墓標

コの字状墓域の外側（北側）、29号墓の北東側に配置された、10代峯太郎と妻ハナの墓で、円頂方柱墓標である。峯太郎の没年は記されないが、妻のハナは明治6年（1873）である。

円頂方柱墓標 福光石製で、総高125cmを測り、墓標は高さ67.5cm、幅29cm、奥行28.5cmである。墓標には、右側面に「恵波多野十世峯太郎藤原義長」、



1号墓（1629年・1633年）：初代興左衛門夫妻



2号墓（1653年・1684年）：2代清兵衛夫妻

図4 下波多野家の石塔・墓標（1）※網掛け：デイスait石材

0 50cm

正面に「恵心院還譽本然義生居士／随心院還譽本覺貞生大姉、左側面に「随明治六年八月六日寂 義長妻俗名ハナ齡四十三歳」と刻まれる。

33号墓：11代八太郎夫妻の墓標

コの字状墓域の外側（北側）、29号墓の北側に配置された、11代八太郎と妻センの墓で、円頂方柱墓標である。八太郎の没年は記されないが、妻のセンは大正11年（1922）である。

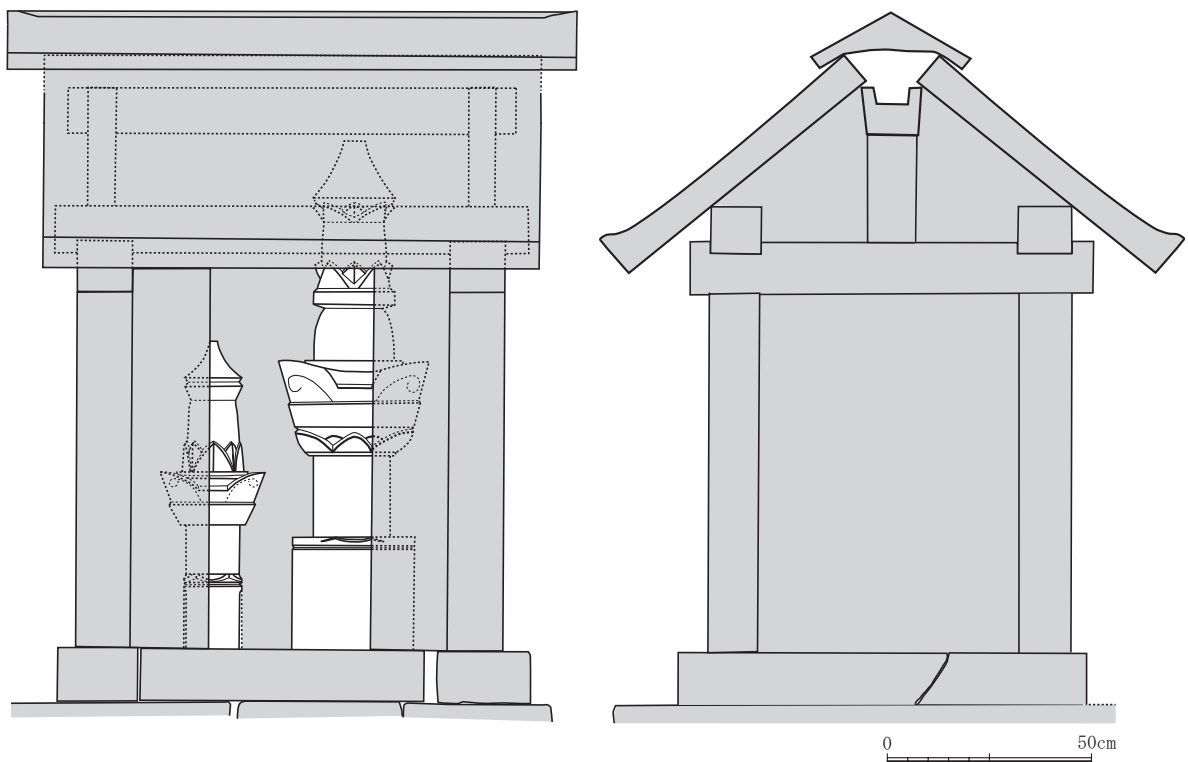
円頂方柱墓標 墓標、基礎共にデイスait製で、総高130cmを測り、墓標は高さ75cm、幅24.8cm、奥行

21cmである。墓標には、右側面に「大正十壱年六月十六日／十一代世名波多野八太郎故藤原義宗／享年七十才孝子カヨ立之」、正面に「哲眼院全明浄鑑居士／仙祥院全室妙鑑大姉」と刻まれる。

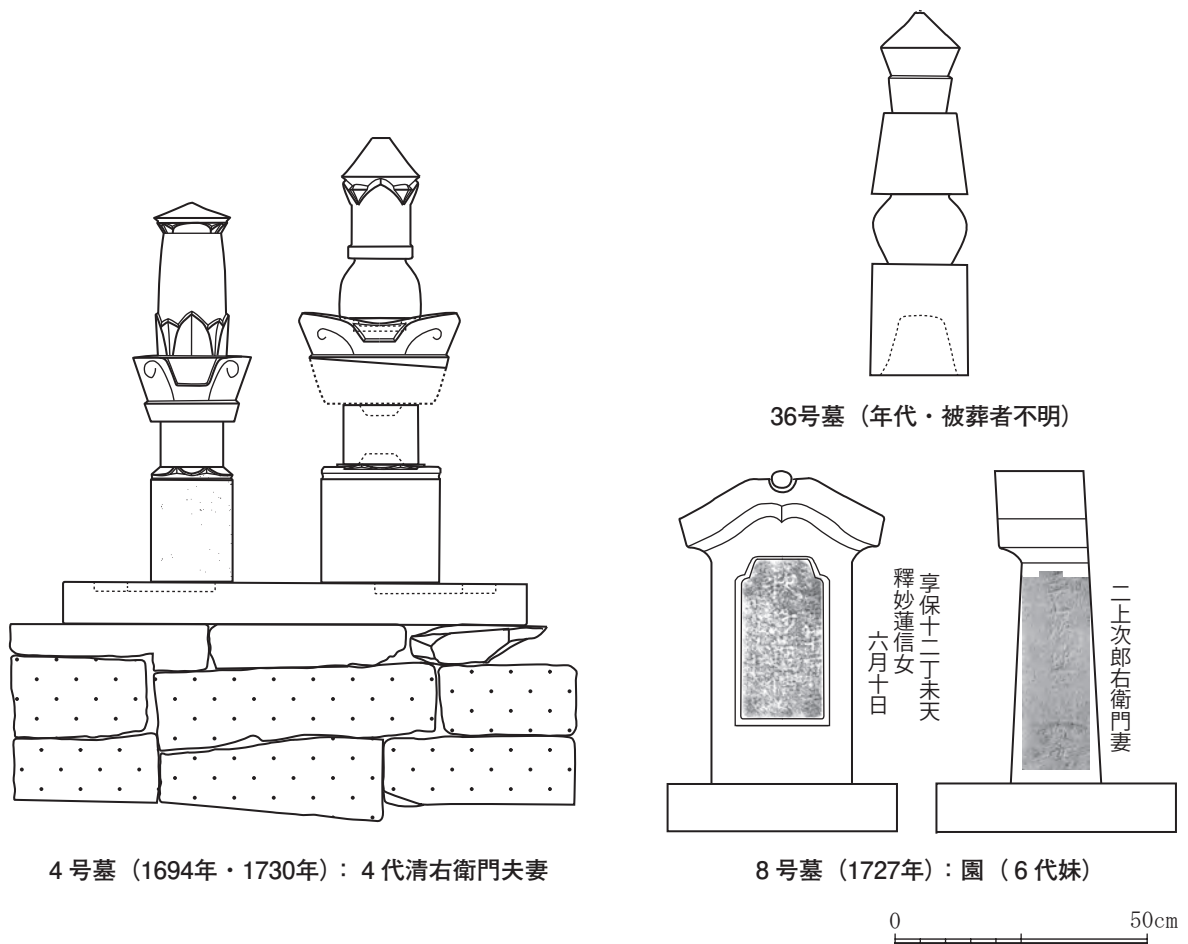
36号墓：被葬者不明（図5）

コの字状墓域北東隅に位置する、白色凝灰岩製の一石五輪塔である。被葬者は不明だが、形状から、この墓地のなかで最も古い石塔であると考えられる。

一石五輪塔 総高73cm、最大幅（地輪）19.7cmを測る。地輪は長方で、下面を深く割り込む。水輪は中心



3号墓（1676年・1662年）：3代長右衛門夫妻

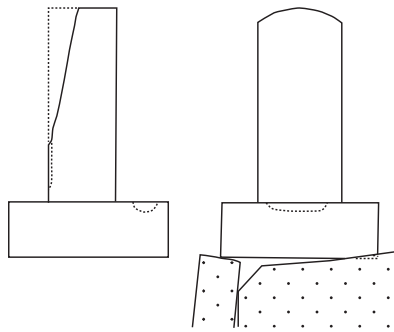


4号墓（1694年・1730年）：4代清右衛門夫妻

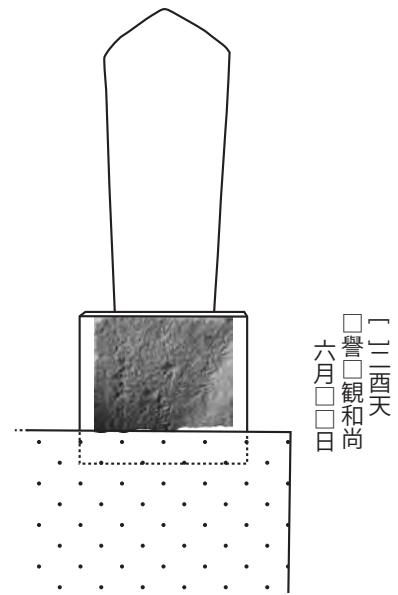
36号墓（年代・被葬者不明）

8号墓（1727年）：園（6代妹）

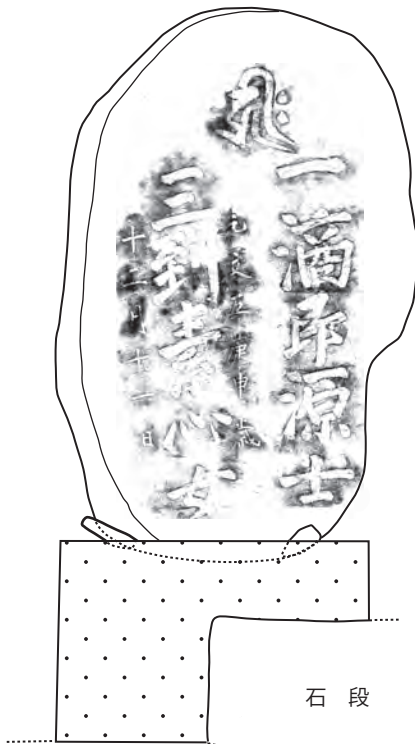
図5 下波多野家の石塔・墓標（2） ※網掛け：デイスait石材



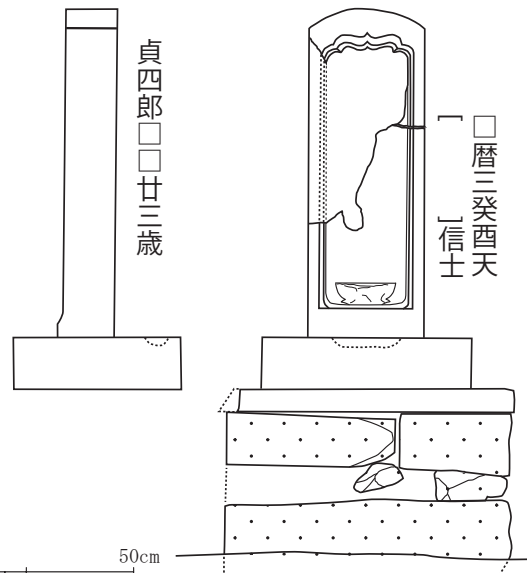
5号墓（1705年）：被葬者不明



6号墓（1705年）：慈観和尚（4代弟）



10号墓（1740年）：6代宗兵衛夫妻



17号墓（1753年）：貞四郎（7代兄）

図6 下波多野家の石塔・墓標（3） ※網掛け：デイスait石材

より上に最大径を持つ。火輪および空風輪の外形は直線的である。なお、五輪塔は水輪と火輪の間が破損して分断していたが、図上復元した。

37号碑：六十六部供養塔（図7）

37号碑は、コの字状墓域外の墓域北端に位置する廻国供養塔である。閃緑岩製で、高さ92.8cm、幅56.6cm、奥行27.5cmを測る。台石はデイスaitである。銘文は、右側面に「正徳六申年正月五日」、正面に「厭譽宗欣／六十六部供養（養）／願主比丘」と刻ま

れている。「下波多野家過去帳（早見表）」によれば、4代清右衛門の弟（慈観和尚の兄）清次（二）郎の法名は「厭譽宗欣比丘」であり、このことから、37号碑の願主が清次郎であることが分かる。ただし、右側面には清次郎の没年が刻まれていることから、単なる廻国納経の記念碑ではなく、清次郎の逆修塔、または没後の墓標を兼ねている可能性もある。

その他の墓標（子どもの墓）

下波多野家墓地には子どもの墓が4基ある（16・

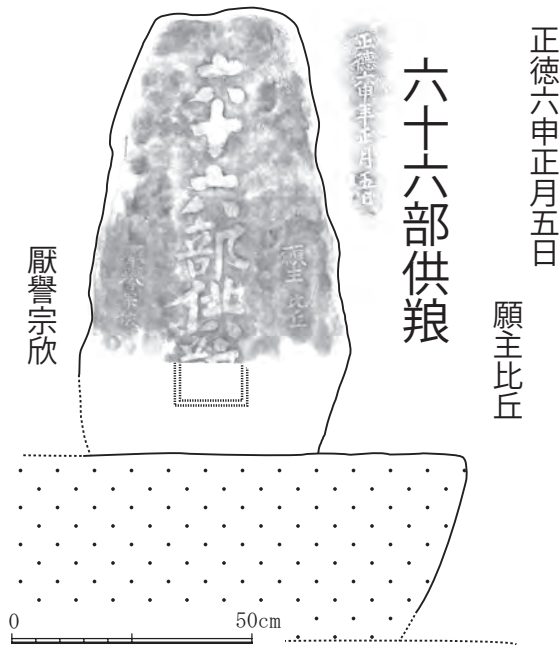


図7 六十六部供養塔 (37号碑)

20・22・30号墓)。16号墓は円頂方形墓標、20号墓は自然石墓標、22号墓は円頂方柱墓標、30号墓は地藏石像である。

16号墓は、宝暦3年(1753)に2歳で亡くなった6代宗兵衛の子、要吉の墓である。福光石製で総高101.2cm、墓標は高さ59.4cm、幅20.4cm、奥行11.7cmである。墓標の右側面に「寶暦三癸酉五月九日」、正面に「法岸涼□(智)童子」、左側面に「波多野貞四郎子 世壽二才」と刻まれる。

20号墓は、6代宗兵衛の2人の子の墓で、被葬者は、宝暦10年(1760)に3歳で亡くなった息子茂吉と寛保2年(1742)に亡くなった娘ミワである。墓標の石材は閃緑岩、基礎はデイサイト製で、総高83.6cmである。墓標は小型の自然石で、高さ56.8cm、幅30.4cm、奥行13cmである。正面に「勾覚暁夢童女 / 故月須正童子」、裏面に「故寶暦十辰四月十日 / 勾寛保元辰十一月十日」と刻まれる。

22号墓は、宝暦13年(1753)に2歳で亡くなった7代清兵衛の子、千之助の墓である。破損が著しく、本来の大きさは不明だが、福光石製で、墓標正面に「寶暦[] / 光照心榮□(童カ)□(子カ) / [] 七月十□(二カ)(日カ)」、左側面に「波多野清[] / □(千カ)□(之カ)助 / 行□□□」と刻まれる。

30号墓は、文久元年(1861)に4歳で亡くなった

10代峯太郎の子、壽三郎の地藏石像墓である。地藏は胡坐をかき、両手で幢幡を持つ。現状で頭部を欠く。福光石製で、総高60.9cm、石像は高さ24.5cm、幅16.5cm、奥行10.9cmである。基礎の右側面に「文久元酉四月廿七日」、正面に「前蓮遊善童子」、左側面に「俗名壽三良 年四才」と刻まれる。なお、壽三郎の戒名は「下波多野家過去帳(早見表)」では「蓮遊善童子」とある。

4. 下波多野家の墓塔・墓標の変遷

下波多野家墓地では、36号墓40基の墓塔・墓標を確認することができた。その内訳は、組合せ式宝篋印塔2基(3・4号墓)、一石宝篋印塔4基(2～4号墓)、一石五輪塔3基(1・36号墓)、自然石墓標8基(9～11・13・20・26・27・32号墓)、円頂方形墓標10基(14～19・21・24・25・28号墓)、円頂方柱墓標9基(5・7・12・22・23・29・31・33・34号墓)、平頂方柱墓標1基(35号墓)、位牌型墓標1基(8号墓)、無縫塔1基(6号墓)、地藏石像1基(30号墓)である。なお、組合せ五輪塔は認められない。自然石墓標・円頂方形墓標・円頂方柱墓標の比率が高く、これら3種で全体の7割を占める。これらは、それぞれ8～10基を数え、数の上でも拮抗している。これらに、一石宝篋印塔(4基)が次ぎ、その他はいずれも1～3基に留まる。また、これらのうち、1～4号墓は、石龕・石廟を伴っており、他と比べて格式が高いと考えられる。

石廟・石龕を有する石塔に関しては、17世紀第2四半期の1号墓では石龕内に福光石製の一石五輪塔が並置され、17世紀第3・4四半期の2・3号墓では、2号墓には石龕内に福光石製の一石宝篋印塔が、3号墓には石廟内に福光石製の組合せ式宝篋印塔と一石宝篋印塔が並置される。また、17世紀末～18世紀前葉の4号墓では石龕内に白色凝灰岩製の組合せ宝篋印塔と福光石製の一石宝篋印塔が置かれる。ただし、4号墓の白色凝灰岩石材は、後述するように、一般的な白色凝灰岩とは相違が認められる。

また、石材に関しては、福光石製が26基、白色凝灰岩製が2基、閃緑岩の自然石が7基、花崗岩製が4基、デイサイト製が1基の内訳で、石塔・墓標の

種別に関わらず、福光石製が多数を占める⁽¹¹⁾。ただし、白色凝灰岩の利用は、中世的墓塔（宝篋印塔・五輪塔）に限定される。これらの墓塔・墓標の種別ごとの数量差、及び石材の差異は、下波多野家墓地における主要な造墓期間における墓石の仕様を示唆していると考えられる。その観点からすると、下波多野家墓地は、概略的には白色凝灰岩製の中世的墓塔（宝篋印塔・五輪塔）から福光石製の近世的墓標（円頂方形墓標・円頂方柱墓標）・自然石墓標への転換期以降を主要な造墓時期とするといえる。

下波多野家墓地において、組合せ式宝篋印塔は、延宝4年（1676）銘のある福光石製の3号墓1基、及び白色凝灰岩製の4号墓（右側）のみである。4号墓（右側）は、元禄7年（1694）没の4代清右衛門のものと考えられるが、江の川流域の石塔については、寛永年間頃に、白色凝灰岩から福光石に変遷したと考えられる⁽¹²⁾ことからすると極端に新しい。ただし、4号墓の白色凝灰岩は、江の川流域で多くみられるものとは微妙に質感が異なっており、これらとは産地が異なる可能性がある。従って、当家墓地において、組合せ式宝篋印塔の変遷をたどるのは難しいが、17世紀後葉（1676年）に、当主の墓としてこの種の石塔が採用されていたことは明らかである。

一石宝篋印塔はいずれも福光石製で、4基のうち、最古が承応3年（1653）に没した2代当主清兵衛の福光石製の墓（2号墓（右側））、最新が享保14年（1730）に没した4代当主清右衛門の妻の墓（4号墓（左側））である。これらは、時期的には、17世紀中葉～18世紀前葉に属する。2号墓の一石宝篋印塔2基は、いずれも相輪部の上部請花は省略され、宝珠部との境は凹線状に表現されるのに対し、4号墓では、相輪部における宝珠部が扁平になる一方、上部受け花が表現される。また、塔身が極端に短い特徴も認められ、こうした相違は時期差に由来すると思われる。

一石五輪塔3基のうち、年代が明らかなのは、初代当主與左衛門夫妻の墓である1号墓のみであるが、それぞれの被葬者の没年は、寛永6年（1629）・同10年（1633）であり、17世紀前葉に限定される。

これらはいずれも福光石製だが、年代不明の36号墓は白色凝灰岩製である。なお、36号墓は石材・形態から見て、1号墓よりやや年代的に古いと推定される。

以上のことから、下波多野家墓地においては、中世的墓塔（宝篋印塔・五輪塔）が、17世紀代を中心に採用されていたことが分かる。また、石材に関しては、1号墓を基準にすると、17世紀前葉において、既に墓塔・墓標における主要石材は、白色凝灰岩から福光石に変遷していたと推定される。

自然石墓標8基のうち、最古は5代当主長右衛門夫妻の墓（9号墓）で、長右衛門が享保20年（1735）に没した時に建立されたと思われる。また、最新のものは明治20年（1887）に没した11代当主の弟吉十郎の墓（32号墓）である。ただし、吉十郎の墓は、他と比べて極端に新しく、石材も花崗岩である。他と異なる点でやや特殊であり、自然石墓標の本来的な存続期間からは外れると推定される。従って、下波多野家墓地において、実質的な自然石墓標の最新事例は、寛政9年（1797）に没したイチの墓（27号墓）と考えられ、このことから、この墓標の存続時期は、18世紀前葉～末を中心とすると推定される。これらの自然石墓標は、形態・字体等に共通属性がなく、時期的変遷の指標を特定するのは難しいが、梵字の彫り込み方に注目すると、享保20年（1735）銘及び元文5年（1740）銘の9・10号墓では、「キリーク」が薬研彫りであるのに対し、寛政7年（1795）銘の26号墓では平底彫りになっている。

円頂方形墓標10基のうち、最古は延享4年（1747）に没した佐七と思われる人物の墓（14号墓）で、最新が文政12年（1829）に没した7代当主の妻チセの墓（28号墓）である。これらのことから、この種の墓標の存続時期は、18世紀中葉～19世紀前葉を中心とすると推定される。

円頂方柱墓標10基のうち、最古は宝永2年（1705）没の5号墓で、これは、そのまま昭和に至るまで存続する。このことから、この墓標は、18世紀初頭以降に普遍化したと推定される。ただし、方柱部の幅と奥行きの比率にはバリエーションがあり、断面正方形のものだけでなく、断面長方形のものも少なく

ない。例えば、29・31・34号墓では幅と奥行きの比率がほぼ1:1で正方形指向が強いが、他は、幅に対する奥行きの比が0.60~0.84で長方形である。29号墓が建立された幕末以降は、原則的には正方形のものが主流となると考えられるが、下波多野家墓地では、18世紀初頭以降、長方形指向から正方形指向へと単純に変遷したのではなく、長期間に亘り、両者が混在していたことがうかがえる。

この他、花崗岩製の位牌型墓標が1基（8号墓）存在する。この墓は享保12年（1727）銘を有し、「釋」とあることから、浄土真宗の墓であることが分かる。他の墓は、梵字「キリーク」を有する浄土宗の墓であることからすると、この墓はその形態と共に特異である。被葬者「園」は二上家へ嫁いだ人物であり、その墓が実家の墓地に所在することには、何らかの事情があったと推定される。ただし、墓標形態及び石材の特異性が、そのような背景と連動しているとすれば、下波多野家墓地における花崗岩製の位牌型墓標は、興味深い事例といえよう。

また、下波多野家墓地における子どもの墓石に注目したい。下波多野家墓地で認められた子どもの墓は4基あり、それぞれ、円頂方形墓標（16号墓）・自然石墓標（20号墓）・円頂方柱墓標（22号墓）・地藏石像（30号墓）である。墓の銘文及び「下波多野家畧系」によれば、16号墓の被葬者は要吉（享年2歳）、20号墓の被葬者は茂吉（享年13歳）とミワ（享年不明）、30号墓の被葬者は壽三郎（享年4歳）、22号墓は、千之助（享年2歳）である。墓標形態はそれぞれ異なり、本来の高さが分かるものは16・20号墓のみであるが、いずれも全高60cm以内に収まり、その規格はいずれも小さいと推定される。また、没年から、少なくとも2~13歳までが、成人とは異なる墓標を造営する対象と考えられていたこともうかがえる。これらのことから、子どもの墓に関しては、定型化した形式があったわけではないものの、小型の墓標を作るという点に関しては、地域社会の風習として認知されていた可能性がある。

最後に、墓地の配置について補足する。下波多野家墓地は、原則的に江戸時代当時の姿を現在に残していると考えられるが、江戸時代において、墓石の

配置換え等、一定程度の改変があったことは推定できる。10号墓と2号墓の間には石段があるが（図3）、これは10号墓の基礎を一部埋没させているので、この墓の建立後に追加されたことが分かる。また、7代宗兵衛の墓は2基（25・26号墓）あり、その弟、茂吉の墓も2基（20・21号墓）認められる。さらに、1・4・5・6・17号墓塔では、墓全体が、基礎下の三瓶山（島根県中央部にある活火山）のデイサイト石材により嵩上げされており、後世の改変を示唆する。なお、自然石墓標のほぼすべては、基礎石自体がデイサイト製の切石である。このことから、墓地の中で最古の自然石墓標である享保20年（1735）の9号墓以降、つまり18世紀前半以降に、下波多野家墓地における本格的なデイサイト石材使用が開始したとも推定される。

5. 他地域との比較

下波多野家墓地にみる墓石の特徴

下波多野家墓地における墓石の種類は、既に述べたように石廟・石龕と内部に置かれた中世的墓塔（宝篋印塔・五輪塔）からなるタイプと、河原で見られる転石を使用した自然石タイプ、および一般的に使用されていた福光石製の近世的墓標（円頂方形墓標・円頂方柱墓標）の大きく3形態からなる。また、子供の石塔は少なく（2基）、自然石と地藏石像の墓石が各1基存在する。

以下、下波多野家墓地の墓石の特徴を大田市に所在する石見銀山遺跡をはじめとする周辺地域の石塔と比較して論じてみたい。

石龕と組合せ式宝篋印塔

本墓地の1・2号墓に見られるように、福光石製の石龕を覆い屋として、内部に同石材製の組合せ式宝篋印塔等を置くタイプは、江の川下流域の邑智郡川本町や江津市でも僅かに知られている。邑智郡川本町の妙船寺境内には1基確認でき、時期が新しい組合せ式宝篋印塔と位牌型墓標が置かれている⁽¹³⁾。なお、境内には、その後も19世紀前半まで、内部に位牌型墓標を2基置く宝殿型の覆い屋（屋根の形態が変化して、破風などが付くもの）が継続してあるのが認められる。

石見銀山遺跡がある大田市大森町では、覆い屋部分が風化し、部材が崩壊したために、今は床石のみが残る墓が多くある。これらの規模は小さいものが多く、縁部に側壁の基底部を置くための溝がコの字状に彫られている。但し、代官所跡近くの勝源寺にある2代奉行竹村丹後守の石龕は、唯一崩壊せずに当初の姿を留めている。これは規模も大きく、下波多野墓地の3代長右衛門の3号墓と同じタイプで精巧な造りである。時期は、竹村丹後守が寛永12年(1635)に没していることから、下波多野家初代與左衛門(1629年没)の墓と年代が近い。⁽¹⁴⁾江戸時代前期の寛永期から寛文期にかけて、石見銀山のある幕府御料内(天領)では、3号墓の様な精巧な大型のものと、1・2号墓の様な小型で、簡素な石龕が併存していた可能性が高い。今のところ、福光製石龕の系譜や変遷については資料が限られており、まったくの手付かずの状態にある。ただし、島根県東部(出雲部)の砂岩(来待石)製の石龕については、江戸時代初めの松江藩主堀尾氏が越前(福井県)の凝灰岩(笏谷石)の石廟の影響を受けて、堀尾氏一族の墓石に採用し、その後、17世紀中頃以降、庄屋級の有力農民層に小型の石龕が広まっていったことが知られている⁽¹⁵⁾。

自然石墓標

下波多野家墓地では、自然石墓標が8基、さらに、4代清右衛門の弟清次郎が建てた六十六部供養塔が1基存在する。自然石墓標は全体の2割以上を占める。出現時期は5代当主の長右衛門の墓石が享保20年(1735)であり、当主墓での自然石(閃緑岩)使用は7代清兵衛までの三代に限られる。ただし、時期が下る明治20年(1887)に病死した11代八太郎の弟である吉十郎(陸軍歩兵)の32号墓標が最後の自然石(花崗岩)の墓石となる。

石見銀山遺跡の墓石調査によると、石見銀山地区の1650基の中に、自然石墓標は10基程で、極めて少ない⁽¹⁶⁾。その時期も幕末から明治の初めに限られ、近世末から近代にあたるので、下波多野家墓地とは様相が異なる。⁽¹⁷⁾

また、6代宗兵衛は粕淵の圓光寺門前に「南無阿弥陀佛」の六字名号碑を建てているが、この石材も

自然石である。また、墓地の隣接地には同様の石材による廻国供養塔(37号)も残る。よって、自然石は本墓地においては、石碑や墓石に一定期間使用されていたことが知られる。

下波多野家墓地は、17世紀後半以降、農民層に広まった近世的墓標の増加の中で、有力農民層の一部には自然石の墓石が採用されたことを示す事例である。⁽¹⁸⁾なお、自然石墓標の系譜については、周辺部の調査例が今のところなく、詳細は今後の資料の増加を待って言及したい。

円頂方形墓標・円頂方柱墓標

本墓地では、円頂方形墓標は10基、円頂方柱墓標は9基存在する。出現時期をみると、前者は14号墓の延享4年(1747)、後者は5号墓の宝暦2年(1705)であり、後者が40年程早い。石見銀山遺跡では、円頂方形墓標が円頂方柱墓標より早く出現しており、円頂方柱墓標の出現が、円頂方形墓標より42年遡る下波多野家墓地とはやや異なる。また、当主の墓石では、円頂方形墓標は7代清兵衛の25号墓のみであり、これ以降はすべて円頂方柱の墓石になる。なお、笠付きの竿石型石塔は存在しない。

粕淵に隣接する美郷町吾郷にある下波多野家の菩提寺であった定徳寺境内には、江戸時代中期から後期の円頂方形で、笠付きの背の高い石塔をもつ墓地⁽¹⁹⁾も知られる。江戸時代後期には、庄屋クラスの有力農民層では平頂方形墓標(竿石型)に笠をつける例が多い。美郷地域や檀家内での階層や家の格による墓石の選択があった可能性も窺える。

6. 今後の課題

下波多野家墓地は、古い時期の墓が大きく改変されることなく、現代に至るまで良好に管理されており、墓石の検討をする上では、恵まれた環境であった。また、それに加えて、系図等が既出文献で紹介されており、現地では判読しにくい銘文や、銘文のない墓についても、多くの墓の建立年代を推定することができた。つまり、本稿における研究成果は、現場の保全と充実した史料に恵まれて、初めて提示することができた内容である。このことから、石造物を考古学的に検討する上で、分布調査及び図化作

業といった基礎調査に加えて、系図・過去帳（写し）などの史料調査が不可欠であることを再認識させられた。ただし、これらの調査は個人の作業では限界があり、各自治体が事業として実施するのが理想的である。また、こうした研究を、単なる墓石調査に帰結させるのではなく、地域の歴史の再発見にどう繋げ、地域の宝として住民の方々に理解してもらえるのかを考えることも重要である。

考古学研究の中で、中世的墓塔・近世的墓標の研究の重要性が認知されつつある昨今において、継続的な学術調査と共に地域への成果の周知が今後の大きな課題である。また、下波多野家の石塔・墓標等の多くは、比較的脆い凝灰岩（福光石）製であり、石龕・石廟を含め全体の風化が進行している。今回の調査では、一定の銘文等を何とか判読することができたが、同様の未調査の石塔群が江の川流域には多く所在しており、これらの調査が急務であることを記して本稿を終わりとしたい。

謝辞

末尾になりましたが、本稿の作成に際し、下記の方々、諸機関にお世話になりました。記して感謝いたします。（50音順、敬称略）

特に、下波多野家墓地を管理されている堀尾美智子氏、堀尾亮介氏には、墓地の除草等により環境を整えていただいたことに加え、調査を目的とした各種の作業の実施をご快諾くださいました。心より感謝申し上げます。また、的野克之氏（鳥根県立古代出雲歴史博物館）には伝・隨蓮庵本尊についてご教示いただきました。

機関：浄土寺、美郷町教育委員会

個人：岩谷知広、三上利三、中村唯史、服部二葉、堀尾美智子、堀尾亮介、的野克之

注

- （1） 伊藤創・西尾克己2021「江の川流域の福光石系石塔の様相」池上悟先生古稀記念論集『芙蓉峰の考古学Ⅱ』池上悟先生古稀記念会
- （2） 三上利三氏（美郷町教育委員会）の教示による。

- （3） 沖慶治1917『粕淵村誌』
- （4） 森脇太一編1837『邑智郡誌』
- （5） 邑智町企画課1978『邑智町誌』
- （6） 宮本徳昭2005「Ⅴ-2 羅漢寺五百羅漢坐像群」『石見銀山 [分布調査と墓石調査の成果]』鳥根県教育委員会
- （7） 鳥根県教育委員会2015『石見銀山歴史文献調査報告書11 銀山覚書・延享四年銀山覚書』22頁
- （8） （5）と同じ
- （9） （6）と同じ
- （10） （6）と同じ、像93背面における「光照仙榮童子」は系図に記載された戒名では「光照心榮童子」とあり、像162背面における「故月順正童子」は系図では、「故月須正童子」とある。
- （11） 石材鑑定は、中村唯史氏（鳥根県立三瓶自然館）の教示による。
- （12） （1）と同じ
- （13） （1）と同じ
- （14） 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2003『石見銀山遺跡石造物調査報告書3』
- （15） 樋口英行2005「来待石製石龕の成立と展開」『来待ストーン研究6』来待ストーンミュージアム
- （16） 鳥根県教育委員会・大田市教育委員会2014『石見銀山遺跡石造物調査報告書14』
- （17） （16）と同じ
- （18） 鳥根県邑智郡川本町に所在する妙船寺境内の墓地においても自然石の墓石は認められる。
- （19） 定徳寺の開基である元山根家墓地の山根八左衛門種家（元禄11年没）の墓石をはじめとする墓標にも、大型の笠付竿石型の墓が使用されている。なお、定徳寺については注（5）による。

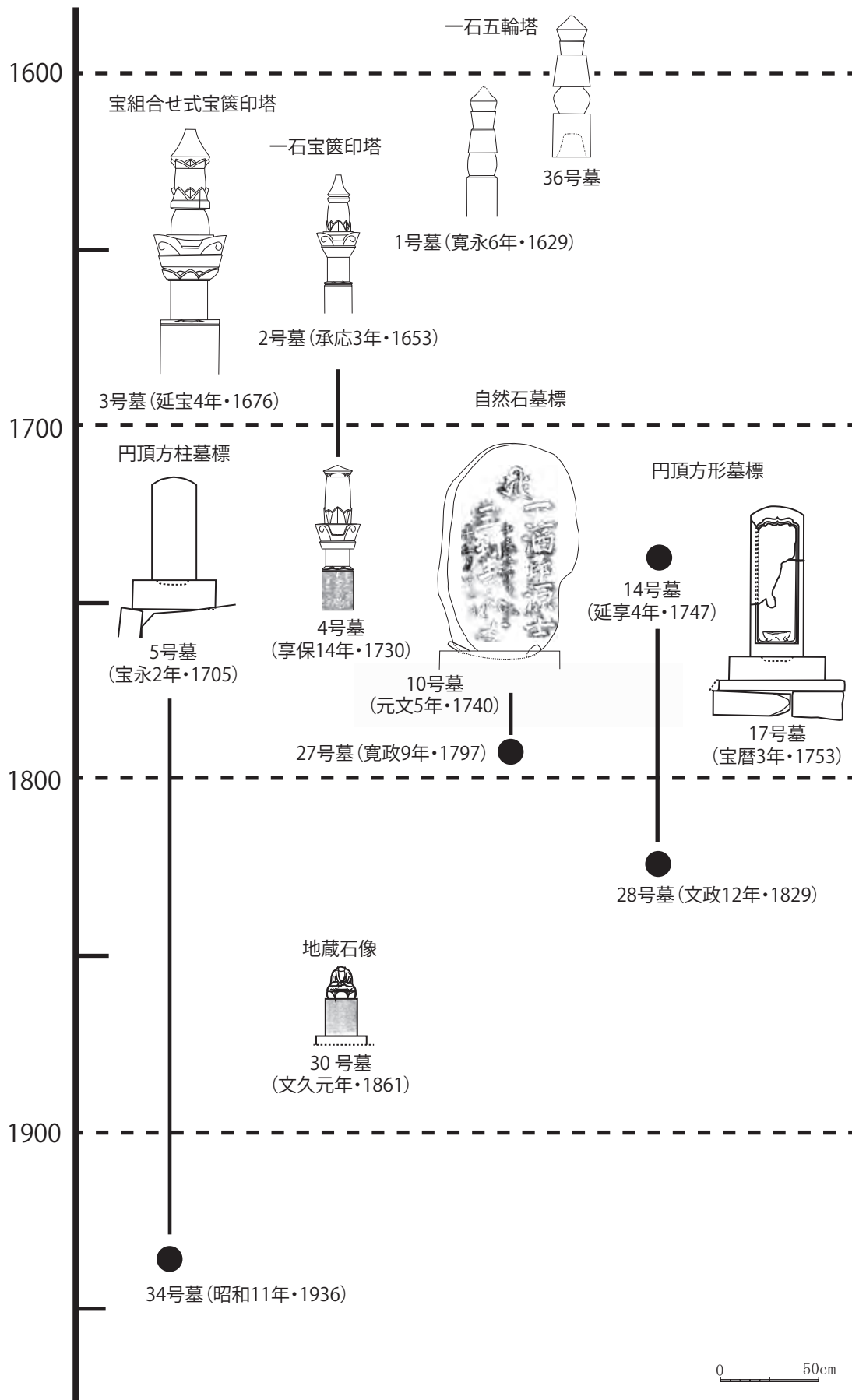


図8 下波多野家墓塔・墓標の変遷図



1. 下波多野家墓地中心部（西から）



4. 3号墓：3代長右衛門夫妻



2. 1号墓：初代興左衛門夫妻



5. 4号墓：4代清右衛門夫妻



3. 2号墓：2代清兵衛夫妻



6. 9号墓（左）5代長右衛門夫妻
10号墓（右）：6代宗兵衛夫妻



7. 27号墓：イチ



10. 31号墓：10代峯太郎夫妻



8. 28号墓：7代清兵衛の妻



11. 33号墓：11代八太郎夫妻



9. 29号墓：9代慎助夫妻



12. 六十六部廻国供養塔：清次郎（4代弟）

近世温泉津町における廻船問屋の住居形態について

— 木津屋『中嶋家文書』の屋敷図分析 —

生田 光晴

はじめに

近世温泉津町の廻船問屋は、港町の歴史や交易を考えるうえで重要な存在であり、これまで文献史料を中心とした調査研究によってその活動や様相について紹介されてきた。一般的には廻船問屋が活動したのは近代までとされ、大正七年（一九一八）に温泉津駅が開通し、物資の流通が鉄道へ移行する過程で、廻船問屋もその役目を終える。そのため、廻船問屋の遺構は、近代以降に建替えが進んだ結果、温泉津伝統的建造物群保存地区においても、一部の土蔵など断片的にしか確認することはできない。

近世から近代にかけて、温泉津町における廻船問屋は、諸国から入港する廻船との交易や宿泊を世話する宿として、また温泉津町内には抱屋敷を所有し土地経営を行う有力商家であった。その数は概ね十五〜四〇軒前後で推移しながら、多くは本町などの港付近に屋敷を占有したことが知られている。

こうした背景から本稿では、温泉津町の廻船問屋として知られ、また同町の庄屋なども務めた木津屋中嶋家^{なづきやなかじま}について、『中嶋家文書』に残る屋敷図やそのほか関係する土地史料を用いながら変遷について整理し、建築的な側面からその特徴についてまとめてみたい。

一 木津屋の沿革

木津屋は史料上、中世末頃よりその名が知られている。天正七年（一五七九）に

は、毛利氏支配下において温泉津奉行武安就安・児玉就久の両名が木津屋又左衛門に銀子五三〇目を代償として屋敷を預けた記録^一や、文禄四年（一五九五）の「木津屋与七兵衛積荷状」^二に木津屋の名前がある。これらの史料より戦国時代には、木津屋は温泉津奉行に認められた問屋として温泉津に存在したことを確認できる。また『温泉津町誌』^三には、元龜三年（一五七二）に毛利輝元が問屋とみられる小問空助に充てた屋敷の安堵状から、小問が木津屋の祖先と推測されているが^四、後の史料より、木津屋は小問の屋敷を譲渡された可能性も指摘されている。

昭和五二年（一九七七）に編纂された中嶋昭夫『温泉津中嶋家の歴史』^五によれば、中嶋家の出自は摂州大坂の木津で、大永六年（一五二六）に温泉津へ移住したと伝わる。初代木津屋は中嶋又左衛門資直（天正十七年没）とされ、その後の当主は過去帳（西楽寺）によると、基本的に「平左衛門」の名を襲名しながら近代までに十一代続いている。そのほか、森田正人『温故知新』（私家版、一九八〇年）においても、木津屋の歴史についてより詳細に調べられているが、その沿革は『温泉津中嶋家の歴史』とほぼ同様の内容である。

以上の先行調査により、木津屋中嶋家は、少なくとも中世末にはすでに温泉津町に居住して問屋を経営し、近世以降は同町の有力商家として活動したことがわかる。

二 木津屋の屋敷地

ここでは、温泉津町屋敷について記された史料をもとに、木津屋が位置した屋敷地の特定と、その後の変遷を整理してみたい（表1）。

表 1 木津屋中嶋家年表

和 暦	西暦	当主	内 容	備 考
文亀元	1501	初代	○又左衛門資直	
大永六	1526		摂州大坂木津より移住	
天正十七	1588	二代	○平左衛門高松 (高松屋へ分家)	
慶長十	1605		平左衛門屋敷所在 (十一間・六間)	『石州仁万郡温泉津村御縄帳』
元和九	1623	三代	○惣左衛門正為	
寛永十四	1617	四代	○平左衛門資氏	
寛文六	1666		木津屋屋敷所在 (筆順より確認)	『温泉津町屋敷公方事廻り帳』
元禄五	1692		町屋敷絵図 (写) の木津屋屋敷 (十間・十二間)	
宝永四	1707	五代	○平左衛門正温※ 2	
享保九	1724		土蔵新築 (棟札) 平左衛門六八歳	屋敷図①
享保十五	1730		河川屋敷取得 (四間一尺・五間半)	
元文二	1737	六代	○平左衛門保教	
延享四	1748		温泉津町大火	屋敷図② 主屋の建替え
宝暦十二	1762	七代	○宗左衛門宗宣	
寛政四	1792			『寛政四年改温泉津町屋敷帳』
寛政十	1798	八代	○市蔵	
享和三	1803	九代	○平左衛門克明	主屋上手に土堀・門・庭を 併設する改造
文政五	1822	十代	○平一資栄	
天保六	1835		屋敷図③ 屋敷図④	
安政四	1857		屋敷図⑤	
文久元	1861		屋敷図⑥	
慶応三	1867	十一代	○鉄二郎	

※ 1) 各代当主の年代は、先代の他界年とした。(中嶋家文書所収の宮原清治氏作成の年表を参考)
※ 2) 『中嶋家の歴史』の年表には「惣左衛門」と記されていたが、『温故知新』に収録された土蔵の棟札記録には五代目平左衛門と記されていたため平左衛門とした。

『石州仁万郡温泉津村御縄帳』 温泉津町の町屋敷を記した最古のものでは慶長十年 (一六〇五) の「石州仁万郡温泉津村御縄帳」(『多田家文書』、以下「慶長縄帳」と略す) には、温泉津村 (日村・沖泊・日祖・温泉津町) における当時の町屋敷の間口・奥行、居住者について一筆ずつ記したものである。当史料の屋敷地の特定はこれまでに行われておらず、具体的な様子は不明であるが六、ここでは木津屋の屋敷地に注目したい。慶長十年は、木津屋二代目平左衛門が当主であるため、「平左衛門」の屋敷地をみると、「十一間・六間」(四三筆目)と「十一間・五間」(四九筆目)がある。そのほかに、木津屋と思しき屋号が付された屋敷地は、平兵衛の「六間・六間」(きすや抱明屋敷、八三筆目)、与三右衛門の「十二間・四間」(き津や、一一八筆目)が確認できるが、名前が平左衛門とは一致していないためいずれも抱屋敷あるいは分家と考えられる。

『元禄五申年町屋敷絵図 (写)』 「元禄五申年町屋敷絵図 (写)」(『多田家文書』、以下「元禄絵図」と略す) には、本町の海岸に面した敷地 (現在の「スーパーおがわ」の敷地) に中嶋平左衛門居屋として「十間・十二間」の屋敷地が記されている (図1)。先の慶長縄帳の記載順と実際の屋敷地の位置関係は解明されていないため七、現時点で木津屋の屋敷地規模を特定できるのは元禄五年時点が最古になる。当地は裏手に温泉津川が接しており、下手は浜地、上手には高津屋増野五右衛門の屋敷地 (二八間半・十五間半) が隣接している。

また、この元禄絵図には同年の「温泉津町屋敷覚」も付録されており、この筆順をみると、上手の湯町南面の屋敷より順に記されており、この筆順は後述するように他の屋敷帳にも踏襲されている (図2)。例えば、寛文六年 (一六六六) 「温泉津町屋敷公方事廻り帳」(『多田家文書』) 八の記載順序も、元禄絵図と同様の筆順とされており、このことから木津屋屋敷の存在は史料上、寛文六年まで遡ることができる。

『寛政四年改温泉津町屋敷』 寛政四年 (一七九二) に改められた温泉津町屋敷帳(『多田家文書』、以下「寛政屋敷帳」と略す) は、元禄絵図の屋敷の記載が踏襲され、



図1 「元禄五申年町屋敷絵図(写)」トレース図
(図中の木津屋敷の破線・方位は筆者記入)

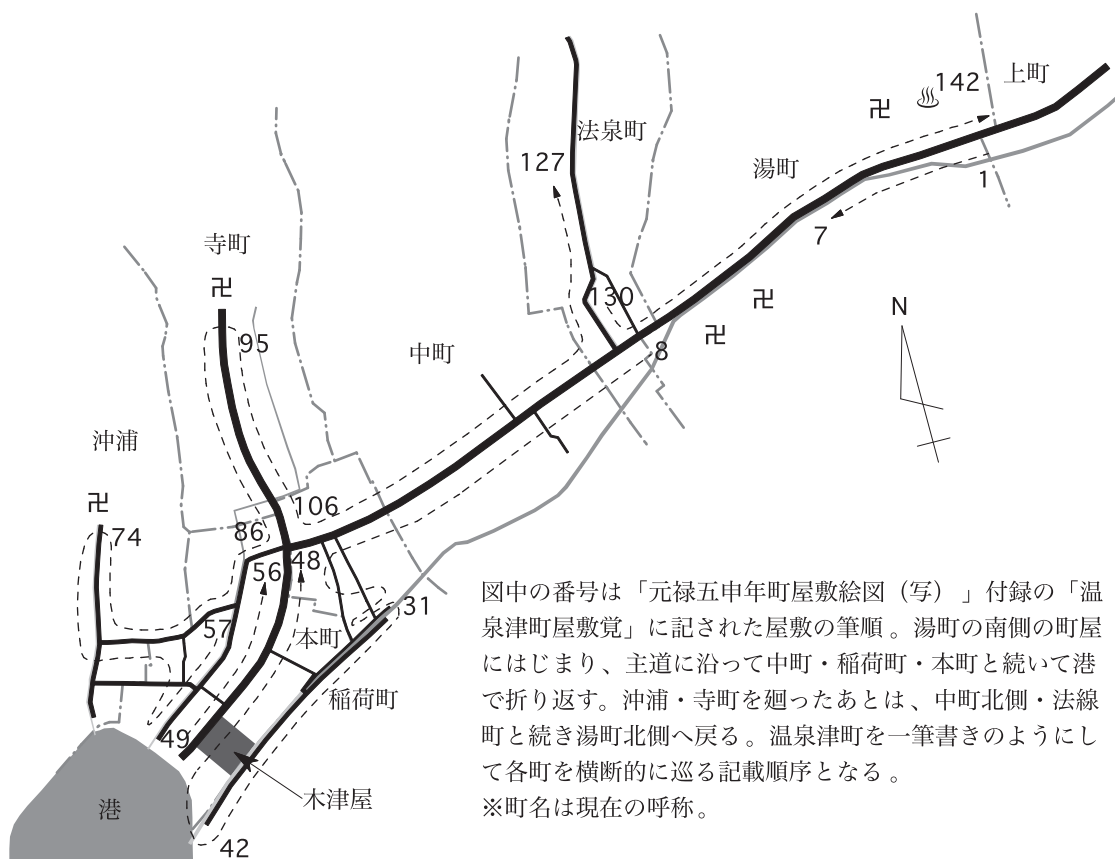


図2 「元禄五申年町屋敷絵図(写)」の記載順

元禄五年以降、寛政四年までの町屋敷の売買の記録も記されている。当史料に木津屋の屋敷に係る部分は、次のように記される。

川向蔵屋敷 往古 沓ヶ所之内 五間半 享保十八丑年
如正隠居地也 半ヶ所 四間半 買人大和や兵右衛門
同所 寛延三庚午十月 買人木津や平左衛門
同四畝歩^① 拾間 往古ヨリ持来
拾式間 中嶋平左衛門
沓ヶ所也、諸公方事無之居屋敷也

同沓反式畝拾沓歩 式拾八間半 五右衛門

半ヶ所 四間式尺七寸 享保十五戌年 売人大坂や五右衛門
拾沓間半 買人大和や兵右衛門

同延享四卯年 買人茶や林兵衛

河川屋敷半ヶ所^② 四間三尺 同十五戌年 買人木津や平左衛門
五間半

半ヶ所 表口三間五尺 享保十五年 売人大阪や

裏行拾沓間半 買人みなとや市右衛門

表屋敷 四間四尺五寸 戌年 売人高津や六兵衛

半ヶ所 四間 大坂や五右衛門

裏屋敷 三間四尺 丑年 買人梅田や儀右衛門

半ヶ所 七間川岸迄 橋本や小道

木口五右衛門屋敷沓ヶ所

河村市左衛門屋敷沓ヶ所

半ヶ所 三 間五尺 但家土蔵共 明和五子十二月証文
拾沓間半 買人 福光や傳藏

当史料によれば、中嶋平左衛門の「居屋敷^{いやしき}」は、元禄絵図の屋敷地を踏襲し十間・十二間と記される(傍線部①)。つぎに上手に続く五右衛門(大坂屋増野)の屋敷地(二八間半・十五間半)は分筆されており、そのなかに河川屋敷半カ所として四間沓尺・五間半分が享保十五年(一七三〇)に木津屋平左衛門へ売却されたことが記されている(傍線部②)。したがって享保十五年以降の木津屋の屋敷地は、間口十四間一尺(十間+四間一尺)を有したことが土地関係の史料から推定される。ただし、奥行に関しては享保十五年時には五間半のみでその奥の状況までは窺えない。

以上の土地史料により、木津屋の居屋敷は少なくとも元禄五年時には十間・十二間の規模を有しており、その後享保十五年に間口を買い足したことがわかる。また、本稿では検証できないが、元禄絵図の筆順がその他の史料の筆順とも対応している可能性が高く、このことは慶長縄帳の記載と照合することで、近世初頭の地割を解明する手がかりとなるかもしれない。さらには元禄絵図と寛政屋敷帳を比較すれば、江戸中期の約一〇〇年間の地割の変遷も解明することができる。

三 『中嶋家文書』の屋敷図の検討

つぎに、『中嶋家文書』に残される六種類の屋敷図より、木津屋の住居形態の変遷について分析したい。とくに最古とみられる屋敷図①はその作成時期が不明であるが、江戸中期以前まで遡る可能性があり、当時の商家の住居を知る上で貴重な史料といえる。

屋敷図① (図4・5) 当史料には、木津屋の屋敷に建てられた家屋平面が描かれるばかりでなく、室名や家具・道具などについても記されているため、間取りのみならず当時の建物の使い方までわかる。裏面には後筆で「元和年分」と注記されている。また但し書として「間寸之事、沓間沓寸二御座候」とあり、一間を一寸の縮尺

で作図したことがわかる。したがって当図を実測することで、概ね屋敷図の復元が可能となる（図3）。

屋敷図①から判明することは、屋敷地内において酒造を行っていたことであり、酒蔵・むろ・からうす・米蔵などは問屋よりも酒造に関連した施設である。

主屋は図面を計測するとおよそ十間半の間口を有している。その上手には一間弱（実測値では八分）の「路地」を介して「庭」（土間）と座敷からなる「隠居」棟を配している。また港側には「海辺浜」へ波よけの垣で区画し井戸と雪隠を併設する。このことから慶長縄帳記載の平左衛門屋敷の間口十一間、元禄絵図の記載の十間分は、概ね主屋部分が該当していると推測される。海辺浜への垣等の増築はこの間口に含まれておらず、また隠居棟分の五間弱の間口は、元禄五年以降の取得となり、寛政屋敷帳の記載と照合すると、屋敷図①は享保年間頃の屋敷の様子を描いたものということになる。よって図面裏への「元和年分」の注記は、主屋が建てられた年代を伝えている可能性が考えられる。

屋敷図②（図6） 当史料には、図面の両脇へ、次のように記されている。

（写真右側）

八代目中嶋市蔵祖父上蔵□□（意俣カ）置、其外

惣建替之図面祖母貫之、仍□□（写カ）也

（写真左側）

右祖父之思召ニ付酒蔵川畑引出并ニ浜ノ庚酉

申懸テ土蔵式間ニ壱間半エ土蔵建也

屋敷図②は、八代目市蔵の祖父が「惣建替」を行う際の図面と添書されていることから、図面を作成したのは六代目平左衛門によるものであることになる。具体的には屋敷図①で主屋と接続していた酒蔵を川端（川畑）へ移動し、西側（庚酉申）の土蔵（二間×一間半）を建築したことが記される。

屋敷図①と比較すると、主屋は間取りに一致する部分が少なく、間口も半間小さ

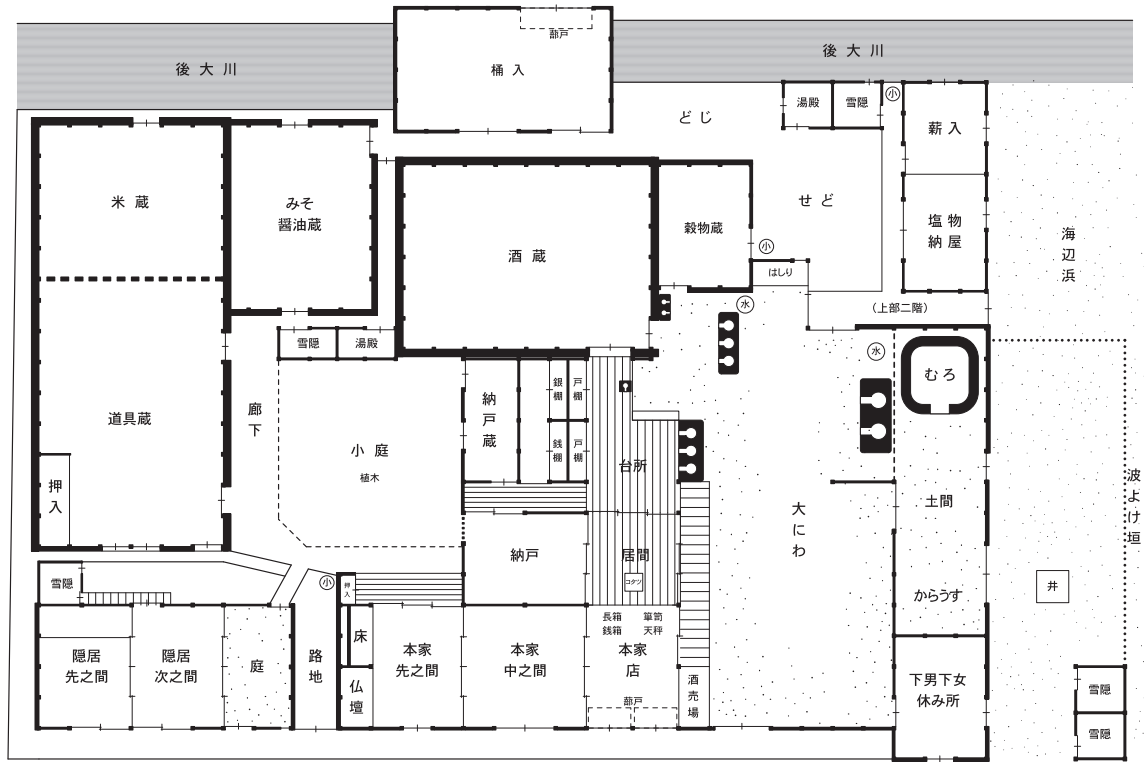


図3 屋敷図①推定復元図

い十間となる。一方、上手の隠居棟は間取りが概ね一致しているため、屋敷図②では主屋の建替えの計画図とみられる。そのほか、裏手の川沿いは貼紙した上に酒蔵、醬油蔵等を並べ下手に湯殿・髪結所・雪隠などの付属屋が並ぶ。なお、森田正夫『温故知新』によれば、中嶋家の土蔵を解体した際に発見された棟札には、享保九年（二七二四）に五代目平左衛門（六八歳）が建築したことが記されているが一〇、どの土蔵かが特定できない。

屋敷図③～⑥（図7～10）残された屋敷図はいずれも、太極に方位盤を据え図面周囲に方位が記されることから家相図とみられる。年記のあるものでは天保六年（二八三五）の屋敷図③、安政四年（一八五七）の屋敷図⑤、文久元年（一八六一）の屋敷図⑥で、図面の内容から年記のない屋敷図④をその間に順序付けた。屋敷図③では主屋と酒蔵が独立して建つが、屋敷図④～⑥ではそれぞれが連結されており、主屋西門に建つ土蔵との取り合い部に改変がみられる。また屋敷図①・②の主屋とは間取り上も大きく異なり、北東角に土塀・表門を備えた中庭を配し北東面に縁と座敷からなる接客空間が調えられている。さらには南西の海側は主屋から間口三間程度拡張され土蔵と土塀を廻らし屋敷を区画している。これらの屋敷地の拡張過程を裏付ける史料は現在のところ見いだせないものの、十九世紀前期頃までに主屋の建替えや屋敷の拡張等の改造が行われたことが推測される。また裏手の酒造蔵は梁間三間半を有し土蔵としては大規模であるが、屋敷図①・②の酒蔵の梁間（三間）と一致しないため建替えられたのかもしれない。

四 木津屋敷の変遷

前章では屋敷図を読み込み、土地史料との照合を行いつつ屋敷の変遷を整理し、各屋敷図の内容を概観した。その結果、木津屋は元禄五年以前に所有した間口十間程度の屋敷地を中心にして、各建物の建替などを契機に段階的に拡張していく過程を辿ることができた。また上手の屋敷を取得（享保十五年）した頃より、主屋両脇の

敷地を屋敷地に取り込んで各建物の増改築を順次行い、一九世紀以降、表通りの向かいに屋敷を取得し土蔵を建てたことが各史料により明らかとなった。

住居形態としては、廻船問屋として知られた木津屋の居屋敷のなかは、実態としては酒造に関連した施設を多く備えており、問屋としての倉庫は道具蔵のみであった。その他は居屋敷以外の土地で管理した（屋敷図④以降）。

各屋敷図の共通する間取り上の特徴としては、主屋の居室部に対して土間が広い。これは間口一〇間余りの大規模な主屋を有することが前提としてあるが、土間の下手に室や唐白を配したり、多くのくどを備えていることから、酒造と関係した特徴かもしれない。また、各建物はそれぞれ内部で連結されており、温泉津町の制約のある敷地条件が各建物配置に影響しているともいえる。

そのほか注目されるのは、屋敷図①・②では主屋の上手に隠居棟が並んでおり、文字通り先代の隠居部屋であったことを推測させるが、屋敷図③以降は隠居棟が撤去され、土塀・門・前庭からなる接客空間の充実が図られる点に変化がみられる。

主屋と前庭を併設する空間構成は、大森町の熊谷家（掛屋・町年寄）や青山家（郷宿）、金森家（町年寄）、温泉津町では内藤家（庄屋）などの各住宅にも共通する特徴であり、有力商家の町家形式として十九世紀前後頃より形式化したことが現存遺構からも裏付けられる。このような変化が何に起因するかは明確にはならないものの、理由を求めるならば、江戸中期頃までの商家としての営業形態から、銀山附役人や御料巡見使など、役人への応接の場として機能したと考えられる。

なお近代以降、木津屋の屋敷は中嶋家から所有を変えながら転用されてきたが（写真1・2）、昭和五十九年の火災によって主屋等が焼失し、現在残るのは土蔵の一部のみである一。

おわりに

本稿では木津屋中嶋家に関する近世史料を参考に、温泉津町の有力商家の住居形態について各時代の実態と変遷を分析した。温泉津町の有力商家は、廻船問屋のみならず酒造業や土地貸借など多角的に経営を展開したが、土地史料や屋敷図の間取りに表れており、居屋敷においても廻船問屋に特化した住居形態をとらないことが見いだされた。そもそも問屋としての建築的な特徴を定義するには、いくつか問屋の平面形式と比較が必要であり、木津屋の史料だけで判断するには限界がある。この点は『中嶋家文書』以外の史料を含め、今後さらなる検討を要する課題である。今回紹介した史料は、一部整合しない部分も残されるものの、温泉津町における当時の町家形式やそこに住まう人々の生活のあり方を伝えるものとしても大変貴重である。今後は、土地史料の内容も踏まえ、温泉津町の地割や所有者を明らかにしながら、町全体の変遷を解明していきたい。

（謝辞） 本稿の作成にあたり、各史料の翻刻は島根県教育委員会世界遺産室の清水佳那子氏にご協力いただきました。心より感謝いたします。

- 一 『温泉津町誌（上巻）』（温泉津町、一九九四年、六八〇頁）
- 二 『中嶋家文書』（『中世大田・石見銀山関係史料集』、大田市教育委員会、二〇一九年、史料番号一〇五一）
- 三 前掲注一、六八一頁。
- 四 「温泉津における商業活動の展開」『大田市温泉津伝統的建造物群保存地区保存対策調査報告書』、大田市教育委員会、二〇〇九年。
- 五 『中嶋家文書』、温泉津町誌編纂資料六八
- 六 目次謙一「近世初頭石見国温泉津にかかる土地区画関連史料検討の試み」『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書二』（島根県教育委員会・大田市教育委員会、二〇一七年）に慶長十年縄帳の記載参照。
- 七 慶長縄帳の「平左衛門」屋敷の間口十一間は、元禄屋敷図では十間とされ一間分異なるが、これは基準尺の違いによるものかもしれない。ちなみに元禄屋敷図では一間を六尺五寸で実測している（十間×六尺五寸＝六五尺）。仮に慶長縄帳の測地尺が一間＝六尺とすれば、十一間分（六十六尺）で概ね一致する。
- 八 『温泉津町誌別巻（資料編）』（温泉津町、一九九六年）の翻刻を参照。
- 九 前掲注六において比較検討がなされているが、間口規模と名字・屋号をもとに照合されているため全体としての解明には至らず、個別地割ごとの検討や湊付近の解明を今後の課題とされている。
- 一〇 同書には、当時発見された棟札の写真も掲載されており、五代目平左衛門によるものであることが視認できるが、現存しているかは不明。
- 一一 木津屋の屋敷は、その後は小川商店（タバコ屋）へと渡り、裏手の酒造蔵は吉田蒲鉾店の加工場として使用された。また、昭和五九年三月十四日に主屋は火災で焼失し、その後は現在の「スーパードがわ」として建替えられた。

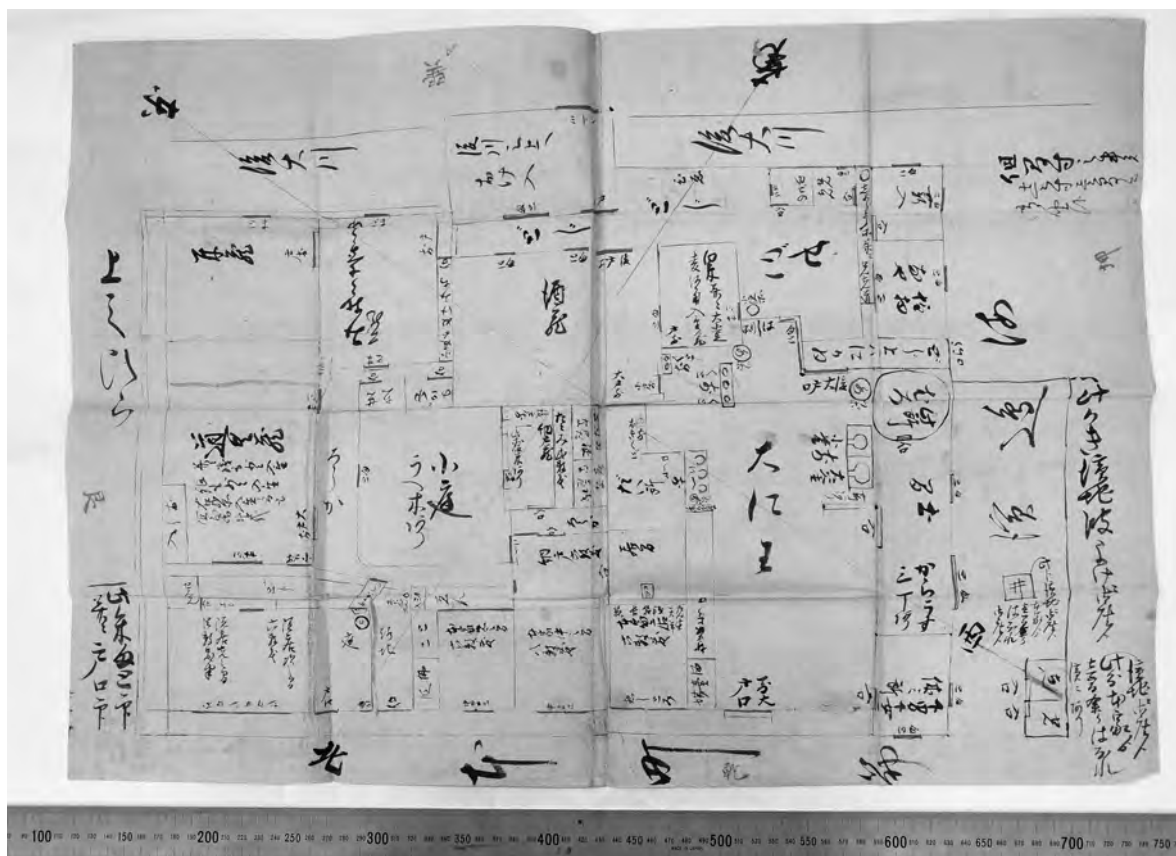


図4 屋敷図①

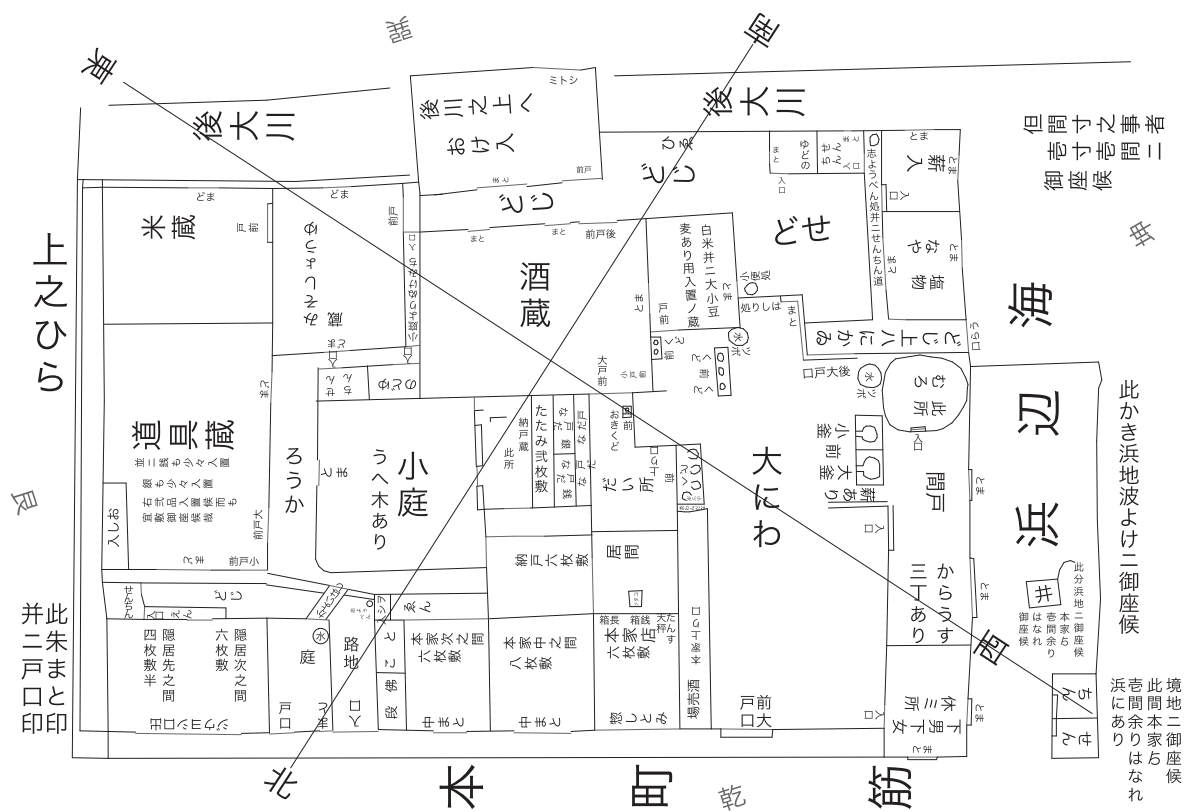


図5 屋敷図① トレース図

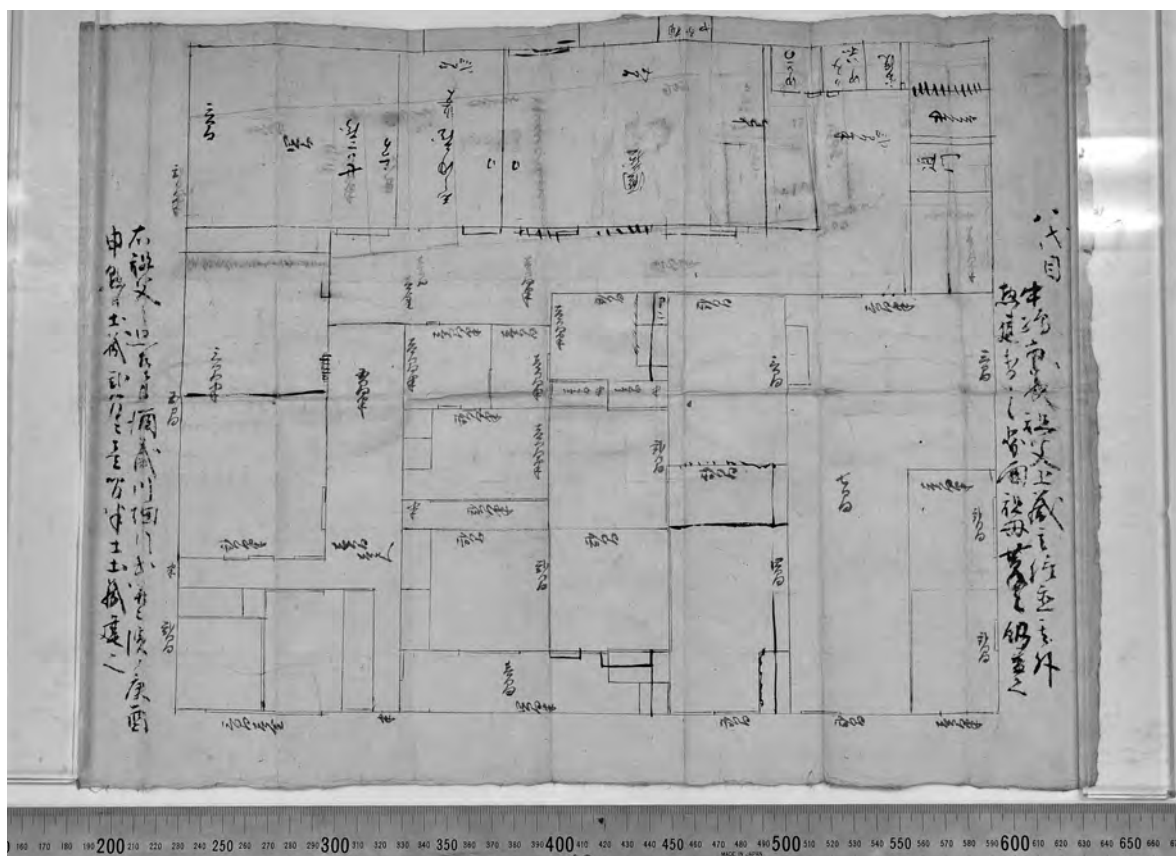


図6 屋敷図②

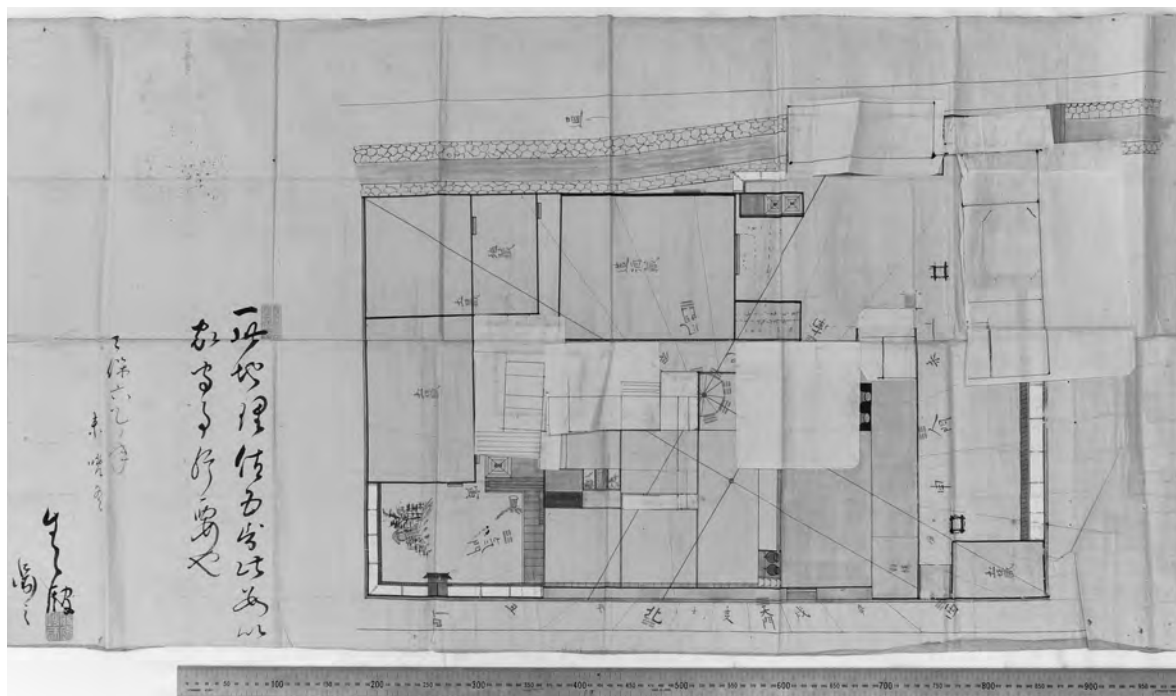


図7 屋敷図③ (天保6年)

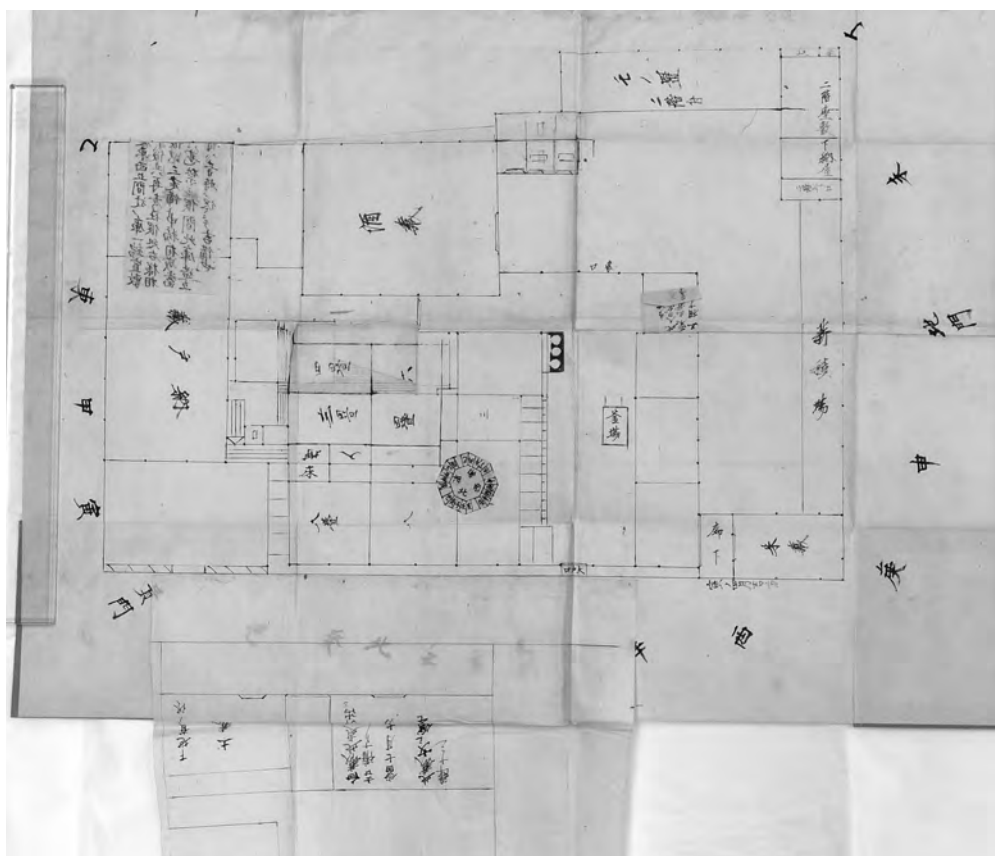


図8 屋敷図④

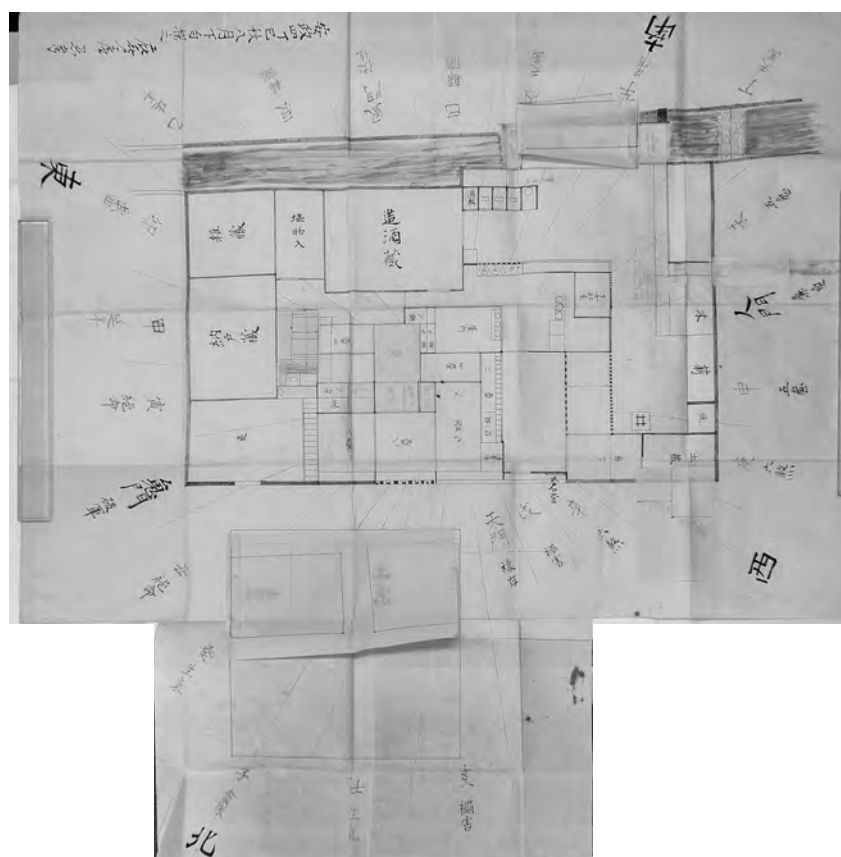


図9 屋敷図⑤ (安政4年)

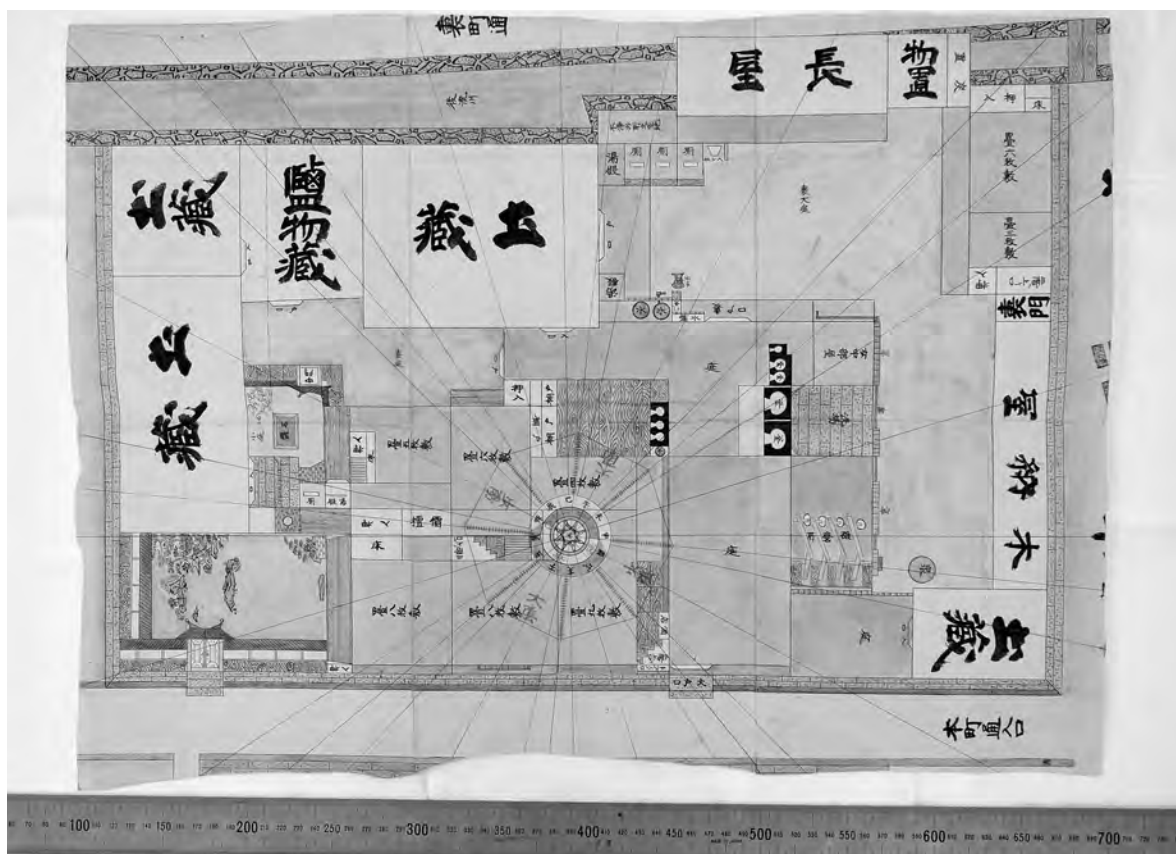


図10 屋敷図⑥ (文久元年)



写真1 昭和40年代頃の旧木津屋屋敷
(温泉津川沿い下手から見通す。手前が酒蔵で奥に見えるのが二階建の土蔵。河原秀之氏提供。)



写真2 昭和35年頃の家並み
(写真中央左上に木津屋屋敷が写る。河原秀之氏撮影。)

史料紹介 金皇寺文書所収の中世文書について

伊藤 大貴

はじめに

金皇寺^{こんこうじ}は大田市仁摩町大國に所在した浄土宗寺院である。近年無住となっていた金皇寺は、宗教法人の解散に伴って、令和二（二〇二〇）年に行われた寺院財産処分の際、新たに古文書や掛け軸・仏画・棟札などが発見された。その後、これらの史料は大田市教育委員会に寄贈されることになり、現在は石見銀山世界遺産センターにて保管されている。以下、本稿ではまず金皇寺とその古文書の概要を述べた上で、特に新出史料である中世文書五点を翻刻・紹介したい。

一、金皇寺について

金皇寺の山号は保国山。これとあわせて養寿院の院号を持っていた。本尊は阿弥陀如来である。金皇寺に伝わる諸記録によれば、もとは大國冠^{かむり}地区にあり、鳥羽山^{とりわさ}光明寺（真言宗）と呼ばれていたが、永禄年間に一時的に衰退していた。その後、元亀元（一五七〇）年に石見銀山の極楽寺住持・良休が開山となる形で現在地へ移転、再興されて浄土宗寺院になったという⁽¹⁾。

一方で一七世紀末段階での臨済宗東福寺派の寺院を書き上げた「恵日山東福寺末寺簿」には「迹摩郡大國 金光寺 今他派 開基性海見禪師」とあり、南北朝期に活動した禅僧・性海靈見を開山とする記述がある⁽²⁾。末寺簿作成時点の東福寺が金皇寺の転派情報を把握していることなどを踏まえると、末寺簿の内容は注目される。金皇寺（あるいはその前身寺院）は南北朝期まで遡る寺院であり、浄土宗以前

は臨済宗であった可能性が考えられる。いずれにせよ、石見銀山とその周辺地域では古刹と呼んでよい寺院であろう。

金皇寺に伝来した古文書の概要は後述するが、中世文書を除くと多くは一八世紀以降のものであり、一七世紀代の様相は不明な点が多いが、石見銀山・極楽寺の末寺として展開したと推測される。金皇寺の古文書から断片的に読み取れる情報をもとにすると、金皇寺の檀家は大国村だけでなく、大森町や銀山町にも存在しており、石見銀山方面との強い結びつきが見える。また、金皇寺の歴代住職は銀山の極楽寺や大森の勝源寺、仁万の西往寺などから迎い入れられていた。このように中近世の金皇寺は石見銀山の極楽寺を中心とする浄土宗寺院のネットワークの中で展開していた。その後、寛政三（一七九一）年には極楽寺の下を離れて、京都の清浄華院の直末となり⁽³⁾、近代に至ったことがわかる。

金皇寺を支えた檀家については、前述のとおり石見銀山にも存在したが、最も有力な檀家は大国村の清水家（屋号「松屋」）であった。清水家は大国村の庄屋もつとめた家柄であった。金皇寺の各種造営事業や什物などの記録を見ると、全面的に清水家が資金援助や土地・什物寄進を行っている⁽⁴⁾。また、寛政年間に金皇寺が清浄華院の直末になった際には清水家が離末札銀を支払うなどして尽力している⁽⁵⁾。

現在、金皇寺の境内には、本堂のほか、庫裏と薬師堂が残っている。地藏堂と鐘楼、山門については宗教法人解散に伴い解体された。前掲注⁽¹⁾の諸記録によれば、このうち薬師堂は別名を般若院といい、もとは鳥羽山光明寺にあった寺庵であると

いう。薬師堂に安置されていた薬師如来も光明寺から移した仏像とされる。

このほか、金皇寺の近隣には宝生庵（中世には宝生寺と呼称）、臨光庵という末寺も存在した。後に紹介するように、宝生庵は元龜三（一五七二）年に毛利輝元の安堵を受けており、中世に遡る寺庵であった。一方で臨光庵は延享年間に創建されたといい、少なくとも昭和一七（一九四二）年までは存在したようである（6）。

二、金皇寺文書の概要

金皇寺に伝えられた古文書は庫裏に残されていた。現在、本堂は屋根の一部が崩れており、内部も相当荒廃した状況であるが、庫裏の損壊状況は本堂より酷くない。本堂で発見された掛け軸などは風雨に晒されたことによる腐食や虫損・破損が甚大であったが、庫裏にあった古文書は湿気を帯びていた他は一部を除いて保存状態は悪くなかった。

古文書は庫裏の中にある一室に収められており、それぞれ木箱や籠に入れた状態で残されていた。周囲の関係者も古文書などの存在には気づいていなかったということであるから、偶然的発見であった。このように、長年周囲に気づかれることなく保管されていたようであるが、過去の住職が丁寧に整理して箱に詰めて収納していたこと、庫裏の損壊状態が他より酷くなかったこともあり、結果的に散逸を免れたと思われる。

文書は箱ごとに群番号を付した。群一は中世文書五点のほか、近世に檀家の清水家が先祖供養料などとして金皇寺や宝生庵に対して寄進した土地の証文類や正徳四（二七二四）年の寺院書上が収められている。

群二は「証文箱」と墨書のある木箱で近世の土地寄進・祠堂証文や本寺・極楽寺との離末関係書類が入っている。多くは清水家の寄進証文だが、一部に大國村の有力者・山形屋をはじめとした諸家からの寄進証文も含まれている。また、享保七（二七二二）年に起きた金皇寺領の字「海田山」にあるため池など関する草山用水

相論証文・絵図類も残っていた。この他、寛政五（一七九三年）に宝生庵の取り扱いをめぐって大森代官所などに提出した書上類も確認している。

群三は近世・近代の横帳（宝生寺田畑石付帳、金皇寺什物寛、金皇寺勘定帳など）。また、近世に本山である清浄華院、石見銀山の極楽寺などから送られた書状類や各種証文類も残っている。近世の金皇寺境内の石造物や石段の普請に係る証文の束も確認できたが、元禄九（一六九六）年・天明三（一七八三）年の普請時にはいずれも邇摩郡福光の石工が関与していたことがわかる。

群四・五は寛政三年に本山の清浄華院の直末になった際の書簡類、近代以降の金皇寺関係土地・財産関係書類が中心。特に明治時代の寺院財産書類が多いが、一部は昭和期の土地売買書類なども含む。

群六は安政三（一八五六）年の金皇寺本堂再建関係奉加帳が二点。このほかに明治初年から同三〇年代にかけての寺院財産関係公文書・古文書等目録綴が収められていた。後でも触れるが、中世文書などに関する記述も見られるため、興味深い書類綴である。

群七〜一〇は近代の金皇寺と住職家族に係った書類（各種学校の卒業証書・浄土宗関係を含む各種任免状類など）、明治期以降の金皇寺の経営に関する各種帳簿類などが中心であった。この中には大國村の篤農家・安井好尚が設立した大國英和学校の卒業証も含まれていた。なお、このほか、群八には近世文書として、宝暦三（二七五三）年に洪鐘を鑄造した際の奉加帳一点、年代不明の本堂修復入用帳や粥施行の横帳が含まれていた。

以上が今回発見された金皇寺文書の概要である。これから紹介する中世文書に加えて、近世・近代文書も多数確認できた。近世以降の文書類の分析は今後の課題であるが、金皇寺による寺領経営や造営事業（末寺を含む）、本末関係の推移、檀家との諸関係といった様々な内容が見て取れる。金皇寺については、一九七〇年代の仁摩町誌においても詳しく記されており（7）、ほぼ詳細不明の寺院であった。今

回の文書発見は大きな意義があるといえるだろう。

三、金皇寺文書所収の中世文書について

(一) 中世文書の概況

金皇寺文書に含まれている中世文書は五点である。便宜上、(一)～(五)の番号を付した上で写真と翻刻文は本稿末尾に掲載している。

文書は木箱に入れられており、近世文書を含めて、それぞれ包紙に入れられているが、すべて後世に整理された段階で付された包紙と考えられる。包紙の一部には「八月廿九日来」との朱書きと「改受」という朱印が見える。古文書原本を何らかの形で外部に提出した際に記された可能性もあるが、現時点でどのようなやり取りを指すのか不明である。

群六にある近代の浜田県や大國村役場など役所との間で交わされた公文書の綴りには近世の除地の由緒を指す史料群として認識されていたことがうかがえる⁽⁸⁾。また、明治二〇年代に内務省が古社寺の調査をした際に金皇寺が提出した宝物古文書目録にも中世文書の一覧が見える。さらに明治二八(一八九五)年に東京帝国大学が史料編纂事業を開始した際にも大國村役場から古文書等目録を提出するように通達されているが、今のところ外部の史料調査が入った形跡は見当たらない。加えて『旧島根県史』などの自治体史にも未紹介であり、基本的に外部にはほとんど知られることもなく今に至ったようである。

(二) 中世文書の紹介

次に文書ごとに内容紹介をしていく。まず、(一)の毛利輝元安堵状は金皇寺ではなく、宝生寺あてに発給された文書である。宝生寺は後に宝生庵と呼称されて金皇寺の末寺になっている。寛政五年に金皇寺が大森代官の菅谷弥五郎宛てに差し出した文書によれば、既にこの時点で金皇寺側が(一)の文書の存在に言及している

ため⁽⁹⁾、近世後期には金皇寺が所持していたのであろう。(一)の発給年次は、元龜三年二月一日であるが、同じ日付で毛利輝元は石見銀山周辺の寺社宛てに相次いで安堵状を発給している⁽¹⁰⁾。(一)もそのひとつと考えられる。前年に毛利元就が亡くなっており、代替わりに伴う安堵であらう。

(二)の吉川元春安堵状は金皇寺宛ての発給文書である。「拘分」の「般若院」は先述したとおり、現存する薬師堂の別名である。少なくとも天正九(一五八一)年時点で金皇寺の末寺に組み込まれていたことがわかる。天正年間の時点で金皇寺の所在する大國村は吉川氏領であった⁽¹¹⁾。吉川元春が金皇寺に安堵状を発給したのも領主の立場に基づくものであろう。

(三)の吉川氏奉行人連署打渡状も(二)と同日付で一緒に発給された文書である。これにより金皇寺(般若院分含む)が二町六段半(一七石一斗四升)の寺領を持っていた様子が確認できる。連署している花押を確認すると、但馬守が伊賀田春法、木工允が井上春佳、因幡守が朝枝高明である。いずれも元春の下で活動した吉川氏家臣である。

(四)は文禄四(一五九五)年の年次を持つ打渡状である。署判者の南湘院は毛利氏の石見銀山奉行・佐世元嘉の配下として石見銀山支配に関与した人物である。石見銀山を支配していた毛利氏は文禄三(一五九四)年に「銀山御改」という石見銀山膝下寺社の所領整理を行っている⁽¹²⁾。その際にいくつかの寺院に対して打渡状が発給されており、南湘院も署判している事例が見られる⁽¹³⁾。さらに文禄四年一月には邇摩郡西田村の寺社に対しても打渡状が発給されており⁽¹⁴⁾、(四)は金皇寺宛て単独で実施されたというよりも銀山御改から続く打渡行為の中で理解できるだろう。毛利氏の寺社領整理はまず文禄三年に石見銀山から始まり、翌年には順次周辺地域へ拡大していった様子が見て取れる。

また、(四)によれば、この時の金皇寺は寺領五石とされており、(二)・(三)の段階よりも削減されている。なお、近世の金皇寺の寺領も引き続き五石と定められ

ており、元禄五（一六九二）年の「石州銀山附寺社領帳」には寺領の由緒を示す証文の存在が記されている⁽¹⁵⁾。今回、中世（近世）にかけての寺領の由緒を物語る文書の原本を確認できたことは大きな成果である。

もうひとつ注目したいのは、南湘院は毛利氏の銀山奉行の配下であった点である。

(二)・(三)の文書は吉川氏が発給していたが、(四)は毛利輝元直下の佐世元嘉に連なる人物が発給しており、性格が異なる。銀山周辺の吉川氏領は天正一九（二五九一）年の吉川氏領再編を境に配置替となり、銀山周辺の邇摩・安濃両郡は毛利氏の直轄領化されていた。(四)の打渡状を佐世元嘉配下の南湘院が発給している点などを踏まえると、文禄・慶長年間の毛利氏の邇摩・安濃両郡支配は銀山奉行と代官衆によって担われており、大田村も石見銀山を中心とする支配体制下に組み込まれたのだろう。銀山奉行による在地の直接把握が進んでいることが見えてくる。(四)は支配者の変遷をうかがえる手がかりといえる。

(五)の年貢請取状は慶長五（一六〇〇）年の付年号を持つ史料である。綿貫主税助という人物は文禄三年に周防国の兄部氏に対して魚物座安堵の文書を発給しているほか、備後国三上郡に約二〇石の給地を持つ毛利氏家臣であった⁽¹⁶⁾。しかし、石見銀山とその周辺地域は、慶長五年九月の関ヶ原の戦い後に徳川氏直轄領となっており、同年一二月時点で毛利方の人物が請取状を発給した点は注意を要する。その一方、同年一〇月段階で毛利氏の銀山代官衆が地下検見を行っている事例が確認できるため、毛利氏が退去する前に先に徴収していた年貢の請取状であることが考えられる⁽¹⁷⁾。ただし、「慶長五」と記された位置や墨の色の様子から追記された可能性も排除できないため、今後の検討課題としたい⁽¹⁸⁾。また、(五)には「延弘」や「延米」といった付加税の額も記載されている点もあわせて興味深い。なお、(五)は補修のために裏打ちされており、金皇寺が重要な文書として保存に努めていた形跡がある。

以上、金皇寺文書に含まれる中世文書五点の紹介を行った。戦国期の金皇寺の寺

領や末寺の存在、年貢収納の具体的な内容が分かる文書が残っていた。このような実態はこれまで十分に知られておらず、毛利輝元や吉川元春といった上級権力から安堵を受けていたことも今回明らかになった。また、(四)の南湘院打渡状は文禄・慶長年間の毛利氏による石見銀山支配の一端を示す史料として貴重な内容を伝えている。

おわりに

本稿では今回発見された金皇寺文書のうち、中世文書五点の紹介を行った。筆者は別稿で石見銀山極楽寺の良休とその弟子たちによる教線が温泉津・仁万方面に拡大した点を述べたことがあるが⁽¹⁹⁾、良休を開山とする金皇寺は中でも最も早い元龜年間の段階で末寺化されており、仁万方面へ教線を拡大する上での最前線として位置付けられていたと思われる。別稿執筆段階では本文書群の存在は把握できていなかったが、戦国期の金皇寺に関係する文書が発見されたことにより、戦国期の金皇寺の実像が少しでも明らかになったのではないかと思う。

ただし、金皇寺文書は中世文書五点に続く一七世紀代の比較的古い段階の文書が乏しいという特徴がある。中世から近世へどのように金皇寺が展開したのか、いまだ不明な点が多い。さらに金皇寺文書には過去の歴代住職の記録が見当たらず、住職の系統を復元することができなかった。良休以後の法統についても課題が残っている。

このように、本稿では史料紹介を優先したため、詳細な分析や研究面での課題が残っているが、いづれにせよ、石見銀山周辺の寺院文書としては貴重な文書群が発見されたことには変わりない。金皇寺自体は石見銀山境内に所在するわけではないが、金皇寺文書からは石見銀山の極楽寺との本末関係や銀山町・大森町における檀家の存在が見えてくる。金皇寺も石見銀山を軸とする浄土宗寺院の秩序や地域社会の中で展開していた寺院といえる。今後の石見銀山にかかる文献調査では寺院史料

の把握や調査研究の深化という課題を踏まえつつ、石見銀山とのつながりを有した周辺地域の寺院にも視野を広げていく必要がある。

最後になるが、金皇寺は現在、宗教法人を解散し、土地と建物を国有化する手続き中である。既に報道もされているが、全国初の事例という⁽²⁰⁾。無住寺院の問題は今になって明るみになった問題ではないが、人口減少などにより地域社会が変容する中で金皇寺のような事例は今後続出することが想定される。今回は関係者のご理解により古文書類を保存できたが、人知れず朽ち果てる寺院も多く、文化財の盗難被害の事例も散見される。今回の金皇寺文書の事例は、今後の文化財の悉皆把握や保全の重要性といった課題を我々に投げかけているといえよう。本稿は史料紹介に終始したが、このような課題を受け止めつつ、調査研究を進めていかなければならないことを指摘して擲筆したい。

【注】

- (1) 「寺院財産等諸記録」(群五・一)、「保国山養寿院金皇寺縁記」(群五・一三)、「金皇寺由緒書」(群三・六〇) など。また、前出史料によれば、少なくとも戦前までは金皇寺に良休の肖像画が存在したとされるが、現在の所在は確認できていない。なお、本稿で引用した文書名・史料番号は仮に付したものである。
- (2) 「恵日山東福寺末寺簿 古牒」(東京大学史料編纂所蔵・貴一・四)。
- (3) 京都の清浄華院の直末になった際のやり取りについては「金皇寺随誉書状」(群四・一)、「清浄華院直末証状」(群四・二) など。また、「直末願書扣」(群五・二) にも関係史料が筆写されている。
- (4) 例えば、願主が判明する近世の棟札の中には「清水治郎右衛門増徳、清水徳三郎敬徳」の名前が見える(安永九年九月「宝生庵再建棟札」)。また、天明四(一七八四)年には清水治郎右衛門によって涅槃図が寄進されている(涅槃図外箱墨書銘)。

- (5) 銀山極楽寺との本末関係解消に伴う礼銀支払いは清水家が行っている(相渡申銀子請取手形之事」群二・一など)。
- (6) 「臨光庵財産目録」(群五・五〇)。
- (7) 仁摩町誌編さん委員会編『仁摩町誌』(仁摩町役場、一九七二年、八六九頁)。わずかに棟札についての言及があるのみで古文書の所有には触れていない。
- (8) 「寄附取調書上帳」(群六・一)。本史料には、明治二〇年代に内務省が古社寺の調査をした際に金皇寺が提出した宝物古文書目録、明治二八(一八九五)年に東京帝国大学が史料編纂事業を開始した際に大田村役場から古文書等目録を提出するように指示された通達文なども綴られている。
- (9) 「乍恐書付を以奉願上候」(群二・四・四)。
- (10) 竹内因幡守に温泉郷神主職を安堵した「毛利輝元袖判安堵状」(中世大田・石見銀山関係史料集」六八七号) など。なお、『中世大田・石見銀山関係史料集』から引用する場合は「中世大田」と略記する。
- (11) 銀山御改の詳細については、長谷川博史「毛利氏支配下における石見銀山の居住者たち」(池享・遠藤ゆり子編『産金村落と奥州の地域社会』岩田書院、二〇一二年) 参照。
- (12) 「吉川元長領地付立」(中世大田九七五号) には「大田三方」と記されている。また、天正一一(一五八三)年八月に吉川元春は大田村にある石見八幡宮の造営を「大檀那」として行っている(「石見八幡宮棟札」中世大田八六五号)。
- (13) 例えば、石見銀山の長安寺(現・豊栄神社)に対して寺領一五石を付与したことを伝える「林元善・佐世元嘉連署書状案」(中世大田一〇四二号)、長安寺領の打渡坪付は「南湖院・高須元与連署打渡状写」(中世大田一〇四六号)などを確認できる。
- (14) 「湯三方村清源寺領付立写」(中世大田一〇五七号)。
- (15) 拙稿「石州銀山附寺社領并隠岐国寺社領について」(鳥根県教育委員会編集・

発行『石見銀山歴史文獻調査報告書一五 石見銀山附地役人阿部・河島・宗岡家文書目録』二〇二〇年。

- (16) 「綿貫実尚(カ) 安堵状」(『山口県史 史料編 中世』兄部家文書一九号)、岸浩編『資料 毛利氏八箇国御時代分限帳』(マツノ書店、一九八七年、二五七頁)。

- (17) 慶長五年一〇月、毛利氏銀山代官衆の高須元与・飯田彦兵衛両名が邇摩郡湯里村にて「地下検見」を行ったとある(「湯里神主式部大夫ほか書上」東京大学史料編纂所蔵影写本・竹内家文書五号)。

- (18) 井上寛司氏には、二〇二〇年一〇月一四日に石見銀山世界遺産センターにて調査指導を受けた。その際に「慶長五」の部分が追筆の可能性を指摘されており、要検討課題としたい。

- (19) 拙稿「石見銀山周辺の浄土宗寺院と毛利氏」(『島根史学会会報』五八号、二〇二〇年)。

- (20) 「住職不在、管理できず 金皇寺、初の国有化へ」(『山陰中央新報』二〇二〇年一月二八日)、「後継者いない島根県大田の寺が国有財産に 宗教法人法施行後初のケース」(『中国新聞』二〇二〇年二月一日)などの記事参照。

【付記】

金皇寺文書の調査・保存については、西往寺住職・林啓碩氏、金皇寺檀家総代・大谷久夫氏の多大なご高配を賜りました。また、調査指導に際しては、井上寛司氏のご助言を賜りました。なお、寄贈にあたっては、大田市教育委員会の協力を得ました。記して厚く御礼申し上げます。

【金皇寺文書(中世分) 翻刻】

【凡例】

一、本文については原本に従って改行した。
一、本文には適宜、読点(、)を施した。
一、本文のうち、破損により判読できない箇所は一文字につき□で示した。また適宜、右横に()で補足を加えた箇所がある。

(一) 毛利輝元安堵状

石州大國村之内宝生寺

事、任先例執務不可有相

違之状如件、

元龜三年二月一日 輝元^(毛利)(花押)

宝生寺

(二) 吉川元春安堵状

大國之内金皇寺并拘分

般若院分等之事、如前々全知

行肝要候、仍一行如件、

天正九年十二月十日 元春^(吉川)(花押)

金皇寺

(三) 吉川氏奉行人連署打渡状

打渡 大国内金皇寺領

一田式町三段半 分米拾五石四斗四升

般若院分

一田三段 分米壹石七斗

以上田数貳町六段半、分米拾七石壺斗四升、
右打渡如件、

天正九年十二月十日 但馬守（伊賀田春法）（花押）

木工允（井上春佳）（花押）

因幡守（朝枝高明）（花押）

金皇寺

（四）南湘院打渡状

打渡

前田

田三段半 米三石貳斗 金皇寺

ウルシ原

田壺段 米壺石壺斗五升 同寺

かうこいわ四所合

畠壺段半 代六百五拾文 同寺

以上五石代方共

門前

屋敷 壺ヶ所 善右衛門

以上

右之前打渡所如件、

文禄四年正月六日 南湘院（花押）

金皇寺

（五）綿貫主税助年貢請取状
納 大國村金皇寺年具之事

合四石三斗六升七合四勺定

外二五斗四升五合九勺、但右之手数

筵弘延米共、但石二壺斗貳升五合宛

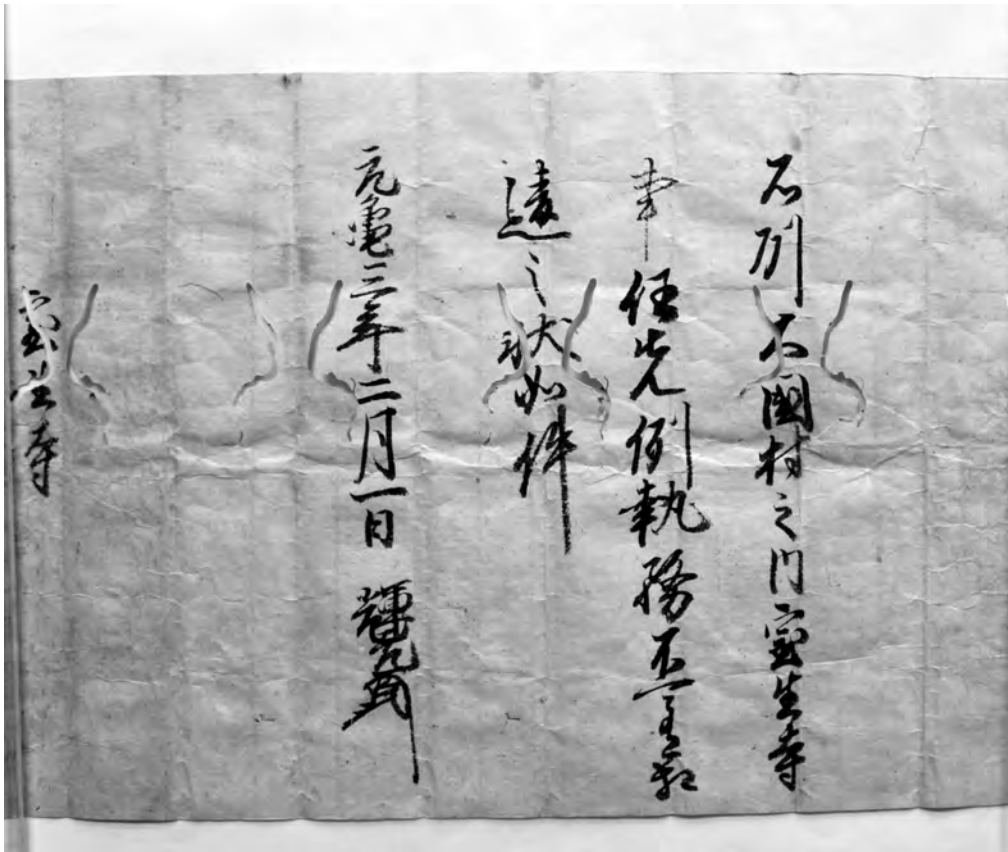
猶外二壺斗三升壺合壺勺三才、

但石二三升宛ノ□□請取申所如件、

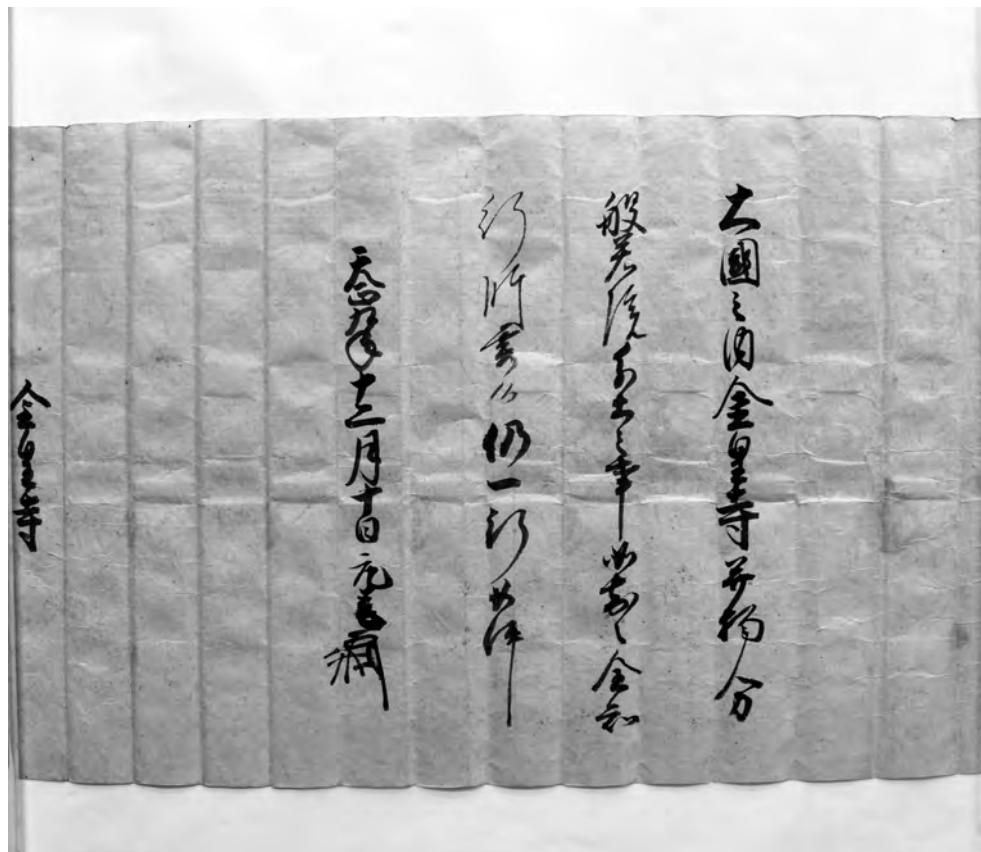
慶長五十二年廿六日 綿貫主税助（実尚カ）（花押）（黒印）

金皇寺

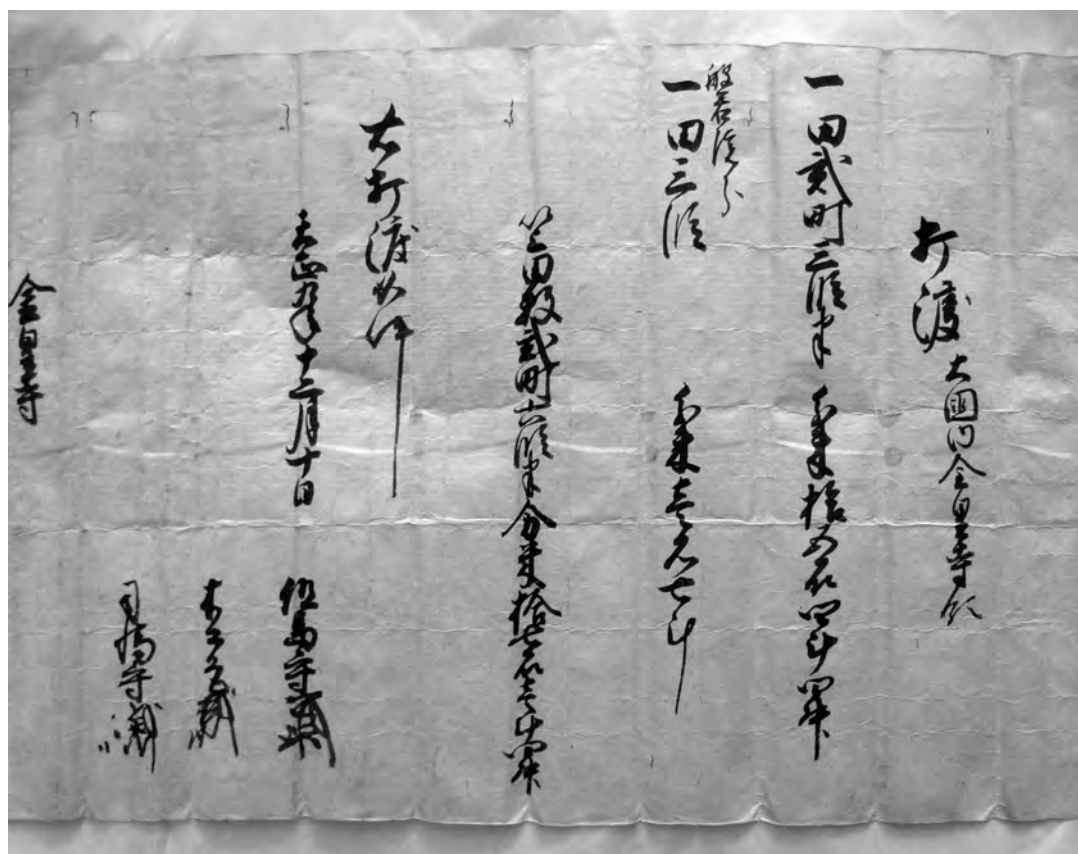
参



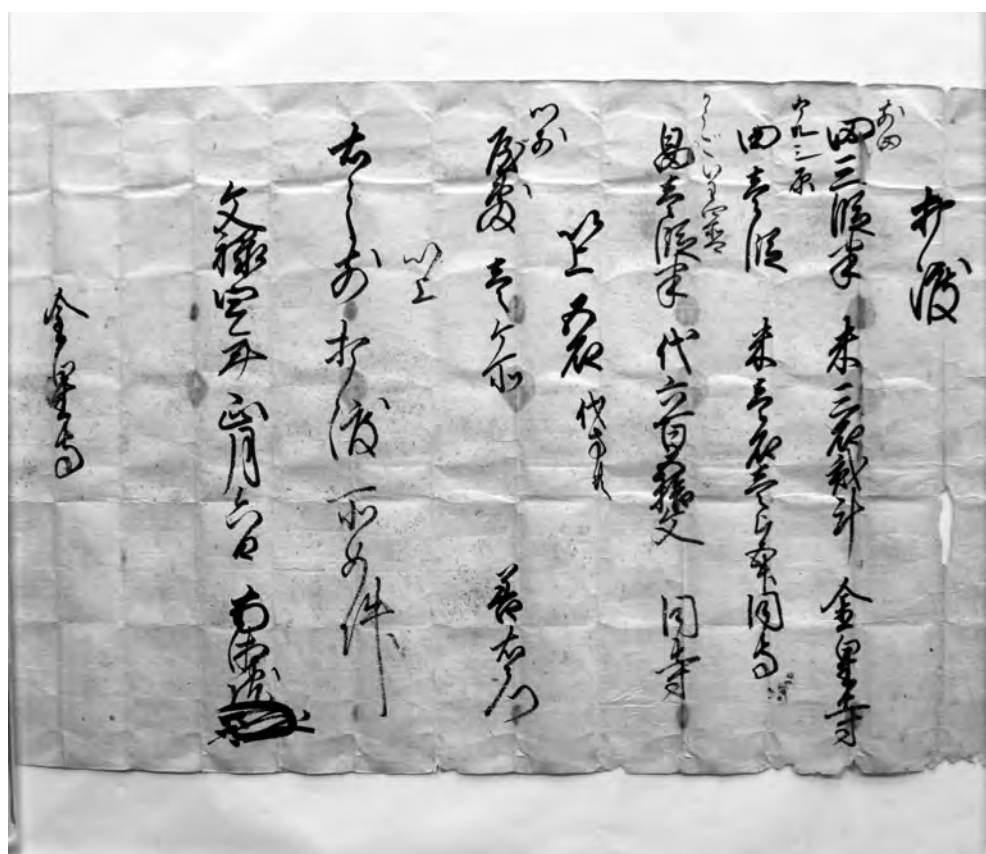
【写真 1】毛利輝元安堵状



【写真 2】吉川元春安堵状



【写真 3】 吉川氏奉行人連署打渡状



【写真 4】 南湘院打渡状



【写真 5】綿貫主税助年貢請取状



【写真 6】中世文書の包紙

史料紹介 島津屋口番所文書目録

伊藤 大貴
清水佳那子

はじめに

江戸時代の石見銀山料内の主要街道や港には口番所と呼ばれる番所が設置され、銀山附同心が交代制で駐在して様々な業務に従事した。その一つが石見・出雲両国の国境に所在した島津屋口番所（石見国安濃郡仙山村）である。島津屋口番所には関連文書が伝来しており、現在では大田市教育委員会が所蔵している。本稿では島津屋口番所に関係する文書目録を紹介したい。

文書の概要

本稿で紹介する文書群は「御用書類箱」と呼ばれる木箱に収納されていた。近年まで大田市朝山まちづくりセンターで保管されていたが、それ以前の伝来の経緯は不明であるという。現在では大田市教育委員会の所蔵となり、石見銀山世界遺産センターにて保管されている。

本文書群に含まれる史料の一部は、既に『石見銀山歴史文献調査報告書12 島津屋口番所関連史料』（島根県教育委員会、二〇一六年）にて翻刻されている。島津屋口番所における文書管理の問題や口番所の機能などについては、藤原雄高・矢野健太郎両氏の考察に詳しい⁽¹⁾。

島津屋口番所文書に含まれる「番所書物留」（史料番号二七）などの概要についても既に前掲報告書にて紹介されており、本稿では重複を避けるため、それ以外の

史料について述べておく。

先に述べたように、島津屋口番所は出雲国との国境に位置する番所であり、国境管理という性格を持ち合わせた番所であった。本史料群の中には、国境に目印として植えられた松木や国境の杭の管理に関する松江藩役人との往来書状などが一括して残されている（史料番号一一～一八）。松木の立ち枯れにより現地の村役人の立会の下で新たな松を植えた事例、杭に落書きが発見された際の対応といった具体的な国境管理の様子がうかがえる内容である。他に「嘉永二酉年 国境五本松大風ニ吹折れ書状并ニ境杭ニ楽書書状」との上書を持つ中身の無い袋が存在するが（史料番号三一）、もとは袋に一括して口番所で管理されていたのであろう⁽²⁾。

また、国境・交通の要衝という性格から松江藩から青駄送りが到来した際の書状類も残されていた（史料番号二三、二四・二、二五）。中身はないが、「口田儀在番掛合書状之類」などの上書がある袋が存在しており、松江藩側との折衝に関する文書類は一括して保管されていたようである（史料番号三二）。

その他、島津屋口番所の木戸口の差図や酒井雅楽頭が製造した異国形の帆船の差図といった図面類も興味深い（史料番号一～三）。口番所の有した機能・役割に係する文書としては、仙山・神原・才坂・波根東村といった周辺地域からの諸運上の納入に関する覚・請書類、抜荷一件に関する申渡書、唐荷抜荷改めに関する書付写や手板雛形なども残されている（史料番号四・五・九・一〇・二〇）。また、才坂村内の山における炭焼の覚、才坂村の炭焼人が出雲国佐津目の鉦に出入りしていた件

などを記した申送書、仙山村の腰林から出雲国口田儀村の鉦に木を売却した際の島津屋口番所在番・安藤六郎太の添状などの諸史料も島津屋口番所周辺の生業や国境を超えた出雲方面との繋がりが見えてくる内容である（史料番号二三―二五）。

おわりに

本稿で紹介した文書群は、石見銀山料内に複数存在した口番所の実態を伝えるものとして貴重である。島津屋口番所の場合、出雲国との国境ならびに日本海沿岸部に位置するという地理的環境に置かれていた。かかる特徴を踏まえた上で他の口番所との比較を行う必要もあるだろう。本稿では目録公開を優先したため、十分な身の吟味を行うことができなかった。このように様々な課題が残されているが、ひとまず擧筆することにした。

なお、本稿の「はじめに」・「文書の概要」・「おわりに」は伊藤が執筆した。文書目録の作成・編集は伊藤・清水が行った。

【注】

（１）藤原雄高「解題「番所書物留」について」（『石見銀山歴史文獻調査報告書12 島津屋口番所関連史料』島根県教育委員会、二〇一六年）、矢野健太郎「島津屋口番所における御定書の伝達と文書管理」（前掲報告書）。

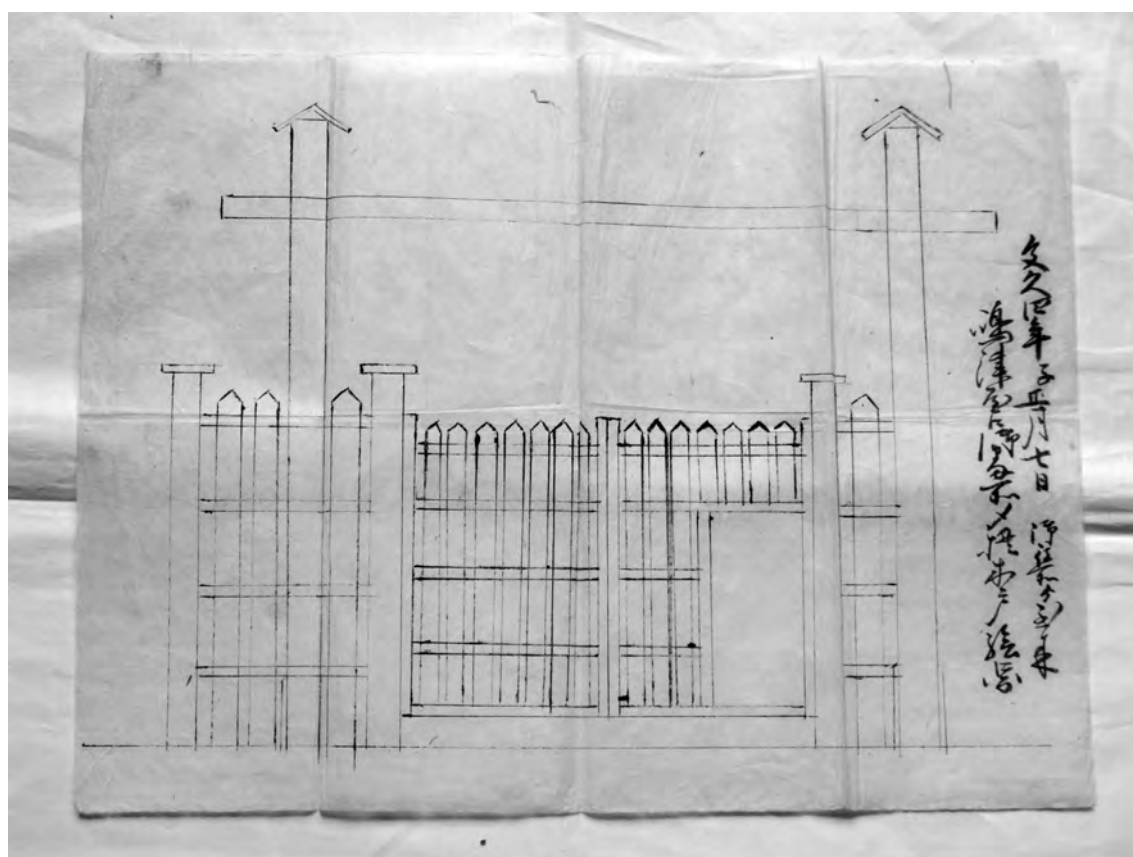
（２）一紙物の史料の多くは、端裏書に「壱」「二」「三」といった漢数字が記入されており、口番所で文書管理・整理を行う際に付された番号と考えられる。文書管理の実態については前掲（１）矢野論文参照。



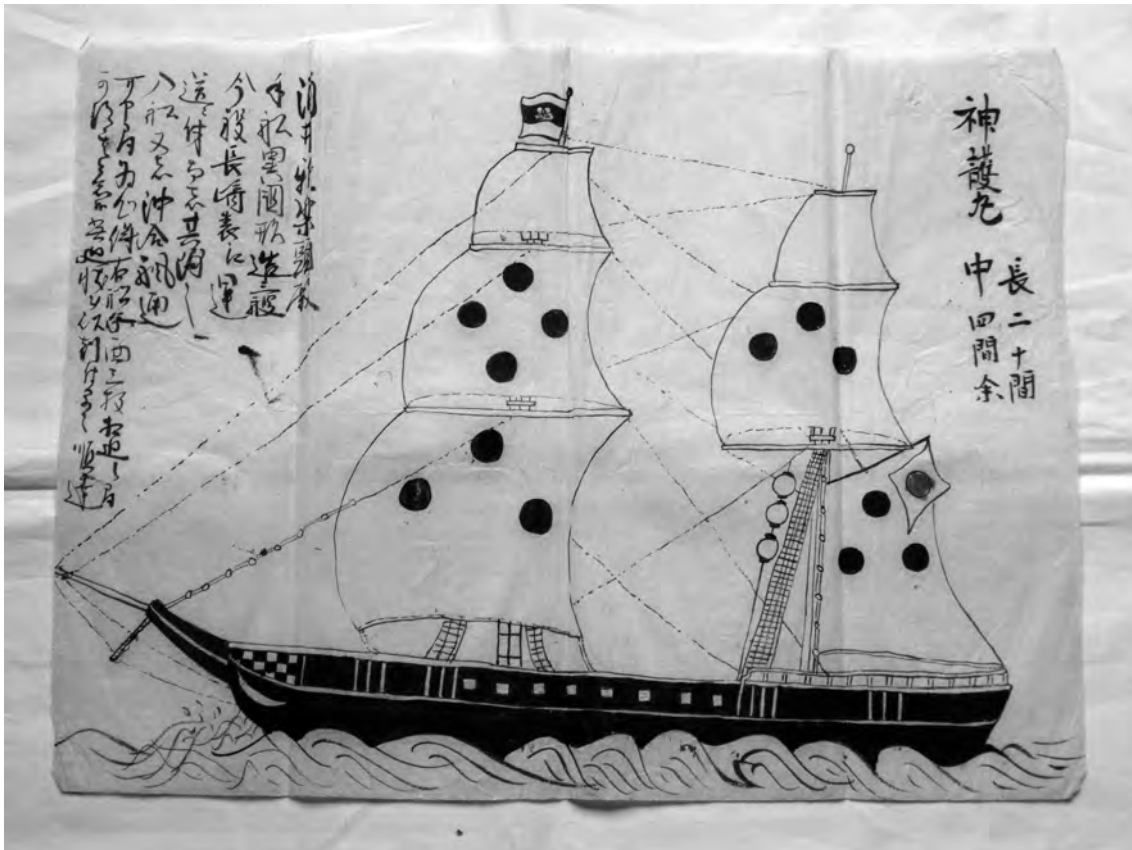
【写真1】島津屋口番所文書が収められていた木箱



【写真2】木箱の蓋と底面の墨書



【写真3】嶋津屋口御番所バ横木戸絵図（史料番号1）



【写真4】酒井雅楽頭の手船（異国形造）のひとつ神護丸の絵図（史料番号2）



【写真5】文書袋の一例（史料番号32）

（なお、破損により開披した状態で撮影している）

〔凡例〕

一、目録記載項目については、以下のとおりである。

(一) 文書の史料番号

本目録での番号は仮に付与したものにすぎず、分類区分に基づく番号ではない。整理上枝番を付したものは、「21」のように表している。

(二) 表題および文書名

文書に表題記載のあるものはそのまま記述した。表題のないものは、内容から判断できるもののみ適宜文書名を「」内へ記入し付している。また、文書内容を補足する場合は（）内へ記入した。写・控は文書名に含めた。

(三) 年月日

各文書に年代が記載されている場合はそのまま採用し、推定年代等は（）内へ記入している。年月日表記にはアラビア数字を用い、年号に続く干支はそのまま記入している。年号が分らない場合は「年未詳」とした。

(四) 作成者および宛先

記載にあたり、作成者が三名以上となる場合は、人名などを三名まで記入し、「ほか○名」と略記した。

(五) 形態

一紙文書は原則として「一紙」と表記した。冊子は形態に応じて「竖帳」などと記載した。また、袋・包紙も一点と数えて形態に記した。なお、木札については「その他」と記した。

(六) 点数

文書の数量を記入している。

(七) 備考

以上の(一)から(七)の各項目以外で、文書にかかる情報を記述した。なお、

袋の上書・一紙物の端裏書などもここに記載した。

一、目録記載項目の表記に関しては、以下のとおりである。

(一) 目録中の項目記載にかかる史料の翻刻にあたっては、原則として新字体の利用で統一した。ただし、人名・地名については旧字体のままとした場合がある。

(二) 適宜並列点(・)を加えた。

(三) 文字が判読できない箇所は一文字につき□で表した。

島津屋口番所文書目録

番号	表題 (文書名)	年月日	作成者	宛所	形態	点数	備考
1	嶋津屋口御番所ノ横木戸絵図	文久4年 子正月7日			一紙	1	「御役所へ到来」とあり
2	[神護丸絵図]	(年月日未詳)			一紙	1	酒井雅楽頭の手船(異国形造)3艘の内の1艘、長崎へ運送のため入港および海上通行の通達
3	[金花丸絵図]	(年月日未詳)			一紙	1	酒井雅楽頭の手船(異国形造)3艘の内の1艘
4	差上申御請書之事(嶋津屋浦字鼻操大敷場を雲州口田儀村小三郎下請により運上銀上納の儀につき)	元治2丑年 4月	大敷 仙山村 順助(印)、同 嶋津屋浦 猶吉(印)、同 半七(印)	嶋津屋口 御番所	一紙	1	袋あり、(奥書)「仙山村庄屋孫兵衛 嶋津屋浦頭百姓幸四郎」
5	覚(諸運上銭銀取立につき)	酉11月	川市之進		一紙	1	(端裏書)「嶋津屋口」,(奥書)「中西与左衛門 宗岡喜三兵衛」,文書管理について記した付紙あり、本紙焼け
6	[触](浦々取締方の儀につき)	申11月	岩鉄三郎		一紙	1	本紙焼け
7	覚(難破船の節役銀取立方の儀につき)	午11月	大源右衛門(印)	島津屋口 番人中	一紙	1	
8	[触](浦々取締方の儀につき)	午8月	森八左衛門		一紙	1	本紙焼け、破損あり
9	申渡(技荷及び荷主不埒の儀につき)	申10月30日	柳原平蔵、阿部弥平太、坂本 瀬兵衛ほか4名	仁万船表、大浦船 表、島井船表、波 根船表、島津屋口、 右御番人中	一紙	1	
10-1	申送書(才坂村炭焼人の出雲国佐津日鉦への出入り、才坂村にて温泉津吉左衛門が鍛冶屋稼ぎいたし出雲国より鉦を取り寄せている件につき)	辰9月	藤井泰蔵(印)	藤井種蔵	一紙	1	10-1～10-4は袋にて一括
10-2	[定書](城米および私領送米等破船の節歩一取立の儀につき)	戊4月	天野助次郎		一紙	1	

番号	表題 (文書名)	年月日	作成者	宛所	形態	点数	備考
10-3	差上申御請書之事 (請運上銭取立の儀につき)	安永6年 丁酉12月	仙山村百姓代 安右衛門(印)、 同頭百姓 幸十郎(印)、同長 頭百姓 幸三郎(印) ほか1 名	島津屋口 御番所	一紙	1	
10-4	差上申御請書之事 (請運上銭取立の儀につき)	安永6年 丁酉12月	神原村百姓代 和四郎(印)、 同頭百姓 又四郎(印)、同 宗八(印) ほか1名	島津屋口 御番所	一紙	1	
11	【書状】(国境目印松立ち枯れにより、村役人立会の下で代わりの松を植える件につき)	(嘉永2年) 5月17日	竹内久右衛門(花押)	安藤六郎太	一紙	1	包紙あり、(包紙上書)「口田儀番所 竹内久右衛門→嶋津屋御番所 安藤六郎太」、付紙①(5月18日付返書控、安藤六郎太→竹内久右衛門)、付紙②(5月18日付書状控、安藤六郎太→神原村役人中)
12-1	【書状】(境杭築書の件につき)	(嘉永2年) 8月14日	土屋市郎右衛門(花押)	河野多左衛門	一紙	1	12-1～12-4は包紙にて一括
12-2	【書状】(石雲境五本松のうち1本吹き折れにつき)	(嘉永2年) 酉12月2日	河嶋三郎右衛門、田中弥太夫、 野沢茂富	池亀喜多次	一紙	1	(端裏書)「三、(端裏貼紙)「石雲境五本松吹き折之儀相伺候処、御用状并二仙山村役人呼出之上請書写巻冊到来之事」
12-3	【書状】(石雲境分杭廻りの五本松のうち1本、先月23日の大風にて吹き折れにつき)	(嘉永2年) 11月4日	竹内久右衛門(花押)	福岡仙一郎	一紙	1	付紙(11月4日付返書控、福岡仙一郎→竹内久右衛門)あり
12-4	【書状】(石雲境分杭廻りの五本松吹き折れにより村役人の立会見分依頼、枯松の処分方法等の相談につき)	(嘉永2年) 11月24日	竹内久右衛門(花押)	福岡仙一郎	一紙	1	付紙(11月24日付返書控、福岡仙一郎→竹内久右衛門)あり
13-1	【書付】(国境の目印松の立ち枯れの件、新たな松を植える件の書類につき)	(嘉永2年カ)			一紙	1	断簡カ、13-1と13-2は包紙にて一括、(包紙上書)「口田儀番所 竹内久右衛門→嶋津屋御番所 安藤六郎太」、包紙と中身一致せず

番号	表題 (文書名)	年月日	作成者	宛所	形態	点数	備考
13-2	[書状] (境杭の楽書について明日村役人の立会見分を依頼につき)	(嘉永2年) 11月20日	池亀喜多次	竹内久右衛門	一紙	1	(端裏書)「弐 返書控」、(端裏貼紙)「嘉永二酉年十一月廿日口田儀村役人代甫平与申もの上番竹内之書面持参ニ付返事」
14-1	[書状] (石雲境杭の楽書を村役人立会の下で洗い落とす件につき)	(嘉永2年) 11月20日	竹内久右衛門 峯 (花押)	池亀喜多次	一紙	1	14-1と14-2は包紙にて一括、(端裏書)「荅」、(包紙上書)「口田儀番所 竹内久右衛門→嶋津屋御番所 池亀喜多次」
14-2	[書状] (石雲境杭の楽書を村役人立会見分につき)	(嘉永2年) 8月14日	河野	土屋	一紙	1	(端裏書)「二」、(端書)「返状控」
15	奉差上御請書之事 (先般風折れた雲州国境の五本松は口田儀村地内のため、仙山村側は関与しない旨につき)	(嘉永2年) 西12月朔日	仙山村庄屋 助左衛門	大森御役所	縦帳	1	(端書)「三」
16	[書状] (石雲境杭の楽書を去冬と同様に村役人立会の下で洗い落とす件につき)	(嘉永2年) 4月3日	竹内久右衛門 (花押)	土井誠大夫	一紙	1	付紙あり (4月3日付返書控、土井誠大夫→竹内久右衛門)
17	[書状] (石雲境木の楽書を村役人立会の下で洗い落とす件につき)	(嘉永2年) 8月14日	河野多左衛門	口田儀番所 土屋市郎右衛門	一紙	1	
18	[書状] (石雲境の五本松のうち、大風にて吹き折れた松1本の処理と村役人の立会につき)	(嘉永2年) 12月8日	池亀喜多次	竹内久右衛門	一紙	1	(端裏書)「四 返書控」
19	御廻米置米買受米通不順為替米等御役銀取立取計一件	文化13子年 正月			縦帳	1	(端書)「五」
20-1	[唐物手板雛形]	(年月日未詳)			縦帳	1	20-1～20-15は袋にて一括、(端書)「十六」
20-2	[唐物手板雛形]	(年月日未詳)			縦帳	1	(端書)「十六」
20-3	[唐物手板雛形]	(年月日未詳)			縦帳	1	(端書)「拾六」
20-4	[唐物手板雛形]	(年月日未詳)			縦帳	1	(端書)「拾六」
20-5	唐物抜荷改方御書付写	文化4年 卯6月	中場代吉		縦帳	1	年月日、作成者は表紙記載分を採録

番号	表題 (文書名)	年月日	作成者	宛所	形態	点数	備考
20-6	[唐物手板雛形]	(年月日未詳)			一紙	1	(端裏書)「十六 唐阿蘭陀荷物落札商人江市中之者ゝ赤間ヶ関江差送候手板之形」
20-7	[唐物手板雛形]	(年月日未詳)			一紙	1	(端裏書)「拾六 唐阿蘭陀荷物落札商人并市中之者ゝ赤間ヶ関江差送候巻手板之形」
20-8	[唐物手板雛形]	(年月日未詳)			一紙	1	(端裏書)「十六 唐阿蘭陀荷物落札商人并市中之者ゝ諸国江差送候手板之形」
20-9	[唐物手板雛形]	(年月日未詳)			一紙	1	(端裏書)「十六 唐阿蘭陀荷物国用二付落札商人ゝ売渡手板之形」
20-10	[唐物手板雛形]	(年月日未詳)			一紙	1	(端裏書)「十六 唐阿蘭陀荷物落札商人ゝ買請候市中之者自分持越候手板之形」
20-11	[唐物手板雛形]	(年月日未詳)			一紙	1	(端裏書)「十六 唐阿蘭陀荷物落札商人ゝ継飛脚を以京大坂堺江差送候手板之形」
20-12	[唐物手板雛形]	(年月日未詳)			一紙	1	(端裏書)「十六 唐阿蘭陀荷物落札人并市中之ものゝ諸国江売廻差遣候手板之形」
20-13-1	[唐物手板雛形]	(年月日未詳)			一紙	1	20-13-2 綴じ込み、(端裏書)「十六 唐阿蘭陀荷物落札商人ゝ品荷率領を以京大坂堺江差送候手板之形」
20-13-2	[手板裏書雛形]	(年月日未詳)			一紙	1	
20-14	[手板裏書雛形]	(年月日未詳)			一紙	1	(端裏書)「十六 三ヶ年相満候古手板書添之形」
20-15-1	[唐阿蘭陀荷物堺廻船手板突合印鑑]	(年月日未詳)	(印)		一紙	1	20-15-1～3 は包紙にて一括、(包紙上書)「唐物手板突合印鑑」
20-15-2	[唐阿蘭陀荷物海陸諸国送手板突合印鑑]	(年月日未詳)	(印)		一紙	1	

番号	表題 (文書名)	年月日	作成者	宛所	形態	点数	備考
20-15-3	[唐阿蘭陀荷物大坂廻船手板突合印鑑]	(年月日未詳)	(印)		一紙	1	
21	役銀取立覚	寛延3年 午11月	天野助次郎		縦帳	1	
22	御番所勤方定書	宝暦6子正月			縦帳	1	
23	[書状] (雲州より青駄送りの儀につき)	(年未詳) 12月20日	宗岡喜市郎 (印)、中西与左衛門 (印)	河野多左衛門	縦帳	1	(端書) 「四」
24-1	[覚] (才坂村田幸山の久手浦小兵衛持山にかかる炭焼高につき)	辰壬6月	日平御鑑		一紙	1	24-1～24-6は袋にて一括、(端裏書) 「志」
24-2	[来状・返状・送状覚] (石見国那賀郡宇野村淨西の青駄送り一件につき)	(年未詳) 9月27日			一紙	1	(端裏書) 「志」、口田儀番所土屋市郎右衛門と島津屋口番所河野多左衛門の書状やり取りならびに島津屋口番所より郷田村までの送状写し
24-3	口上覚 (糶役上納の件につき)	宝暦3年 西正月	波根東村糶や伝兵衛 (略印)、証人目代平右衛門 (印)	島津屋 御番所	一紙	1	(端裏書) 「三」
24-4	[添状] (仙山村腰林より雲州口田儀村の鉦へ焼木売払につき)	巳11月2日	安藤六郎太	大賀覚兵衛、野沢左源太、福本乙兵衛ほか1名	一紙	1	付紙 (巳11月2日付地役人連署書状、塩谷八代太郎ほか3名→安藤六郎太) あり、(端裏書) 「四」 ○仙山村腰林口田儀村江売払度旨願ニ付添手紙写、右御免状とも続添ニいたし志通]
24-5	[触] (灰吹銀等の他所への販売停止、銀道具銀細工停止の儀につき)	(西) 8月27日	大伊勢守、松帯刀、一周防守ほか2名		一紙	1	付紙 (西9月27日付地役人連署書状、鹿野弥五兵衛・丸茂宇右衛門→嶋津屋口 林政右衛門) あり、(端裏書) 「五」
24-6	差上申一札之事 (因州鳥取への荷物通行差留につき)	天保12年 丑6月	大田南町六左衛門 (印)、立入人嶋津屋惣兵衛 (印)	島津屋口 御番所	一紙	1	
25	嶋津屋口送り者一件	安永3年 午11月	河野多左衛門 (印)	次 御番人衆中	縦帳	1	(端書) 「五」

番号	表題 (文書名)	年月日	作成者	宛所	形態	点数	備考
26	綿弓弦之儀二付申送書	文政3年 辰3月	内坂勝太 (印)	後之 御詰合中	一紙	1	付紙 (弘化5年申3月付書状、内坂勝太→御詰合中) あり、表紙と本文中の作成月に相違あり
27	番所書物留	文化8末年	島津屋口		豎帳	1	(端書)「番外」
28	御用留	(文化11年～ 元治2年)	島津屋口		豎帳	1	
29	[包紙]	(年月日未詳)			包紙	1	(包紙上書)「巷 一二三 境杭ニ 梁書掛合状三通入」
30	[包紙]	(年月日未詳)	野沢茂富、河嶋三郎右衛門	池亀喜多次	包紙	1	(包紙上書)「御用」
31	[袋]	嘉永2酉年			袋	1	(袋上書)「嘉永二酉年 国境五本 松大風ニ吹折れ書状并ニ境杭ニ 梁書書状」「巷印二ツ、弐印一ツ、 三印二ツ、四印一ツ」
32	[袋]	(年月日未詳)			袋	1	(袋上書)「口田儀在番掛合書状之 類」ほか多数記載あり
33	[仙山村人足札]	(年月日未詳)			その他	1	

【補足】 島津屋口番所文書はもと木箱入り。木箱蓋表面墨書「御用書類箱 島津屋口」、木箱底面墨書「御用箱 島津屋口附」・「是者天保十三寅年二月、寺本儀八勤番之節調」とある。

世界遺産石見銀山遺跡の調査研究 11

Iwami Ginzan Silver Mine Site Research 11

編 集 島根県教育委員会（松江市殿町1番地）
大田市教育委員会（大田市大田町大田口1111番地）

発 行 島根県教育委員会
島根県教育庁文化財課世界遺産室（TEL0852-22-5642）
URL <http://www.pref.shimane.lg.jp/sekaiisan/>

発行日 令和3（2021）年3月31日

印 刷 株式会社 報 光 社

